手に手をとって

婚約者のエンカウンター

ガイド・ブック

ガブリエル・カルボ 著

HAND IN HAND
ENGAGED ENCOUNTER
GUIDE
BY
GABRIEL CALVO

FIRES, Inc. 1425 Otis Street N.E. Washington D.C. 20017 U.S.A.
(C)GABRIEL CALVO 1995

＊著作権法によって、本書あるいはその一部を、著者からの書面による許可なしに複製することは、いかなる手法によるものでも禁じられています。

本書では、日本聖書協会の許可を得て「聖書　新共同訳」（日本聖書協会発行1987年度版）を主に使用いたしました。（場合によってHAND IN HAND本文より適宜訳出している部分もあります）

目次

巻頭のことば　1
はじめに　5

婚約期間　9

さまざまな流行の波
ワークブックとして活用するために　12
婚　約　13
婚約までの段階　15
婚約の危機　17
婚約を健全で優れたものにする秘訣　19
きわめて重要かつ欠かせない質問　25
励ましになる証しの声　27
賢明な勧め　28
友情のあつき手紙　30
結婚の備えができているか知るため　32
誓約としての婚約　34

自己との出会い　37

われ思う「わたしは　だれ？」と
1　自己に気づく　39
2　自己に正直である　41
3　自己を尊重する　43
4　自己を知る　45
5　自己を理解する　47
6　自己を評価する　49
7　自己を信頼する　51
8　自己の決断　53
9　自己実現　55
自己をコントロールする　57
自己をオープンにする　59
自己の超越性　61

婚約するには

婚約しているわたしは　だれ？　63
I　互いに愛し合うために　64
1　愛の意味　65
2　結婚前のふたりの愛を識別するために　67
3　愛することを学ぶために　70
II　互いに尊敬するために　72
1　人間のもつ性的特質　73
セクシュアリティ
2　純　潔　75
3　ほんものの愛なら、待ちます！　77
III　お互いに関わっていくために　79
ふたりの関係チューンアップするには　80
ふたりの衝突を創造的に利用するには　82
IV　深く通じ合うために　84
心からの通じ合い　85
対　話　87
V　最高の親友同志になるために　89
ふたりの友情をはぐくむには　90
相互に信用と信頼をもつには　92
VI　和解を体験するために　94
相手にゆるしを願い　95
自分もゆるしてあげるには　97
おすすめの提案　99
VII　互いによりよく知り合うために　100
お互いについて学ぶには　101
相互の受け入れ　103
VIII　ともに成長するために　104
お互いの成熟さを高めるには　107
婚約したカップルとして　109
成長するには　111
IX　幸福をともに待ち望むために　113
幸せな結婚をめざして
幸福な夫婦になるには

X　スパイラルの開かれた心で　115
手をさしのべていくために　115
よりオープンなカップルになるには　116
愛の証し人になるには　118

カップルから超越していく婚約

三者で生きるために　121
I　信じるために　122
神　人が探し求める神秘的対象　123
II　一緒に神を探し求めるために　125
トビアとサラ　126
一緒に神に向かっていくには　128
III　婚約したカップルとして　祈るために　129
祈るには　130
婚約したカップルとして　祈るために　132
IV　神のみことばに　134
心から聴き分かち合うために　135
神のみことばに聴くには　137
神のみことばを通して　分かち合うには　139
V　結婚に関する神のご計画を　発見するために　140
驚嘆に値する聖書の啓示　141
神の呼びかけを識別するには　143
VI　神の愛を体験するために　144
神の愛についての内省　145
神の愛の証し人になるには　147
VII　神とわたしたちで　三者になるために　148
ナザレトのイエス生ける神の御子　150
三者になるには　152
VIII　「主において」結婚するために　154
希望である婚姻の秘跡　156
神からの結婚の召命

Ⅸ　キリスト者としての
婚姻の祝宴に向けて　158
励みになる証し　159
私たちの結婚式を計画するには　161
Ⅹ　キリスト者の家庭を
築きあげるために　163
キリスト者の家族の姿　164
キリスト者の家族を築くために
呼ばれたなら　166

おわりに
著者について
ＦＩＲＥＳのプログラム
日本語版あとがき

巻頭のことば

カールとヤミール・スターク夫妻

ぼくの名はカールといいます。オーストラリア出身で、ユダヤ人の家系に生まれました。妻ヤミールの先祖はレバノン人で、カトリックです。ふたりの出会いのきっかけは、英語の授業でした。

一家がヒトラーによってウィーンを追われ、コロンビアに移住しなかったら、ぼくがヤミールと出会うこともなかったと思います。

英語の授業のときも、もし彼女がぼくに話しかけてくれなかったら、結婚はありえなかったはずです。とても恥ずかしがり屋なので、ぼくから話しかけることなどありませんでしたから。

一目ぼれ？　偶然？　それとも、神のご計画？

ふたりのつきあいは、そう簡単にはいきませんでした。結婚の準備期間中、家族がアメリカに引っ越すことになり、ぼくもついていかざるをえなかったのです。ふたりのつきあいは手紙のやりとりによって続けられました。やがて、ぼくが朝鮮戦争に従軍したとき、かつてなかったほどにふたりの愛は試されました。

もう二度と彼に会うこともないし、自分は捨てられたのだと、ヤミールは思いこんでいました。ほかの人との結婚に踏み切ろうとしていました。

しかし、神は、ぼくらに対するちがうご計画をもっておられたのです。神はぼくに、ヤミールの心をしっかりとつかむことができるような手紙を書かせてくださいました。こうして、結婚を申し込み、彼女は承諾してくれました。

ついに結婚するその日まで、ぼくらは丸三年会っていなかったことになります。

結婚生活のはじまりは、なまやさしいものではありませんでした。ぼくらはお互いにたいへんよく知り合っていて、ふたりのロマンスは、なんともすばらしい永遠のものと思いこんでいました。

しかし、理想と現実のギャップに気づくのにそう時間はかかりませんでした。結婚はぼくらが思い描いていたような永遠の楽園どころではないと、わかってきました。

何年も手紙でのやりとりをしていたものの、ふたりの通じ合いは、表面的なものにすぎませんでした。欠点と弱さを含め、ありのままの姿を互いに知ったのです。

最悪だったのは、毎日おきる仲たがい――しばしば、それは仲たがい以上のものでした――をどうすればいいかについて、何の準備も、訓練も、指導も、受けていなかったことです。それで、深く愛し合ってはいるはずなのに、お互いに幻滅しはじめたのです。

こうして、幻滅することは、結婚生活では普通のことなんだと納得するようになりました。

このような状況は幸せとはいえません。でも、どうしてよいのか、わかりませんでした。

◇　◇　◇

わたしヤミールは、主に祈り、神が私たちを見捨てたまわないよう願いました。

わたしたちの主に感謝です。主は、この祈りを聴いてくださいました。

わたしたちはニュー・ジャージーに引っ越しました。そして、そこで出会ったある夫婦が、わたしたちをマリッジ・エンカウンターへと誘ってくれました。マリッジ・エンカウンターとは、結婚している夫婦のための集いで、主に週末に行われます。ガブリエル・カルボ神父様がその創立者です（*1）。

（*1）一九六一年、ガブリエル・カルボ神父は、何組かの夫婦らと共に、スペインでマリッジ・エンカウンターを創立する。これを皮切りに、「主において一致した家族」をその目標として、約二十種類に及ぶＦＩＲＥＳ（ファイアーズ）プログラムが続々と生まれる。婚約者のエンカウンターは、そのひとつ。

ＦＩＲＥＳ（ファイアーズ）とは、

FAMILY（家族）

INTERCOMMUNICATION（通じ合い）

RELATIONSHIPS（関係）

EXPERIENCES（体験）

SERVICES（奉仕）

の頭文字をとったもので、「家族は、深く通じ

合い、ふさわしく関係を活かすならば、すばらしい体験が得られ、そのときこそ、真に奉仕するようになる」との意味。

マリッジ・エンカウンターをすでに体験した夫婦たちと自分たちとのきわだった違いが見えてきて、ふたりは心に決めました。それは、週末を一緒にすごすこと、そして、チームとして奉仕しておられる夫婦たちが分かち合ってくれたことを受け入れることでした。

マリッジ・エンカウンターは、教会の黙想会とは違います。それなのに、自己を発見しお互いと出会うなかで、わたしたちは、夫婦のただ中におられるイエス様を見いだしました。

この週末をすごしたおかげで、ふたりの暮らしの空しさが満たされただけでなく、自分たちの生活を人に分かち合うことによって幸せを見いだす方法、また愛のスパイラル（*2）になる秘訣も教えられました。

（*2）スパイラル（らせん）＝円は閉じたものであるのに対し、らせんは開かれたもの。限りなく上昇し広がっていく。ふたりだけの世界に閉じこもらず、他者に愛を分かち合う開かれた関係になることが、「愛のスパイラルになる」の意。

いいかえると、わたしたちは、神様がふたりの結婚にもっておられたご計画を発見したことになります。

この発見がきっかけで、ほかの夫婦の方々ともいろいろ分かち合いをするようになりました。

わたしたち夫婦は、婚約者のエンカウンターを喜んでお手伝いするようになりました。いろいろな犠牲が当然伴うのを重々承知していながらもこうしたのは、結婚する前にこのような体験をすることがいかに大切か痛感していたからです。婚約者のエンカウンターとは、みなさんのような結婚を考えているカップルのための集いです。

そういうわけで、カルボ神父様が書かれたこの新しい本に、わたしたちは熱い想いをよせています。もっとよりよく通じ合うことを心から望む婚約者の方々のための本です。お互いを深く知り、他に代えがたいきずなを築きあげていくためのものです。

いってみればこの本は、おふたりともに愛に溢れた結婚をおくり一致し開かれた家族になっていくための、ガイドともいえるでしょう。

かまえる必要などありません。章を進めるうちに、みなさんは手をとって導かれていきます。

カルボ神父様の本の構成はすばらしいものだと、わたしたちは思います。婚約者・夫婦・家族らのため、彼らと共に歩んだ四十一年におよぶ司牧が、この本の土台となっています。

もっとはやいうちにカルボ神父様に会えたら、どんなによかったでしょう。しかしそれにしても、彼に会えるよう主は導いてくださいました。

みなさんも彼に出会えるよう、神は導いておられます。ですから、わたしたちは神を賛美します。

はじめに

ガブリエル・カルボ

「わたしに、てこの支点を与えよ。
そうすれば、世界を持ちあげてみせよう」
アルキメデス

社会に平和がないのは、家庭に平和がないからであると、私は確信しています。科学的に証明もでき日常生活を分析してもわかることですが、人間に生ずる大多数の問題は、家庭内の関係（きずな）に、深さ・重要さ・愛が欠けていることに端を発しています。

現代の多くの夫婦が、結婚前永久の愛を誓いながらも、式が終わってみれば挫折し不幸にあえぐ自分たちの現実に直面します。なぜ、その数は増加する一方なのでしょう？　なぜ、結婚が失敗に終わるのでしょうか？

原因として考えられるのは、ふたつだけです。自分にはあわない人間を配偶者にしてしまったと、当事者双方とも思いこんでしまうため。もうひとつは、配偶者として互いを認めはするが、その関係を満足させる際必須の適応能力に欠けるため。どちらの原因にせよ、この落とし穴は、防ぐことができます。

社会学者、心理学者、精神科医、神学者といった専門家の見解は、現代の多くの個人やカップルが不幸になるのは結婚の準備が不足しているから、ということで一致しています。

しかし、結婚のための健全な準備は長く辛い道のりであり、カップルのほとんどが足を踏みいれることさえありません。「わたしたちはだれ？」「どこから、ふたりの旅を始めるのか？」「わたしたちはどんな旅人か？」「この旅路を歩むため、どのような条件が必要か？」「どこで、旅の足を休めたいか？」「私たちの目的地はどこか？」、こういった内容は、結婚という道のりを始めるにあたって、是非とも考えておかなければならないことです。

婚約者として、夢と目標をよく見きわめたうえで、理想を追及していかなければなりません。己を高めていける真の力を人がもっていることを忘れず、きわめ

て現実的に生きることも必要です。その気になれば、人には、人生の多くの障害を克服する能力が備わっています。

人間には限界があります。完全な人などいません。肉体、情緒、知性、道徳、さらにまた信仰といったどの分野にせよ、進歩と実現のため、そのアイデアと条件のすべてを掌握できる人はいません。神の恵みは、すべての人のためにあります。しかし、神は、人間の自由を尊重し無理強いしません。だれもが切望しているにちがいない究極の目標に到達させようと、人間が「自ら進んで」協同するよう、神は招いておられます。完成された人間、神の忠実な肖像（うつしえ）になっていくようにと。

聖書の驚くべき啓示によれば、男と女は「神の肖像（うつしえ）として創造されました」。形をもち有限の人間性の限界の中に、神と似て神を映しだす可能性をもつ男と女。

男と女は、結婚と家族に向けて、旅路の歩（ほ）を共にしていきます。それぞれの性に特徴づけられる性質と限界を有しています。異なる家族に生まれ、異なる教育を受け、性格と個性をかたちづくる異なる体験を経てきました。

婚約者同士なのですから、互いに愛し合う傾きを奥深く秘めています。互いに魅力を感じ、まことの友情を求め、共に幸せになる望みを抱いています。しかし同時に、今後の成長と愛にとって深刻な妨げとなりうる、自己本位な傾きをもっています。

みなさんは異なった人間同士です。性も、教育も、個性も、家庭環境も、長所も、限界も、それにおそらく信条も異なっていることでしょう。

にもかかわらず、みなさんは、

◇同じ目標へ向かって共に歩んでいきたい。

◇将来の結婚と家族のため、通じ合いの頑丈な土台を築き上げたい。

◇生涯つづく真の愛と真の結婚を実現することで、幸福を見いだしたい。

◇お互いを、人間として、男と女として、夫と妻として、父と母として、さらに神の子として見守りたい。

◇すべての違い、すべての限界があってなお、これらすべてを獲得したい。

なしとげるべき課題は、たやすいものではありません。しかし、人生の最重要課題です。目標は高いが、達成できないことではありません。

結婚と家族の創造主であられる神は、みなさんの味方です。人間としての力には限度があっても、みなさんの中には神の愛のエネルギーが存在しています。

おふたりの中にあるのは、神秘に満ちた、生命と愛のスパイラル（＊）で、放出されなければなりません。新世代の未来は、おふたりの旅路をみなさんが共にいかに歩むかにかかっています。

（＊）スパイラル→巻頭のことば（*2）を参照。

この本――実際はワーク・ブックです――は、婚約者という立場にあるみなさんが、「自分自身」「神」「お互い」「人々」と通じ合う際、そのガイドとして役に立つようにと書いたものです。

このワーク・ブックを最高度に利用し、その目標に到達するためには、みなさんの積極的な決心が必要です。

＊毎日やります。読み、内省し、祈り、書くために自分だけの時間を作りましょう。

＊毎週やります。お互いに分かち合うため、ふたりで充実した時間をすごしましょう。

このワーク・ブックには、情報が満載されています。あせらずにゆっくりと、考え、分かち合い、計画してください。みなさんならではの独自の機会になるはずです。

おふたりの人生のすごい冒険に乗り出す準備はできましたか？

「ええ…」とただうなづくだけでなく、実際にやってみてください。

このプログラムを進めていけば、愛の核融合によって生まれる爆発的なエネルギーを体験するにちがいありません。そして、おふたりの人生をいっそうすぐれたものへと変革してくれます。

新世代が生まれます。みなさんの心から始まり未来に向けて。

みなさんが、人類の歴史を変えるのです。

婚約期間

さまざまな流行の波

現代の若者は、結婚をどうとらえているのでしょうか？　かれらは、何に関心をもち、確信し、疑い、おそれ、期待し、あるいは希望しているのでしょうか？過去の一般的な夫婦像と比較し、どう変化したでしょうか？現代の若者が志向するものとは？

その昔、結婚といえば――といっても数十年昔というほど古くはありませんが――、女は十八、男は二十（はたち）で結婚、夫は家から働きに出、妻はうちを守り暮らす、五人の子供を育てたのちは「幸せに暮らしましたとさ、めでたし、めでたし…」というのが相場でした。現代版おとぎ話となると、そう簡単に事は運ばず、話はややこしくなってきます。大半の若者にとって、かつての結婚スタイルなど、魅力の褪せた過去の遺物にすぎません。かつてのカップルたち以上に、違うタイプの結婚を探し求めています。結婚や家族を考える現代の若者の実態に取り組むのですから、まず、かれらの声から聴いてみましょう。

□先延ばしにされる結婚

――――――――――一時的あるいは永久に

「今結婚するのは怖いです。結婚のような誓約に踏み込む準備はできていませんし、独身生活をもっと楽しもうと思っています。ときどき、ほかにも私のような人がいるんじゃないかしらって思います」

「独身でいつづけるとしても、恥ずかしく思ったり、焦ったりはしません。女は結婚しなければいけないというプレッシャーのない時代に暮らせて、すばらしいことだと思います」

「いずれ時が熟せば、花嫁を見つけ結婚する日もくるだろうと思っています。そうしたら今までの知り合いの女性たちを新しい目で見るようになるでしょう」

「自分にぴったりの相手が見つかるなんてあり得ないように思うときがあります。そうだとしたら、妥協す

るか、独身で生きるか選ばなければならないでしょう」
「仕事と学業に加えて結婚を同時にこなしていくなんてできぬ相談です。必ず、憎しみや苦々しさがふきでてきます。学会からの重圧となんとか折り合いをつけてやっていても、ちょっとしたいざこざで結婚の重大破局にまで発展しかねないと思います。結婚をうまくいかせたければ、さらに重荷を負う必要などないんです。だから結婚は待ったほうがいい」

□一生の誓約か否かが問われる結婚
——離婚について

「ほかに手立てがないときに限りますが、離婚は、わたしにとってひとつの選択です。どうにも耐えられなくなれば、死ぬまで結婚にとどまることもないでしょう」
「わたしたちが合意しているのは、万が一結婚がうまくいかなければ、最後の手段として離婚するということです」
「結婚のきずなを守るために、何もかもやりました。それで、離婚かって？　そうですよ。なぜ、不幸のまま、暮らさなければいけないんですか？」
「多くの夫婦は、結婚生活を投げだすのが早すぎると、私は思います。けんかや誤解、いやなことがあったぐらいで離婚すべきではありません」
「結婚がうまくいかなければ、そのふたりは、愛し合い理解し合うための手立てを探さなければいけない。霊的な一致なら、どうして壊れることがあるでしょうか？」

□婚前性交渉
——論争の渦中で

[反対派]
「神は、結婚における愛の表現としてセックスをとっておかれました。もし付き合っているふたりがセックスの準備ができていると考えるのなら、ふたりは結婚の準備も万端かどうか、自らに問いかけてみなければなりません」
「セックスが、ふたりの一致そのものではありません。

ふたりの一致を表現するための、肉体の行為にすぎません。婚前性交渉に関われば、自ら罠に落ちることになり、心は深く傷つき失望することになります」

「わたしの考えるかぎり、婚前性交渉は罪です。わたしには選択するしない以前の問題です。しかし、他人の人生はその人のものです。その人の選択の自由は尊重します」

【賛成派】

「新婚初夜になって、びっくりするような目に会うのは嫌です。クツだって、買う前に足に合わせるでしょう？」

「付き合いも二、三ケ月すると、つきあったどの人も、セックスを求めてきました。断るにしても、善悪の良識的判断を失うよりボーイフレンドを失うほうが怖いと思っている女の子がたくさんいると、わたしは思います」

「結婚前にセックスしても、何の問題もないと思います。今では普通のことでしょう」

「結婚する前に同棲しておけば、相手をねんごろに知るよいチャンスになります。結婚の誓約を交わす前に、将来の伴侶についてできるかぎりなんでも知っておくべきです」

「親や教会が言うほどに婚前性交渉が悪いとは、わたしは思いません。だれも傷つかず、長い付き合いの一部であるかぎり、いいと思います」

□信仰

――――――今、単なる個人の問題か否か？

「わたしの人生にとっては、信仰はどうでもいいことですし、おそらく結婚生活でも、何ら積極的な意味はないと思います」

「同じ宗教を信じる物同士でさえ、信仰についての解釈はかなり違うものです。したがって、信じている内容も人それぞれです。ほんとうに大切なのは、ふたりが、生活の基本となる同じ価値観を分かち合っているかどうかです」

「頑固にはなりたくありませんが、信仰を成長させていけるような環境を得るのは大切なことだと考えてい

ます」

「早いうちから子供に信仰教育を施すのは有益です。子供だけの意思にまかせてしまうのでは、心も生活も神から離れてしまいかねません」

「わたしには信仰教育のバックグラウンドはありませんが、子供は教会で育てるつもりです。何かが欠けていると、いつも感じていました。それは、わたしの生い立ちには、霊的な体験をできる場がなかったことです」

ワーク・ブックとして活用するために

友人である親愛なるみなさん。

現代のカップルで、もはや「おとぎ話」にすぎない伝統的な結婚に立ち戻ろうなどという人たちは、ごく限られています。

しかし、現代の結婚物語が、私たちの目にはまったく様がわりして見えても、「死がふたりを分かつその日まで、いつまでも幸せに暮らしましたとさ」という「おとぎ話」の結末そのものは、今も色褪せず魅力的で望ましいものにちがいありません。

そのためには、もう少し時間をかけ、もう少しきちんと準備し、さらにいっそうの決意と努力が求められます。

みなさん、この冒険に足を踏みいれる用意はできましたか？

ワーク・ブックとして活用するために守っていただきたいのは、以下の四点です。

◇じっくり読む
◇個人で内省する
◇内省した事柄を書き残しておく（＊）
◇その内容を分かち合う

（＊）このワーク・ブックには、様々な課題の質問が載っています。単に「はい」「いいえ」で答えるものが大半です。しかし言うまでもなく、そう答えた理由について内省しことばにすることは、大切です。このような説明の重複を避ける意味で、質問の末尾に「※」のしるしを付けておきます。この「※」に出会ったら、少し立ち止まってゆっくり内省してください。

こうすれば、
おふたりとも、
人生でもっともすばらしい体験を
必ず味わいます。

婚約

今日では、「求婚」などいうことばは、もはや時代遅れなものと考えられています。青年が恋人の父親に結婚をゆるしてくれるよう頼みにいくことも、もう廃れつつあります。今のカップルの一般的な傾向としては、結婚はふたりで決め、親にはその旨を伝えるだけというのが普通でしょう。

「婚約期間」を適当に定義するのは、かなり難しいことです。婚約者といっても、青春まっさかりの者もいれば、二十代前半の若者もいるといった具合で、労働者、学生、教師、信仰をもっているものから無神論者まで多様だからです。カップルたちのある者はすでに長い付き合いがあり、かと思えばある者は、ふらふらと腰の落ち着かない者もいます。ふたりの意向が誠実ではっきりしているものもいれば、そうでない者もいます。さらに性も生い立ちも異なるふたりの人間が親密なきずなを作ろうというのですから、乗り越えるべき課題はいっそう複雑になってきます。親密になれ

ばなるほど、混乱、恐れ、不安、衝突がしばしば起こります。

「婚約」という、重要かつ深遠な現象について、より広い視野から見つめ、きわめて現実的かつ肯定的な立場から取り組んでいきたいと思います。今日、絶え間なく息もつかず変化を続けるこの時代では、「婚約とは何か」という定義を施すことは、ほとんど不可能に近い。しかし、現実を見つめることで、こう定義できると思います。

◇結婚を準備するとき。カップルとしてのアイデンティティを探しだし、それを将来の結婚で実現させるべく、婚約者のふたりがありのままの自分たちと向き合う、重要で必要不可欠な時間。

◇意識的に一緒に、以下にあげるような現代の結婚・家族に関する大切な事柄について探し求めます。

その事柄とは、

＊愛を構成する要素
＊結婚および家族の目的
＊心理学的視点から見た性とその尊厳・平等・相違と共通項
＊親としての責任　＊子供の教育
＊期待　＊志（こころざし）
＊信条　＊ニーズ
＊道徳　＊人間と信仰に関する価値観
＊経済面でのあるいは社会に対する誓約

◇深い通じ合いと対話のプロセス。躍動的で向上心があり、愛に溢れる関係（きずな）を築きます。この関係（きずな）は、互いに尊敬をもって相手に聴き、知識・理解・受け入れ・信用・信頼・支え・自己実現・神に対して開かれた心と信仰などを、相手に与えまた相手から受けることで築かれます。

◇お互いを分かち合う準備。自分の過去、現在、未来について、正直に単純な心をもって分かち合います。こうして、より完全に・より親密にお互いを知るようになっていきます。この結果、実りある結婚の可能性と、健全で幸せな共同生活の保証を、ふたりが識別できるようになります。

◇学びの期間。婚約者同士は、召命としての結婚を再発見し、結婚と家族についての神のご計画を深めることを望むようになります。カトリックの信者の場合、

こうして結婚の秘跡を証しする奉仕者になれるよう整えられ、ついには、「主において」自由意思により結婚を選択するのです。

◇結婚前の最後の修練期間。ますますその関係に親密さを深めつつある未婚のふたりにとって、「婚約」は最終段階です。かれらの目的は、生涯つづく結婚の誓約を望むか否か、あるいはそのような誓約が可能か否か決定することにあります。

◇神からの特別の恵みと祝福のとき。心を開いてふたりの関係を神に委ね、主が与えてくださる啓示に忠実に従います。

婚約までの段階

男女が「恋に落ちる」と、どういうプロセスをたどるものでしょうか？　婚約するまでをいくつかの「段階」に区切り、順を追ってくわしく調べてみましょう。

□デートをする

婚約にいたる第一段階です。「恋に落ちる」とその手初めとして、エロティックな意味で相手に魅力を感じ、一緒にいることを強く望むようになります。こうして、片想いにせよ相思相愛にせよ、デートに対する要求が芽生えます。

今ここでは、単なる「待ち合わせ」としてのデートについてではなく、互いに魅力を感じる男女の交際について語っています。この手の「デート」には、三つの種類が考えられます。

◇気軽なデート

「いやならば、べつに無理にとはいいません」と

いうくらいの、特に深い動機のないもの。

◇特別なデート

「期待しているし、待ち遠しい」といった、わくわくするもの。

◇決まった異性とだけのデート

「決まった異性とふたりきりで」という、とても真剣な付き合い。

気軽なあるいは特別なデートの場合、その目的は、外出して楽しいときをすごすことです。結婚を考える相手とのデートの場合は、お互いの好き嫌い・関心・個性・信条・ニーズ・価値観や、相手の家族・親戚・友人を知ることが、その目的となります。

□親友になる

第二段階。強く深い友情のきずなを築いていく時です。

◇相互に尊重し、相手の話をしっかり聴きます。

◇知り合い、理解し合います。

◇受け入れ、信頼します。

◇支え合い、助け合います。

この段階での重要な「秘訣」は、お互いの過去・現在・未来を分かち合い、一緒に何かをすることです。

「今以上のふたり」になっていくためには、互いに真の友人になるのが必須条件です。この段階を省略することはできません。親友にならずして、結婚は成立しません。

□婚約する

第三段階。「婚約期間」では、お付き合いしているふたりはお互いに親友であることを認め、さらに「今以上の」関係になっていくことを望みます。

「婚約期間」とは、真の愛があるのか、それとも単にのぼせているだけなのかを識別する時です。つまり、受けるだけでなく与えることに心を砕いているならば、本質的に無私な心があると言えますし、もらってばかりで与えようとしないなら、根本的に自己本位なものだと見分けがつきます。「婚約期間」はまた、婚約者たちが、結婚という真剣な誓約への決意を固めていく

時でもあります。

◇　◇　◇

人生でもっとも深遠なこの識別と決意にあたり、みなさんの足がかりとして、次の項目を読み分かち合うことをお勧めします。

婚約の危機

おとぎ話の世界とちがい、婚約は、いつもほのぼのと仲よくいくわけではありません。映画や広告などは、婚約のまちがったイメージを伝えています。このため、若いカップルの多くは、「いつまでも幸せに暮らしましたとさ」という結末を信じ、波風などたつわけがないとタカをくくっています。

親しさが増しお互いのちがいがはっきり見えてくるにしたがい、デートし友情を深め求愛し合うこの婚約期間も、危機の様相を呈してきます。マンネリ・緊張・困惑・孤独・幻滅・不満・挫折・疑い・恐れ・不安、そしていざこざさえ起こります。こうなった時、「危機は、愛の死を意味しない。むしろ、今こそ愛を証明するときだ」と意識することが大切です。金が炉の中で試されるように、愛は危機の中で鍛練されます。婚約者同士がとことんわがままになるのは頻繁にあることですが、徹底的に愛し合うことはまれにしかありません。恋愛のほとんどは、はっきり色合いの異なる三

つの次元をたどるものです。

第一の次元、ロマンス。期待に胸ふくらませ夢見がちな、幻想の時です。理屈や精神より感覚や感情が優先されるのが、この次元の主な特徴です。ロマンスがあるのは神の恵みゆえであり、このおかげで、「わたし」という自己中心の殻を出、「あなた」や「私たち」という相手中心の生き方を選べるようになっていきます。

第二の次元、危機。がっかりする、心が傷つくなど、幻滅の時です。この次元が生ずるのは、「幸せ」に対して稚拙な考えしかもっていないからです。次のように気づいて幻滅するのです。

◇「頭に描いていた『わたし』のイメージは、自分の思いこみにすぎなかった」

◇「彼（彼女）はこういう人だと思いこんでいたが実際は期待はずれだった」

◇「幸せになれると思い込んでいたが、それほどではなかった」

相手のなかに自分自身の姿「自己」を期待すると、お互いに見込みちがいとなり、双方とも「だまされた」印象を抱きます。ランプの灯に似て、ふたりの愛が徐々に光を失い、ついには暗闇の部屋にまったく閉ざされてしまう…そう感じるはずです。

第三の次元、発見。喜びと平和が溢れる、決意の時です。危機を乗り越える前に、多くの婚約者たちは破局を迎えます。その理由は、お互いの中に眠っている、愛のエネルギーの凄まじい力に気づいていないからです。そのエネルギーは、放出されるときを待ち侘びています。どうすれば、この重大事を発見できるでしょうか？　次のように認識すればよいのです。「愛は、ふたりだけの殻に閉じこもる『感情』ではない。愛は、スパイラル（らせん）のように開かれた、三者の『決意』である。すなわち、男、女、そして神の三者によってなされるもの！」。

静かに座り、私たちの知性・心・魂のすべてをあげて、神のみことばに注意深く聴きいりましょう。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」　神は御自分にかたどって人を創造された。男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言

われた。「産めよ、増えよ」
（創世記一章26～28節参照）

結婚とは、断じて、ふたりだけの閉じた円ではありません。結婚とは、三者の開かれたスパイラルです。

◇　◇　◇

■わたしは、彼（彼女）を愛する決意を、かつて意識的にしたことがあるでしょうか？（※）

■わたしたちの関係は、ふたりだけの閉じた円でしょうか、それとも、三者の開かれたスパイラルでしょうか？（※）

以上の質問に基づいて振り返り、ことばにしてみましょう。

婚約を健全で優れたものにする秘訣

離婚率が非常に高いことを、現代の婚約者たちはみな一様に認識し、自分たちの将来を心配しています。彼らの関心は、次のようなものです。

◇結婚したら、何が自分たちに起きるだろうか？
◇自分たちは、どんな夫婦になるだろうか？
◇困難を乗り越えることができるだろうか？
◇夫婦として、成功した結婚を送れるだろうか？
◇家族として、自分たちはきちんとやっていけるだろうか？

日本にも「ころばぬ先の杖」ということわざがありますが、現代の婚約者にあてはめるならば、さしずめ、「ころぶ」は「離婚」、「杖」は「相手と深く出会い知り合う」ということになります。標語にすれば、「明日離婚せぬ前に、今日の出会い」とでもなるでしょう。

おふたりの婚約に、健全さ・深さ・愛・実りをもたらすため、その秘訣の際たるものを、これから見てい

くことにします。

□自己との出会い

結婚前のおふたりの出会いを、健全で深みがあり優れたものとするためには、「自己」との出会いが、第一の秘訣としてあげられます。

自分の相手と真に出会うためには、まず、自分自身と出会うことから始めなければなりません。双方ともに「自己との出会い」ができて始めて、もっとも意義深く報いの大きい体験をする準備が整ったことになります。つまり、お互いに自分の個人的な生活を分かち合える機が熟しました。

□お互いにオープンな心をもち、正直に

婚約者同士が、相手を知りまた自分を知ってもらおうとしないかぎり、ふたりの関係に健全さと成長がもたらされないのは、明らかです。しかもこれは、自己防衛や偽りなしに、まったくありのままの姿を知り合わなければなりません。

ごまかしや逃げ腰な雰囲気があったら、一体、きずなを生かしていくことなどできるでしょうか？　よい結婚の土台は、自由でオープンな通じ合いを持続させることです。

しかしここで、やっかいな障害がでてきます。

婚約者は求愛するとき、労を惜しまず自分を売りこみます。これに加え、相手のことは何もかも最高だと思いこみたい気持ちが働きます。ロマンチックで「盲目的な」愛とはこれで、人と人をくっつけてしまう手段としては効果抜群です。

ですから、結婚が、ロマンチックな愛のみに基づいているなら、普通長続きしないということです。

幻想は、美しさと寛大さに彩られています。しかし、幻想をもとにした結婚生活は破綻せざるをえません。結婚は、現実に根ざしたものでなければならない。つまり、婚約を健全で優れたものとするためには、「お互いにオープンな心をもち、正直に」という原則を受け入れる、ということにつきます。

□結婚前の愛

哲学者と神学者の大半が合意しているのは、結婚のエッセンスは愛である、ということです。しかし、愛の定義ということになると、もちろん一様ではありません。結婚前の愛の本質については、後にゆずることにして、ここでは、愛の定義をいくつか試みます。

◇愛は、決意であり、意志の働きによるものである。単なる感情ではない。

◇愛は、神がわたしたちの心の中に創造された、神秘的で人間特有のエネルギーである。

◇愛は、活発で意識的な傾向をもつ。心の内から外へ向け、愛する者を志向し、お互いの益を探し求める。

◇愛は、すべての人間の心に存在し、深みとすばらしさをもっている。

□結婚の召命への気づき

「召命（しょうめい）」という語は、「ある者が、呼ばれている、あるいは、召集されている」ことを意味します。この呼びかけは神からのもの、というのが、一般的な理解です。内的な光である「召命」は、人間として自分たちがなりうる可能性について夢見させ、さらに、その夢が実現することをも切望するよう促します。

世間では、召命の概念を、一生の仕事としてとらえるのが普通です。これは当然でしょう。現代の文化は、成功をおさめることを強調し、ひとりの人間としてどのように成長しているかよりも、世の中で何をしているかで人間を量る傾向にあるからです。しかし、実際それに劣らず重要なのは、その人が他人との関係をどれほど深めているか、とりわけ、結婚あるいは家族生活という最も親密な関係（きずな）において、どれほどよい体験をものにしているか、ということです。

聖書には、召命の概念がはっきり見てとれます。聖書の歴史には、ノア、アブラハムとサラ、イサクとリベカ、ヤコブとラケル、ヨセフ、モーゼ、預言者たちがぞくぞく登場します。どの逸話も、神こそ召命してくださったそのお方である、という単純な確信で溢れ

ています。

今日、「召命」の概念には、多くの意味合いがこめられています。夫婦が自分たちの結婚に「召命」をどう位置づけているか、次に見てみましょう。

◇従順。「結婚は、神のわたしたちに対するご意志だと信じています。ですから、神からの呼びかけに対する応答として結婚を受け入れています」

◇献身。愛し合う仲間としてわたしたちが生活を分かち合うことが、神のご意志です。ですから、よい結婚生活をめざして、できるかぎりの努力をするという誓約をしています」

◇他人への模範。「わたしたちは、結婚をとおして、ふたりの人間がどうやったら愛と平和のうちに生きていけるのか、証ししなければいけません」

◇奉仕の精神。「神は、わたしたちが一致するように呼んでおられます。この一致は、お互いの喜びや楽しみだけではなく、他者の益のためにも働くことこそ、その本質です。特に、自分たちの子供の真の成長に役立ち、彼らが真に幸せになるための、一致です」

◇聖性。「わたしたちが固く信じているのは、神は、わたしたちが聖なるものになるよう呼んでおられる、ということです。これは、自分たちの結婚と家族生活をとおして神を愛し奉仕することによって実践していくものです」

◇　◇　◇

■神のご計画としてわたしたちは結婚に呼ばれているのだと、ふたりとも気がついているでしょうか？（※）

□スパイラルのように広がるオープンさ

婚約が、健全で・愛に溢れ・優れたものとなるためのもうひとつの秘訣は、おふたりそろって他者に対しオープンであることです。真にオープンであるかを見れば、ふたりの愛は本物か、あるいはふたりの関係にバランスはあるか、確かめることができます。真の愛であれば、まず愛する者、それから世界へと手をさし

のべていくものです。真の愛は、ふたりだけの恍惚にとどまることなく、変容します。真の愛は、ただ見つめ合うのではなく、四方に広がります。真の愛は、愛し合うふたりを世界から遊離させる柵ではなく、むしろふたりを世界と一致させる橋の役割をはたします。

愛は、本質的に、個人的なものではなく、社会的な関係（きずな）です。全被造物に手をさしのべる神の姿が、人間に写しだされた愛。ある人を真に愛していれば、ほかの人が分かち合っている姿にまったく無関心でいることなどできません。愛のこの性質ゆえに、その人は魅力的な存在になります。

オープンさがなければ、婚約者はふたりだけの閉じた円にこもった者になりはて、そこには、プライド・利己主義・独占欲・肉欲・うぬぼれ・憎しみしかありません。事実、愛が本物ならば、それは炎と似ています。分かち合わないならば、消えてしまう。しかし、分かち合われれば、力を増し燃え広がっていきます。現代の婚約者の多くは――すでに結婚している夫婦さえそうですが――、ほうっておけば孤立した殻に閉じこもってしまう傾向をもっています。ふたりきりですごし、ふたりだけのプライバシーを堅く守り、ふたりだけの親密さを最高度に満喫したいと思っているからです。しかし、生命には普遍の法則というものがあります。つまり、体から離れた細胞は、死ぬ。

婚約しているカップルは、離れ小島のように孤立したものではありません。双方とも、それぞれの家族に属し、ある特定の地域に暮らす共同体の一員です。よりよい世界を築くため、新しい家族の土台を据えるよう、一市民としても信仰者としても、わたしたちは呼ばれ挑戦を受けています。結局、オープンさこそ、婚約者たちの心に隠されている、愛のすばらしいエネルギーを放出するため、その秘訣となるものです。現代の婚約者のオープンさに、キリスト再臨の新時代にとっての大きな希望が寄せられているのは、まちがいありません。

□超越性

結婚前の生活にとって、超越性は、単にもうひとつの秘訣というにとどまりません。婚約者同士が、幸せ

な結婚と家族生活をめざしてほんとうに歩んでいくことを望むならば、これこそ、もっとも重要な鍵となるものです。なぜもっとも重要かというと、この「鍵」は聖別されていて、霊的な生活・信仰・希望・聖なる生活へのドアを開けてくれるものだからです。これは、正直で謙遜、真に忠実な人に与えられる、天からの賜物です。もっとも重要なさらなる理由は、これが、現代のカップルたちのほとんどに知られていない、秘密の「鍵」だからです。人生・愛・結婚にとって、忘れられた次元だからです。

実際、わたしたちは消費社会に暮らしており、人生・愛・結婚にとっての超越した次元など、婚約者の大半にとって関心外です。もの・技術といった事柄に圧倒され、それを越えた次元に目を向けたり欲するゆとりなどありません。

その神秘的な「鍵」とは、何？　なぜ、それが神秘の「鍵」なのか？　歴史上の数知れない信仰者たちの叫びは、その輝かしい人生を証しとしつつ、答えを伝えています。つまり、「神!!」

もし、おふたりの結婚前のきずなが神の偉大なる現存につねに開かれており、こうして共に歩みつづけられるなら、みなさんは、ふたりのただ中に神の隠れた現存を発見します。神ご自身が約束しておられます。

「二人または三人が
わたしの名によって集まるところには、
わたしもその中にいるのである。」
（マタイ十八章20節参照）

きわめて重要かつ欠かせない質問

どうすれば、利己主義の悪循環から出て、真の喜びと平和を見いだすことができるのでしょうか？

唯一の方法は、まず自分自身と神に対して正直になり、それからお互い向き合うことです。

次の質問事項がその助けになります。

1 わたしは、何のために生きているかを発見したことがあるでしょうか？（※）

2 わたしは、神を信じているでしょうか？（※）

3 わたしは、愛を信じているでしょうか？（※）

4 わたしは、結婚や家族といったものを信じているでしょうか？（※）

5 なぜ、わたしは結婚を望むのでしょうか？

わたしの、結婚に対する動機と関心は、個人的にどのようなものでしょう？

6 なぜ、わたしは彼（彼女）と結婚したいのでしょうか？　彼（彼女）の何が、わたしをもっとも魅きつけるのでしょう？

7 わたしは、彼（彼女）との結婚になんらかの疑問をいだいているでしょうか？（※）

8 わたしは、彼（彼女）が自分との結婚に、なんらかの疑問をいだいていると思っているでしょうか？（※）

9 ふたりの通じ合いをよりよくするため、わたしにできることは何でしょうか？

10 わたしは、ふたりの結婚と家族に、何を期待しているでしょうか？

11 わたしは、彼（彼女）に、何を期待しているでしょうか？　その期待は、適切なものですか、それとも、いきすぎたものですか？

12 わたしの長所・短所は、何でしょうか？

13 わたしは、何が、彼（彼女）の長所・短所だと思いますか？

14 わたしは、彼（彼女）が自分にどう合わせてくれていると思っているでしょうか？

わたしは、何が、彼（彼女）の期待だと思っているでしょうか？

15 わたしは、自分に関して期待されている内容を、

ほんとうに把握しているでしょうか？（※）

16 わたし（わたしたち）には、誓約することに対する何らかの恐れが影響を及ぼしているでしょうか？（※）

17 わたしは、神への愛のために、彼（彼女）を愛するよう呼ばれたと認めているでしょうか？（※）

18 わたしには、どのような恐れや先入観が主にあるでしょうか？

19 わたしには、このワークブックを実践してみる気がほんとうにあるでしょうか？（※）

20 わたしは、このワークブックを使った分かち合いを通して、何を得ようと思っているでしょうか？

21 わたしは、このワークブックによる冒険を最後までやり抜くため、あなたから何を必要としているでしょうか？

□まず、ひとりで

◇以上の質問をひとつひとつ内省し、

◇その答えをノートに書き、

◇それを、パートナーである彼（彼女）に分かち合えば、

□みなさんは、こうなるでしょう

◇おふたりの心に秘められている、愛のエネルギーが溢れ出します。

◇利己主義の悪循環から飛び出します。

◇スパイラルのように開かれたふたりになって、喜び・平和・希望を証しするようになります。

◇おふたりがかつては暮らしていた（かもしれない）暗闇で、今も暮らす多くの人に、光をなげかけます。

励ましになる証しの声

◇わたしを妻にすることを、彼が決意してくれた婚約の夕べは、人生最高の経験でした。でもより大切なのは、わたしが生涯彼のパートナーとなろうとしていることでした。

◇わたしにとって最良の体験は、彼女をほんとうに知るために何時間もすごした、深い分かち合いのひとときです。人をほんとうに愛し、また人からほんとうに愛されるのは、わたしたちが人を真に知り、また知ってもらったときだけです。

◇真珠の指輪でいいのよって言ったとき、彼がダイヤモンドの指輪をくれたので、とても驚きました。彼は、そんなにお金持ちというわけじゃありませんでしたから。

◇わたしが旅行に出かけてしばらく会えなかったときなどは特に、一緒にすごし語り合うときに感じる親しさは、すばらしい。

◇お互いの友情と支え合いが最高です。いつも心に残るのは、彼がほんの少しずつお金をためて小さなプレゼントを買ってくれることです。いつでも嬉しくなります。

◇一緒に何かを計画するのは、最高です。

◇基本的に、お互いの価値観と理想を知ってその意味を実感すると、ふたりの親しさは成長します。これは、ほんとうにすごいことです。

◇四年一ケ月の付き合いの間、わたしが実際に彼女に会ったのは合計三十八日だけ。今振り返っても、彼女に出した手紙は千八百通、彼女からもらったのは千五百通と、手紙でのふたりのロマンスは最高の体験だったと思います。手紙の宛先はたったひとりの人間なのに、いちばん長かったものは、新聞四部分に相当していました。一通平均四ページ、合計三千三百通の手紙なのに、わたしたちが伝え合ったのは、ただひとつのことでした（！）。

◇はじめて、完全に愛されていると感じたのが最高の経験でした。安心しゆるぎなく守られていると感じ、わたしも、同じように彼に感じさせてあげたいと願いました。まるで、主とともに行進している感じでした。

◇一緒に祈ることで、神の現存を体験するのは、素晴らしいことです。
◇一緒に何かを計画すると、そのおかげで、親しくなりお互いのことを学べます。わたしたちが特に楽しかったのは、結婚式の音楽と朗読を計画したことでした。
◇郊外の修道院の一日黙想会で、指導司祭がミサをたて、私たちは手を取り合って婚約の約束を交わしたこと。それが最良の体験でした。
◇結婚式の直前、「わたしたちの家庭」で開かれた祈りの夕べは、フィアンセの彼にもわたしにも、とても力強いものでした。わたしたち宛ての「祈り」の花束が、贈られました。
◆婚約について特に思い出はありません。ひどい婚約期間でした。彼もわたしもまったく離れていて、結婚するまで一度も一緒にすごしたことがありませんでした…。

賢明な勧め

◇柔軟な心をもち、よき支えとなり、よく通じ合い、ごく小さなこと、たとえば将来の義理の親を訪れ、彼らの気持ちや仕事に関心をもつなどに、よく心をくばるよう努めること。
◇忍耐強く、現実をよく見つめること。結婚すれば、お互い相手が変わってくれるだろうなどと期待しない。今すでに、お互いの最善を尽くしています。もし相手の最善の姿が気にいらないなら、考え直したほうがよいでしょう。さもないと、悪く転ぶことはあっても、よくはならないからです。
◇一緒に、多くのときをすごすこと。できるかぎり深く心を分かち合う。いつも励まし合う。肯定的な部分を強調しつつも、オープンさをもち、正直で、愛深くあろうと常に努めること。婚約者のために用意されたプログラムに参加し、体系的な体験をするのはその大きな助けになります。
◇通じ合い、お互いによく聴き、励まし合い、互いに

信頼すること。結婚するまでは、肉体関係に踏み込まないこと。

◇自分自身とお互いに対し、正直であること。

◇婚約しているふたりは、それぞれの長所と短所のリストを作り、どう補い合えまた克服できるか、話し合うべきです。そうすれば、結婚してから驚く羽目になりません。

◇お互いのことについて、深く見つめること。主に近づくことは、もっとも重要です。問題になりそうな事柄ととりくみ、その解決策や情報、指導を求めること。

◇「子供をもつ」「家庭での役割」「結婚の誓約の意味」について話し合うこと。さらに、それぞれ自分の家族について分かち合うこと。生い立ちに問題のある家族の場合、結婚に困難が予想されます。

◇あせらず、ゆっくり。まだ「自分」が準備されていないと思い、あまりにもストレスに感じるなら、最初に決めた結婚の日取りに囚われず、キャセルすること。

◇もっと、もっと、話し聴くこと。通じ合うこと。正直であること。分かち合うこと。心を開いて成長するよう努めること。何もごまかさないこと。柔軟な対応を。

◇セックスは遊びではないと、肝に命じること。セックスは神からの賜物で、ないがしろにすべきではありません。結婚まで慎むのは、安全かつ聖なることであり、すばらしい喜びになります。

◇「いつまでも幸せに」暮らしたければ、結婚を「永久に」投げ出さずやり遂げなければなりません。よく観察してみれば、よい結婚とは造り上げていくもので、偶然の産物ではないことがわかるでしょう。たくさんの苦労が必要です。実際、結婚の挫折は、とりわけふたりの関係（きずな）をおろそかにするのが原因となります。

◇将来の結婚生活で信仰と神がどのような役割をはたすかについて、お互いの気持ちを分かち合う時間が必要です。神を信じているか、一緒に祈りたいか、子供に信仰教育を施すか、またそれらの理由について、しっかり時間を割いて話し合うこと。

友情のあつき手紙

ここに掲載する手紙は、フィクションではありません。実在する夫婦たちからみなさんに宛てて書かれたものです。たくさんの愛がこもったものです。

□親愛なる友人のみなさんへ

みなさんは、新しい世代に生きる幸いを手にしておられます。古いしきたりはもはや過去のものとなりました。しかし、わたしたちの時代に通用したアイデアのいくぶんかでも、みなさんのお役にたてればと思っています。

心からお願いします。みなさんの婚約期間を、できるかぎりの最善を尽くしてすごしてください。よりよく互いに知り合うよう努力してください。だれしも欠点や限界、ニーズが自然に出てくるものですから、今以上に頑張らなければならないことでしょう。でも、忘れないでほしいのは、日々自己を見つめるために振り返り、自分の短所に勇ましく立ち向かい、克服するために真剣に取り組んでください。

目標は高くもってください。そうすれば、奮い立って登っていけます。しかし高望みはいけません。目標を見失ってしまいますから。おふたりと回りの方々を励ましてくれるこの目標をめざし、ふたり一緒にとりくんでください。

毎日の祈りを通して、おふたりの未来の家族を支える核を造り上げる準備を、今から始めてください。たとえ一緒にいなくても、意向をひとつにして互いに祈ることはできます。

世間的な事柄に心を奪われないようにしてください。そんなに多くの世間的な「モノ」がなくても、やっていけることを学んでください。そうすればみなさんの心は、いつでも自由でハレバレするはずです。簡単にはいかないことはおわかりでしょうが、大きな報いがあるのも確かです。

◇　◇　◇

□友に宛てて

今日まで体験を積んできた実りとして、わたしたちが確信していることのいくつかをここに分かち合いたいと思います。

まず何にもまして、おふたりの心に、お互いへの愛を注いでくださった神に感謝してください。神は愛であり、愛の源であり、だからこそ、みなさんの相互愛が聖別されていることを銘記してください。この愛を尊び、はぐくみ、守って、みなさんのまわりの人たちに証ししてください。お互いの内にある良きものは何でも発見できるよう、大いに努力してください。

お互いたくさん語り合ってください。ふたりで一緒にすごす時間を有効に使いましょう。急ぐことはありません。しかし、中途半端に終わらせることもないように。段階は少しずつ深まっていきます。結婚までは、過度な親密さを慎んでください。それは、そのような親密さが容認されないからというより、完全さを保った喜びを後々味わうことになるからです。

今書いてきたことにもまして、深い平和をもってください。意向が正しければ、性格や教育や個性の違いを乗り越えることができます。どう違うかは、おわかりですね。

すべてのカップルのみなさんを大きな愛で抱擁させてください。そして、一緒に前進しましょう。みなさんがほんとうに愛し合い、また主に誠実にお願いすれば、主は共にいてくださいます。保証します。

結婚の備えができているか知るために

□結婚の備えとしてすべきことは？

結婚に関するカウンセラーや結婚担当の裁判関係者らは、結婚の備えができていないことが多くの離婚の主な要因と言います。その例として「人間として成熟していない」「結婚と家族に必要とされる事柄に関してうわっつらな理解しかない」「親密になることを恐れている」「期待が現実離れしている」などをあげています。次にあげるものは、結婚の備えの基準としてほぼ意見の一致をみているものです。

1　自己の確固としたイメージをもっている
2　自己をふさわしく尊重している
3　成熟している
4　ゆるがない協同体制がある
5　愛深い、家族との関係（きずな）がある
6　信仰教育の場をもっている
7　結婚と家族に対して、しっかりした信条がある

□わたしたちは、結婚の備えができているか？

1　わたしたちには、安定した収入の目途と、家計のやりくりに関するきちんとした合意があるでしょうか？（※）
2　わたしたちは、銀行口座をふたりともが引き出せる共通のものとして作るでしょうか？（※）
3　わたしたちは、ふたりで楽しむため（オーディオ、旅行など）なら、自分の欲しいものは我慢しても、喜んで貯金する気があるでしょうか？（※）
4　わたしたちは、差し迫った経済的な困難が配偶者の家族に生じた場合、労働奉仕にせよ経済援助にせよ、何らかの貢献をするでしょうか？（※）
5　わたしたちは、遺書を作ってありますか？（※）
6　わたしたちは、財産のひとつとして、保険に加入するでしょうか？（※）
7　わたしたちは、お互いの遺書や保険、収入などの詳細を知り合うつもりでしょうか？（※）
8　時間を守るとか清潔さといった事柄に関して、わたしたちは、同じ価値観をもっているでしょう

か？（※）

9 わたしたちは、配偶者が異なる信仰をもっていても、それを尊重するでしょうか？（※）

10 わたしたちは、相手を喜ばすための気晴らしなら、たとえ自分の趣向にあわなくても、ときには計画するでしょうか？（※）

11 わたしたちは、お互いの仕事について、話し合うことができますか？（※）

12 わたしたちは、お互いに食い違いがあったとき、優しく相手にゆずってあげられるでしょうか？それとも、どちらか一方がいつも我慢せざるを得ないでしょうか？（※）

13 わたしたちは、わざと辛くあたることがお互いにあるでしょうか？（※）

14 わたしたちは、配偶者の欠点を第三者に話さないよう心がけるでしょうか？（※）

15 わたしたちは、公衆の面前で口ゲンカなどせず、食い違いを話し合うのは家に帰るまで待つでしょうか？（※）

16 わたしたちは、お互いに秘密をもったりせず、どんなことでもオープンに話し合うでしょうか？（※）

17 わたしたちは、将来に対する相手の夢を理解し合い、それが実現できるよう手助けするでしょうか？（※）

18 わたしたちは、相手の話をウンザリして聞いたりせず、むしろ関心をもって積極的に聴くでしょうか？（※）

19 わたしたちは、配偶者が評判になっても、ねたんだりせず、むしろ誇りに思うでしょうか？（※）

20 わたしたちは、相手の意見に価値を見いだし、それを人に知らしめるでしょうか？（※）

21 わたしたちは、お互いに褒め合っているでしょうか？（※）

誓約としての婚約

生きるとは、成長すること。その成長を共にするのが、愛することです。愛は、単なる感情ではなく、決意です。結婚における愛の決意とは、一時的な口約束ではなく、生涯つづく誓約を意味します。永久に愛し続けなければ、無条件の愛とはいえません。なぜでしょうか？　まず第一に、人生には「浮き」「沈み」があるからです。もし夫婦が、嵐の徴候を見るやいなや船を投げ出してしまうなら、もはや旅はそこまで。ふたりのために取ってある宝を発見することはありません。理由のもうひとつは、よいワインやウイスキーはじっくり熟成して作られるのと同様、最高の結婚とは長いときをかけ培っていくものだからです。自然な理解、互いの忠実さと深い愛情は、長い年月から生まれてきます。

もし結婚とは、わたしたちの回りで頻繁に見受けられるように、見るだにつまらなく息苦しいものでさえあり、しかし夫婦は、ふたりの中にある神の現存によって支えられ強められる関係（きずな）において共に成長するというのであれば、あきらかに、結婚を単なる「契約」として見なすべきではありません。「契約」は、条件が満たされなければすぐ破棄されてしまいます。しかし「誓約」は、無条件かつ犯すべからざるものとして、自由に選ぶものです。「契約」と「誓約」の辞書的な意味合いはさておき、結婚においてこのことばが使われるとき、そこには大きな相違が生まれます。

「誓約」は、その重要さと永久性の意義を理解するに足る能力をもつ人によって成されます。つまり、他人との関わりにおいて、自由に・意志をもって、誓約は成されます。ですから、誓約ということばを使う場合、「前夫」「前妻」「前の親」「前の子」といった、あたかも「前の家」「前の車」「前の使用人」と同様の言い種（いいぐさ）はありえません。なぜなら、後者は、生活の快適さのため一時的に使う、といった以上の域をでないからです。その程度の型や枠組みに「結婚」を押し込めてしまっては、実際には可能にもかかわらず、人間生活のもっとも美しい側面と見なさ

れるべきものを台無しにしてしまいます。

しかしながら、今のこの世では、あまりにも多くの夫婦にとって、結婚生活とは、全人的な交わりというリスクを拒み、自己を全く与える本来の姿を大きく制限したものとなっています。ですから彼らは、まるで結婚とはいえない「結婚（？）」を始めています。理想的な「誓約」ならば全く自己を与えるものですが、彼らの結婚式は、「誓約」とはほど遠い、条件づけの「契約」に基づいています。事実上、彼らは、未熟な子供と変わりません。

このような現実の増加に、どうやったら歯止めをかけられるのでしょうか？　最善の方法のひとつは、みなさんの「婚約期間」を、「誓約」の精神と生き方に則ったものとしてすでに今から始めることです。次に掲載する「婚約者としての誓約」の形式をお勧めします。

神がご自身の民に約束されたように、
わたし（自分の氏名）は、無条件で、
あなた（相手の氏名）に誓約いたします。
わたしは、あなたをつねに愛し、
あなたに忠実を守り、
あなたのために、すべてを捨てます。
夫（おっと）・妻（つま）として、
ふたりの愛が成長し、
そうなるようにと定められている
神のかたどりにまで成長することを
わたしは信じます。

自己との出会い

われ思う、「わたしは、だれ？」と

◇「自分は、いったい何者か」ですって？
ふぅー。それこそ、いちばんの不思議な国ね。
――――――「不思議な国のアリス」作者
ルイス・キャロル

結婚は、ふたりの人間が造りあげるチーム・ワークです。結婚に踏み込む前に、ふたりのさまざまな事柄を知るのは重要です。

したがって、意義と深みのある「自己との出会い」は、必要不可欠な出発点となります。こうして、健全で愛に満ちた婚約は、幸せで優れた結婚へと育っていきます。

「ありのままの自己」を発見した人だけが、結婚するにふさわしいパートナーを見つける準備が整ったことになります。

お互いにしばしば理解しえない原因は、各々、自分自身がわかっていないことにあります。

□「自己との出会い」とは何？

「自己との出会い」の本質的な要素をいくつか次にあげてみましょう。

1 自己に気づく。自分自身の現実に目覚め注意すること。
2 自己に正直である。自分自身に偽らず誠実であること。
3 自己を尊重する。唯一の存在として、自分とそのルーツを尊重すること。
4 自己を知る。ニーズ・価値観・傾向といった、自分のありのままを発見すること。
5 自己を理解する。ほんとうの自分の姿を理解すること。
6 自己を評価する。自分自身をまったくありのままに受け入れること。

7　自己を信頼する。自分自身とその秘められた可能性を信じること。
8　自己の決断。克己心・不動心・不屈の精神などの力を使うこと。
9　自己実現。ほんとうになりたい自分へとなっていくこと。
10　自己をコントロールする。自分を律すること。
11　自己をオープンにする。人に手をさしのべること。
12　自己の超越性。自分の志向とそのかなたを識別すること。

アルコール、麻薬、不健全な遊び、過食症、拒食症、所有欲、お金、万引、家出、性の濫用、仕事中毒、自殺などの「逃避」は、ありのままの自己を理解し受け入れるならば、もはや必要ではありません。ここにきて、パートナーとの意義深い出会いを体験する準備ができたことになります。

これからの章では、自分自身の「内的な自己」を発見するためのいろいろな助けが出てきます。自己の深層との接触、つまり、段階的にではありますが、生き生きとした「自己との出会い」を体験することによって、「内的な自己」は見えてきます。

ただ次の注意事項は守ってください。

◇1　まず読み、それから内省する。
◇2　ラブ・レターを書く。
◇3　一緒に、分かち合いをする。

よろしいですか？

それでは、今これからすぐに、

信頼・愛・希望をもって、始めましょう。

1　自己に気づく

「気づくことこそ、生きること」

ヘンリー・D・ソロー（作家）

自己は、探査を待つ神秘の海です。わたしたちは、この「自己」のうちに宝をもっています。自己に秘められた最高の宝は、いまだ覆いを取り除かれるのを待っているかもしれません。心の中にある宝を実際に活かすためには、わたしたちが「内面の自己」に目覚め、よく目を凝らし、その現実に気づかなければなりません。

個々の自己は、意識的に変化しうるもので、姿を変えつつ、驚くほどたくさんの事柄を一生涯に成し遂げることができます。

ほとんどの人は、「考えること」など何の意味もないと見なしています。しかし、実際の人間の思考がどれほど大切かはおわかりになるはずです。知性とは本来、ハッキリ澄んだもので、たえず動いています。知性によって、わたしたちは、直面するさまざまなチャレンジを克服することができます。

意識的あるいは無意識的な知性はともに、わたしたちを囲む世界と完全に同調しています。直観は、知性の働きにさらなる感受性を加え、いっそう気づかせてくれます。

想像力は、創造的に働き、わたしたちに特に役に立つものです。

わたしたちはまた、集中力というすばらしい能力を有しています。家庭内でも外でも、どこかよい場所を探して、今懸案の事柄に心を集中してみてください。そうすれば、日々さらに容易に、集中力を高めていくことができるでしょう。

気が散ってしまう事柄は、たいして大事なものでないなら、心の内からも外からも、一切遮断してしまいましょう。短い祈りを唱えるのもいいでしょう。

長時間集中力を持続するのは、生やさしいものではありません。しかし、ぐっと堪えて忍耐し続ければ、自ずと集中し始めるものです。

知性は、「研究する」という意図に対し、肯定的か

つ熱心に応えてくれるものです。ですから、わたしたちが、最愛の人の「自己」を発見するために、自分自身の「自己」を研究しあるいは発見しようと選択すれば、知性は、わたしたちのこの「研究」の意図を喜んで歓迎し受け入れてくれます。

急いで集中し没頭したければ、「心に思い描け」「的をしぼれ」「ピントを合わせろ」と自分に対し（声を出して、あるいは、心の中で）言ってごらんなさい。すぐに心のエネルギーは集中し始めます。

意識を集中し、自分自身の内にある真の「自己」に焦点を合わせましょう。こうして、じっくり内省してください。

偉大さは、知性にある偉大さが出発点です。自分自身について信じていることこそ、自分がなろうとしている姿です。

◇　◇　◇

□束縛から解き放たれ期待どおりの自己として生きるため、具体的にどのような障害が、わたしにはあるでしょうか？

2　自己に正直である

「自分自身に対して真実であろうとすることは、人としての法則である」

孔子（哲学者）

自己に正直、高潔でないかぎり、真の意味で自己と出会うことはできません。自己を欺く人は、他人と、さらに神に対しても、正直でありえません。ありのままの自己になっていくためには、自己に正直な姿勢こそ、その第一歩です。ではどうすれば、自己に正直であり、自分自身に偽らずにいられるのでしょうか？

◇自分自身の良心の声に注意深く聴き、忠実にこれに従うことによって。

◇知性と心を開くことによって。オープンな姿勢は、自己の真実の姿との交流を可能にしてくれます。

◇肯定的に考え、肯定的な事柄を探求することで。

◇決して偽らず、ほんとうのことだけを語ることによって。

◇自分の心の動きを見つめしっかり聴く時間を毎日とり、肯定的なことであれ否定的なことであれ、これを直視し受け入れることによって。

◇自分自身をよりよく知ることによって。そうすれば、自己のほんとうの姿を理解し、受け入れ、愛することができるようになります。

◇自分の限界を認め、それを人のせいになどしないことによって。

◇「仮面」をはずすことによって。

「仮面」とは次のようなものです。

◆その人の考え・感情・態度・目的・選択などを覆い隠してしまい、自己のほんとうの姿を見えなくさせる原因となる何か。

◆さまざまな恐れから自分自身を守るため、人がとる行動、あるいはそのやり方。「恐れ」には、たとえば、「拒絶されることを恐れる」「ありのままの自分を受け入れてもらえないのではないかと恐れる」「攻撃されたりいじめられるのではないかと恐れる」「自分が弱いこと、完全でないことがばれてしまうのではないかと恐れる」「自分が

他人の期待にそえないことを恐れる」などがあります。

◆ありのままの自分ではなく、むしろ、自分はこうありたいと思っている姿をみせるために、人がとる行動や態度。

◆自分がぜひそうなりたい、あるいは、他人にそう分かち合えたらいいと思っている、ほんとうの自分を隠すためのあらゆること。自分を守ろうとして、あるいはそう装って見せるための、その人なりのイメージ。

◆ときとして、自分が把握していること、感じていること、考えていること、やっていることなどを現実として受け入れるより、仮面をつけるほうが楽だと感じることが多々あります。しかし、自分なりの感性・感情・思考・行動を現実のものとしてしっかり把握するようになれば、達成感と平和な気持ちがこれにとってかわります。ありのままの自己を人に分かち合うと、わたしたちは解放感を味わうものです。

◇　◇　◇

□自分自身と神に対してわたしが正直になるうえで、何が邪魔しているでしょうか？

□わたしは、仮面をかぶっているでしょうか？（※）どのような仮面でしょう？

3　自己を尊重する

「自己を尊重することは、自己鍛練の実りである」

エイブラハム・J・ヘシェル

人格とは、何を意味するのでしょうか？　学者らは、「人格とは、自己実現の高い規範を内にもち、人間としての可能性を開花させうる個性を有した、ユニークなひとりの人間をさす」と言っています。いいかえると、わたしたちにはそれぞれの名前がありますが、わたしたちは名前そのものではありません。わたしたちはそれぞれ、ある「誰か」なのです。人は、ただ体と知性があるにとどまらず、人格を有する存在です。さらにいえば、わたしたちは、他に変えられないユニークな存在であり、誰かのコピーではありません。

聖書（創世記一・二章）によれば、「三つの超絶した位格をもっておられる神が、ご自身の似姿、かたどりとしてわたしたちを創造された」がゆえに、人はかけがえのない人格をもつ存在である、ということになります。モーゼが神にその名を尋ねたとき、神は、「わたしはある（出エジプト三章14節）」と答えられました。わたしたちは、ひとりひとりみな、神が造られたまったくユニークな存在です。わたしたちの尊厳も人としての存在意義も、神に根ざしています。わたしたちは、神の子、神の肖像（うつしえ）です。ですから、わたしたちは、大いなる尊敬に値するものです。しかし、ほとんどの人たちは、自分たちがかけがえのない人格を有し、神の子であることを無視しています。このため、自分自身も他人に対しても、畏敬の念をもたず、これを尊重しません。

自己を尊重すること。つまり、尊敬をもって承認したり、好意をもつ、敬意を表する、賞賛する、思いやる、評価するといった姿勢は、他人とりわけ最愛の人を尊重するための「秘訣」です。自己を尊重する姿勢が欠けていると、堕落と人格破壊が始まります。尊敬こそ、正義を実践する第一歩であり、その正義は、愛の土台となるものだからです。したがって、尊敬のないところには、ふさわしい自尊心が育たず、この自尊心が欠ければ、真に人を愛することはありえません。

自分を大切にできない人が、人生でほかの誰かのためにベストを尽くすなど不可能です。自分を大切にするというと、利己主義に聞こえるかもしれませんが、事実は、そのまったく逆です。人格のある存在として自分を大切にする、つまり、心を平和に保ち、自分自身に充電させてやるゆとりを与えないなら、いったいどうやって、他のことを考え、応え、行動し、最善を尽くすなどできるものでしょう。

「自分を大切にする」ひとつの例をあげてみましょう。体は、わたしたちの心が内に収められた倉のようなものです。心と体が良好な状態であるのは、自ら働き、人に奉仕するうえで重要です。当然、健康であることが必要になります。しかし、何もせずに健康でいられるわけではありません。そこで、自分自身をいつも大事にし、おおいに自己を尊重してあげるべきです。もうひとつの例。わたしたちはまず、自分自身のストレスを解消するために時間をとる必要があります。そうすれば、環境から生ずるさまざまなストレスの影響をもろに受けなくなるでしょう。こうして、人によりよく奉仕できるようになるわけです。

□自己を尊重していることを表わすしるし

◇霊的な成長を大切にしている
◇自分はよい存在であると、信じている
◇問題で頭が一杯になり、ほかの事がだんだん手につかなくならないよう努めている
◇過去のことは、さっぱり水に流している
◇毎日の運動に精をだしている
◇否定的な感情に押しつぶされないよう努めている

◇　◇　◇

□わたしが自分自身を尊重していることを表わすしるしとして、実際にどんなものがあるでしょうか？

4 自己を知る

「人がもっとも知られていないのは、
自分自身にである」

キケロ（哲学者・作家）

アポロ神殿の神託にある「己を知れ」は、ユニークな自己の本質を探る秘訣のことばです。実際、わたしたちは、自分をありのままに知っているでしょうか？わたしは、どのような存在でしょうか？　わたしは、自分をどのような者だと思っていますか？　他人は、わたしをどのような者だと思っているでしょうか？

学者たちの見識によれば、もし自分自身の自画像を手にしたいならば、他人が褒めてくれたとき何を見てそう言っているのかを知るよう努める必要があるそうです。しかし、取り組まねばならない主なものとしては、気質・キャラクター・パーソナリティが、内的自己を示す三つの次元として考えられます。

□気質

気質がその人の感覚・思考・感情・行動における様式に特別の影響を与えるときにかぎり、それは目に見える形をとって表れてきます。本来もつそのメカニズムのため、それぞれの人のもつ異なった特異な傾向に合わせ、さまざまなタイプの気質が表れてくると、心理学者たちは言っています。実際に、気質のタイプには、四つの分類があります。わたしたちの大半は、これらのいくつかを合わせもっています。

◇多血質　（活力に溢れている・行動的）
◇神経気質（興奮しやすい・衝動的）
◇分泌気質（おとなしい・不精・移り気）
◇胆汁気質（短気・怒り・するどさ）

□キャラクター

キャラクターには、その人なりのきわだった性格や外見的な特徴といった、家族のしつけや社会的教育などを由来とするものが含まれます。その人を、他人と

はっきり区別するものです。

□パーソナリティー

パーソナリティーこそ、わたしたちが自分自身や回りの人たち、あるいは社会に対して見せているイメージ画、つまり「わたし」です。

パーソナリティーは、生まれつきのものではなく、永久のものでもありません。顕著なパーソナリティーは、ほとんどの場合、その人が造りだすべくして造りだしたものです。もちろん、二三日努力したところで、パーソナリティーを変えることはできません。しかし、変えることを望むならば、どうすればよいかは、おのずと見えてくるでしょう。

わたしたちが人に見せているパーソナリティーは、いつでも、自分の心で創造したものにほかなりません。もっとよいパーソナリティーを見せたければ、古いイメージ画をどんどん変え、もっとよいものに置き換えればよいのです。こう自分に言い聞かせます。「これは、わたしがかつて望んだ姿だった。そしてこれは、これから自分と他人に見せようとしている『わたし』だ。今日から、これこそわたしのパーソナリティーだ」と。

◇　◇　◇

□正直に言って、「最善のわたし」「最悪のわたし」とは、それぞれどんな姿でしょうか？

それぞれのわたしを描写するとき、もっとも適切な表現と思われることばを三つあげてみましょう。

5 自己を理解する

「人からいらいらさせられるあらゆる事柄は、自分自身を理解する契機となる」

カール・ユング（心理学者）

ときとして、わたしたちは、「人が自分を理解してくれない」とグチをこぼします。たしかにそうです。しかし、さらにたしかで、わたしたちひとりひとりにとって重要なことがあります。それは、わたしたちが「自己」を理解していないことを認識することです。空しさ・不満足・不幸せをわたしたちが感じるのは、その原因の深部に、この認識不足があるからです。研究者たちは、「人が一個人の人格をありのままに理解したければ、その人のもっとも深いニーズを満たし、真の価値観を実践する必要がある」と教えています。

□ニーズ

内面の自己を詳細に知り、人の反応と行動の根本を発見したいならば、その人個人のニーズを見極め、それをふさわしく満たしてやることが必要です。このとき、代理品や何らかの逃避でニーズを満たしてやろうなどという、安易で御馴染みの誘惑を退けなければなりません。具体的な逃避として考えられるのは、麻薬やアルコールの力を借りることです。身体的・心理的・道徳的・霊的・社会的なこれらニーズが真に満たされないと、そこには挫折しか残りません。

麻薬中毒にならないよう心がけるため、あるいは、麻薬から足を洗うためにも、自分自身に正直になり、自己の真のニーズを認めてやる必要があります。そうすればただちに、わたしたちは、自分を支えてくれる人間が必要だという確信を抱くにいたるでしょう。つまり、自分の話を心から聴いてくれる人、理解し、励まし、養い、守り、世話してくれる人です。弱り切ってしまった時には、特にこのような人が必要です。

支え合いを主軸とするこの関係（きずな）へのニーズは、結婚の動機として中心的な働きをなすものです。創世記二章18節に、こう記されています。「人が独り

でいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」。この必要な情緒的サポートが欠けてしまうと、その人の人格は、孤独、不満、はては自暴自棄に蝕まれます。しかし、いったんニーズがわかってしまえば、自分なりに優先順位を決め、それを満たしてやることができるようになり、こうして、内的自己へのより深い理解へと導かれます。

□価値観

心理学者らは「わたしたち人間の深層心理には、感性・感情・思考・行動などの様式に影響を与える、神秘的な力やエネルギーが数知れず隠されている」と口をそろえて言います。最優先したり、人生において最重要と見なす事柄、つまりわたしたちのもっている価値観は、この力強い可能性の一部です。この価値観は、心の中にあって、わたしたちの行動に強い影響を及ぼしています。

自分がどのような価値観に重きを置いているか見極めるための最善の方法は、時間・お金・エネルギーをどこに費やし、リスクを背負い込む覚悟のあるのはどこか、調べることです。この四つの指標によって、自分が何に投資しているかが浮き彫りにされ、今重きを置いている価値観が見えてきます。こうして、己の価値観をハッキリ見つめる作業を積めば、真の自己を理解するために大いに役立つ光となるでしょう。

◇　◇　◇

□実際に、わたしのもっとも深いニーズと、わたしがもっとも重きを置いている価値観は、何でしょうか？

6　自己を評価する

「自分自身のように、隣人を愛さなければならない」
レビ記十九章18節

ふさわしく自己を評価すること、つまり、自己を価値ある存在として大切にする姿勢は、肯定的で公正かつ健全な自己愛です。このように自分自身を愛するのは真正かつ成熟した姿勢であり、その人は、ありのままの自分を偽りなく見つめています。健全な自己愛は、利己主義やナルシシズムと混同されてはなりません。

肯定的な自尊心は、わたしたちのもっとも深層にある、心理的なニーズです。健全な自尊心は、あらゆる愛の出発点となるものです。まず自分自身を愛さなければ、わたしたちは人を愛することができません。

このような真の自尊心を得る秘訣は、自己を受け入れることです。自己を受け入れるとは、今あるがままの自分の姿をそのまま歓迎することを意味し、なるべき姿を受け入れることではありません。しかしこれは、自分の欠点を否定することでもありません。自分の長所と共に欠点をもまことに直視してこそ、わたしたちは、自己のふたつとないユニークさと対峙できるのです。

□自己のイメージを発見するために

認めるにせよ認めないにせよ、わたしたちは、自分の考える自己のイメージを心の中にいだいています。この自己のイメージが、感情・態度・反応・行動・能力に影響を及ぼしています。

自分を価値ある人間と見なしていれば、自己のイメージは肯定的なものでしょう。しかし、自分には価値もなく、大したことのできない人間だと見なしているなら、自己のイメージは貧困で否定的なものにほかなりません。絶えずかかえているこの心理的イメージは、わたしたちの人生や人との関係（きずな）の豊かさや質を決定づけるうえで、重要な役割を演じます。自己の概念が貧困かつ否定的なそれであれば、自分は傷つきやすく愛されることのない存在だと感じるでしょう。

したがって、拒絶されることしか考えられなくなります。拒絶される苦痛がこうして障害となり、その人の関係（きずな）は温かさと親密さに欠けたものとなっていく…。

自己を識別する際、自己のイメージこそその本質的な要素として働くのだ、と断言できます。健全で優れた婚約や、充実した結婚にとって、これは必須の条件です。健全な自己のイメージがあるなら、神が御覧になるその目で、わたしたちは自分を見つめることができます。それ以上でも、それ以下でもなく、ありのままに。

□自己のイメージを向上させるために

①自己のイメージを向上させるためのひとつは、自分たちが神の肖像（うつしえ）であり子であるという実感をもちこれにしっかり根ざしつつ、自己の価値を高めていく意志をもつことです。

②自分の強い部分（長所や人徳）と弱い部分（欠点・短所・あら・限界・道徳的な不完全さ・罪）を認識することによって、自己の価値を高めていきます。

③自分の美点も醜さも含めて、まったくありのままに自分を受け入れることで、自己との和解を体験します。

④自分のよさを発揮できる部分を見つけ、変化をスタートさせ、成熟・成長へのプロセスを歩んでいきます。

◇　◇　◇

□わたしが自分自身で受け入れがたいのは、何でしょうか？　なぜ、受け入れがたいのでしょう？

7　自己を信頼する

「自己への信頼こそ、偉大な事業を成し遂げるに欠かせない第一の条件である」

サミュエル・ジョンソン（作家）

「自己へのほんとうの信頼は、天賦の才です。今のわたしは、この才をフルに使って、自己を信頼できているでしょうか？　過ちを犯したり罪悪感があるとき、わたしはどのように対処しているでしょうか？」

□過ち

過ちは、人生経験には切っても切れない存在です。わたしたちにはだれしも、過ちを犯す可能性があります。たしかに神のかたどりとしてわたしたちは創造されましたが、完全ではありません。そのうえ、過ちと取り組むのはしばしばむずかしく、失敗を認めることも容易ではありません。過ちを正し、軌道修正する努力は、さらに骨がおれます。したがって、過ちと折り合いをつけていくうえでわたしたちに必要とされるのは、

◇勇気を奮い起こし、自分の間違いを認めること。

◇人前で自分の間違いを認めるだけの謙遜な心をもつこと。

◇必要とされまたできることならば、誤りを改める努力をすること。

過ちといっても致命的なものではありません。そのおかげで、わたしたちは、謙遜になり、学び、動機を得、チャレンジと立ち向かい、こうして解放されていきます。過ちは、今一度わたしたちを、いっそうの謙遜へ、さらなる知恵深さへと導いてくれる、大きなチャンスです。

□罪悪感

よくないと自分で思っていることをしているのに気づいたり、正しいと知っていることをやりそこなったりすると、罪悪感という、このけっして喜ばしくない

感情をわたしたちはいだきます。神学的には、人が故意に望んで神の法を破るとき、罪悪感は生じます。

良心と罪悪感はつながっています。しかし、良心の声にしたがうのは、いつでもやさしいわけではありません。わたしたちは人間で、つまづくこともあります。しかし、自分には悪事を行う可能性があり、行いの責任は自分にあるのだ、としっかり自覚していれば、けっして失望に終わることはありません。たとえ理想の実現にわたしたちが遠く及ばなかったにしても、良心や罪悪感がきっかけとなって、わたしたちには、たえずチャレンジを受けそれに応える機会が与えられます。罪悪感に関し、わたしたちはどう取り組むことができるでしょうか？

◇勇気をもつこと。こうして、「自分のしていることは、正しいか、間違っているか」を自問自答します。

◇犯した失敗について自分の責任を認めること。失望したり、落ち込んだり、疲れることなく、罪悪感の原因をありのままに糾明することで。

◇告白すること。自分を心にかけ大事にしてくれる人に、自分の悪事を隠さずに認めることで。さらに、もし信仰をもっているならば、まず最初に神に告白します。

◇誤りを正すこと。誠実に心から償いをすることで。

◇ゆるしを願うこと。内的な平和を受けとり、罪悪感を消し去ります

◇　◇　◇

□現時点での、わたしの主な間違いや過ちには、どんなものがあるでしょうか？

どのように、それに対処しているでしょうか？

わたしは、どのような助けを必要としているでしょうか？

8 自己の決断

「すべての召命は、深く追求されるときにこそ、偉大なものとなる」

オリバー・W・ホームズ（作家）

わたしたちの人生は、何もしないで自動的に、整然とふさわしいものになることなどありえません。わたしたちがなすべきことは、まさにわたしたち次第です。自分の代わりにだれかがやってくれるわけではありません。こういうわけで、わたしたちが学習しなければならないもっとも重要な習慣として、自己決断があげられます。自己決断には、意志の力・確固たる姿勢・決意が含まれています。

意志は、独特な仕方で働く傾向をもっています。目的指向性の高い意志は、わたしたちが重要と感じる何かを達成させるため、行動を駆り立てます。意志を満足させるべく、アイデアや価値観、直接の対象がすべて設定されていきます。意志は、強固な傾向や決然たる心をもって働くもので、わたしたちの人的エネルギーは、価値あるその対象に向かって方向づけられます。重要なのは、どのようにして、自己決断力のある人間になっていくかです。

□目標を設定し、それに到達するために

設定目標が、具体的で・現実に則し・単純なものであれば、効果的な結果が期待できます。このことがわかっていれば、おおいに励ましになるでしょう。さて、一方では、実際的な目標を設定するのには、実際的かつ正当な理由（わけ）があります。そのひとつは、目標がわたしたちの注意を魅きつけるものであればこそ、成し遂げたい事柄を具体化するのに役立つこと。もうひとつは、目標が達成されれば、わたしたちの自尊心をふさわしく高めることができるということです。これは、実際的な目標を設定する根拠として劣らず重要です。こうしてわたしたちは、目標をひとつひとつ達成しつつ、優れた人間になっていくことが可能です。

□意志決定をするために

わたしたち人間は、自由で責任のある存在です。したがって、確固たる人間でありえます。日々なされる意志決定は、わたしたちがどのような人間であり、またどのような人になっていけるのかを物語っています。できるかぎり最善の意志決定をするため、以下にあげた各方法がその助けとなるでしょう。実際の意志決定に際しては、それぞれの方法において神の導きを祈るとよいでしょう。

◇解決すべき問題を単純明快なことばにする。
◇関連するデータを収集し、考えられる行動の選択肢を列挙する。それぞれの選択に関し、プラス面もマイナス面も考慮する。
◇各選択肢を自分の道徳規範に照らし、許容できるものを絞りこむ。
◇自分の選択について、家族や友人といった、それによって何らかの影響を及ぼす可能性のある人と話し合う。
◇意思決定に必要な時間をじっくりとること。しかし、一度決意した以上は、断固自分の意志決定にしたがって行動する。

□適切な態度を選ぶために

◇文句をさしはさむより、提案するように。
◇憎むのではなく、愛するように。
◇破壊ではなく、建設的に。
◇すぐ投げ出さず、じっと耐え忍んで。
◇カゲ口をきかず、ほめてあげるように。
◇傷つけず、癒してあげるように。
◇独り占めせず、与えるように。
◇遅らせずに、ただちに行動。
◇ののしらず、ゆるすように。
◇失望せず、祈るように。

◇　◇　◇

□決断力のある人になるため、わたしには、何ができ、何をすべきでしょうか？

9 自己実現

「神の栄光とは、人がその人格を全く生きぬくことである」

聖イレネウス

わたしたちはみな、高い内的なエネルギーを可能性としてもっています。このことは、機会さえ与えられれば、だれにでもわかることです。いいかえれば、わたしたちには次のことが見えてきます。

◇わたしたちはそれぞれ、ユニークな存在です。自らを成長させていかねばなりません。さもなければ、何かを失うことになります。人間として、わたしたちは、善と悪、正しさと過ち、愛するか愛さないかを選択する能力をもっています。

◇選択が求められる意志決定の能力と責任を、わたしたちはもっています。わたしたちは人生の大半を、自らがなす選択と決断によって支配しています。わたしたちの心に成就されるのを待って息づいているのは、すぐれて申し分のない霊と、誤りなく信頼できる決断力です。だれが、わたしたちの夢の光をかげらせることができるでしょう?

◇自分に重要な何かを達成するのは、報い大にして、わくわくする事柄です。しかし、もちろんタダで手にいれることはできません。真に望む夢の実現には、それ相応の行動をする覚悟が必要です。

◇自己実現の目標は、人を追い抜くことではありません。むしろ、ありのままの自分の最善を生き抜くことにあります。できるかぎりの最善を尽くすことは、わたしたちにとって重要です。わたしたちが認めるべきことは、到達目標も人それぞれの個人的な選択にすぎず、その実現もその人次第だということです。

◇自分のあるがままの姿を百パーセント生きるためには、真剣な決心をしなければなりません。どのような人になるかを決心します。自分なりの理想の生き方の選択です。

□自己実現の秘訣

◇前向きにリスクを負うこと。リスクを積極的に背負わなければ、個人的な成長も、真の自己実現もありえません。

◇障害を克服すること。障害とは、わたしたちと目標との間に立ちはだかる壁です。バリケードのようにその進行を妨げることもあれば、ありきたりなチャレンジの場合もあるでしょう。障害の難易度は、わたしたち自身の対応にかかっています。実践的にいきましょう。ありもしない問題をあるかのように考えないことです。しかし、現実的に対処しましょう。存在する問題なら決して無視しないように。

◇希望を失わないこと。何もかもうまくいかないときこそ、「希望の時間」です。希望は、真に霊的な事柄ですが、まったく心理的な事柄でもあります。医者によれば、患者の回復はしばしば希望をもつことから始まるとのこと。心理学者も同様に、患者やクライアントの多くにとって絶望から回復への分岐点となるのは、その個人が希望を与えられたかあるいはそれを見いだしたときだと言っています。わたしたちの心に希望を生み出すには、どうすればよいのでしょうか？　それには、「生きているかぎり、希望はある」というふうに、「可能性」に目を向けることです。

◇優先順位を決め、時間を有効利用すること。わたしたちが使わねばならない三大天然資源のひとつは、時間です。あとの二つは、エネルギーと知性。時間をいかに使うかは、成功するか否かを決める大切な要素です。時間の有効利用には、実際の優先順位をどうするか決めることです。

◇　◇　◇

□以上の「自己実現の秘訣」のうち、わたしにもっとも必要なのはどれでしょうか？　その理由は？

自己をコントロールする

「尊厳の感覚は、自分自身に『ノー』と言える度合と共に成長していく」

エイブラハム・J・ヘシェル

「さあ、みんなやってるんだから」「弱きになるなよ」「愛していることを証明して」「ほんものの男（女）だってところを見せてくれよ」　わたしたちはこの手のことばをよく耳にします。しっかり認めましょう。わたしたちはだれしも、疎外されたくない。しかし、道徳が無視され何でも許される時代にわたしたちが暮らさざるを得ないからといって、この手の事柄に屈してはいけません。「ノー」と言えばよいのです。

現代の多くの若者、あるいはそう若くないにしても、未婚の父や妊娠した十代の女子、未婚の母の多くは、かつて「ノー」と言える知恵と勇気があり、そうしてもよいと早くに気づいていればよかったと述懐します。しかし、今からでも遅くはありません。たとえば婚前交渉といった事柄を選んだ結果、自分たちの人生・子供の人生・家族やその将来にどれほど傷をつけたかについて、彼らは今でも決して振り返らず、また同じことを繰り返しているのですから。

麻薬を試すとか、性的あるいはその他の非行へといざなう絶えまない誘惑をほんとうに避けたいならば、こうしたことに耽る輩（やから）とつき合ってはいけない。現実的になる必要があります。わたしたちに必要なのはセルフ・コントロールです。自分自身を治め、自らの行動や衝動、感情をしっかり規制し、人生のふさわしい規範にしたがって、自らを律し指揮するのです。

セルフ・コントロールしなければならない困難な部分をだれしもかかえています。たとえば、口を慎むとか短気を押さえる、感情に左右されない、睡眠や散歩時間をしっかり管理する、酒の飲み過ぎや過食・遊び過ぎへの誘惑を断つなど、さまざまです。それでは、セルフ・コントロールのいちばんむずかしい問題をみていくことにしましょう。

□感情

わたしたちは生まれながらにして、感情の巨大な力をもっています。人や状況に対する主観的応答や反応、たとえば、気持ち・感性・愛情・情熱などです。たいていは健全ですが、全部が全部そうではありません。感情は、どうコントロールすべきでしょうか？　心理学者によれば、わたしたちはみな、一日に何度も、たいていは意識せずに次のような「循環」をたどっているそうです。その「循環」とは、

1　わたしたちを動揺させうる状況が生じる。
2　その状況が、知性に「ある考え」を醸し出す。
3　その考えが、今度は、脳に心理的反応を造る。
4　その心理学的反応は、肯定あるいは否定的感情を造りだす。
5　その感情に促され、さらに同種の考えが形成され、さらに、心理的な感情の反応が引き出され、こうして、この循環は繰り返されていく。

これら一プロセス全体は、ほんの二三秒で完了します。ある状況に対する元の反応、つまり、最初の「ある考え」の支配下にいるかぎり、感情が幅をきかしてしまい、本来のコントロールの力を奪ってしまいます。したがって、感情をコントロールする手段としてよりよいのは、最初に感情を生み出した反応、つまり「ある考え」を、しっかり支配下に置くことです。

◇　◇　◇

□セルフ・コントロールに関する、もっとも具体的な自分なりの問題に対し、わたしはどう取り組んでいるでしょうか？

自己をオープンにする

「闇を呪う暇があれば、ローソクを灯したらよかろう」

クリストファー運動のモットー

プライドや利己主義の闇から解放されたければ、わたしたちは自分自身の殻から外へと出ていく必要があります。人は独りきりで生きていくことなどできません。愛しまた愛されることを是が非にも必要としているからです。ですから、だれかとの深い通じ合い、そして心からの分かち合いが必要です。では、このような深い通じ合いと分かち合いは、どこから始めたらよいのでしょうか？

□すぐれた聴き手になるために

「聴く」ための技術をわたしたちは失ってしまいました。たしかに音は「聞いて」いるでしょう。しかし、心から「聴いて」いるのではない。今単に聞いていることに、心から耳を傾けるようになれば、どんなにすばらしいことか…。「聴かない」ことが、誤解や食い違いをはじめ、数え切れない問題を生じさせます。これに対し、心から「聴く」ことは、可能性の新しい領域全体にわたしたちの心を開かせてくれ、ほんものの関係（きずな）を築くうえでも欠かせません。

「聴く」ことは、特に知恵深い人との分かち合いから学ぶためのひとつの手段です。人間としての成長と人生に対する理解が深められます。しっかり聴くことは、思考と学習を可能にします。人生にとっての有益な教訓を得ることができます。

しっかり「聴く」ための最善のやり方は、結論をあまりに早急にくださないことです。そうすれば、個人的な思い込みや先入観を廃し、他の見方にもしっかり耳を傾けることができるでしょう。しかし、このような集中を一日中休まず続けることなど不可能です。できるのは、一日に何度か、自分を無にして人に「聴く」時間を割くことです。とりわけ、愛している人にはしっかり耳を傾けます。

心から「聴く」姿勢は、わたしたちの生活の重要な領域に好影響を及ぼします。ことに家族や社会での人間関係（きずな）においては、自分の話を心から聴いてもらうことはすばらしい。全身全霊で理解しようとするその姿勢のおかげで、心の重荷は軽くなり、そのうえ人生は楽しくなります。また、ビジネスの世界でも、すぐれた聴き手は、会社にとっての計り知れない財産です。

「聴く」力をフルに発揮するためには、興味をもち、深く関わり、積極的でなければなりません。すぐれた「聴き方」とは、耳だけでなく、目も心もフル稼働させます。かなりのエネルギーを使います。結婚や家族の関係（きずな）・職場・神との通じ合いにおいて、このようなよい聴き方は特に重要です。

有効な聴き方に際し、大きなネックとなるのは、自己中心的な態度・傲慢・怠惰です。自己中心は、他人を疎んじ、だしに使い、自分だけの満足を得ようとすること。傲慢は、いばって他人を見くびる姿勢。そして、怠惰は、オープンになって心から聴くに無関心であることです。

□積極的に聴くための心得

◇充分な時間をとって
◇気を散らさず集中して
◇質問をしながら
◇相手を歓迎する姿勢で
◇相手の気持ちを聴く
◇尊敬の心をもって
◇自分の考えに固執せずに
◇話をさえぎらずに
◇関心を示しながら
◇最後まで話させてあげる
◇聴いた内容は他人にもらさない
◇以上を実践する

□わたしは、頭も心もオープンでしょうか？（※）

自己の超越性

「主よ、あなたは、ご自身のためにわたしたちを造られました。ですから、あなたのうちに憩うその日まで、心は安らぎを見いだせないのです」

聖アウグスチヌス

超越していくこと、つまり、わたしたちの創造主であり至高の主である神に対しオープンであることは、わたしたちの暮らす今の時代には忘れられ、失われてしまった次元です。

偽らずに自分を見つめるならば、満たされる必要に疼く空虚が心の奥深くあることを、わたしたちは認めざるをえません。人の心は、自分を超越した何かあるいは誰かを求め、あえいでいます。

聖人とは、その人生において神の超越性を深く体験した人のことです。彼らはその人生を証しとして、わたしたちの人生は、神なくしてはままならず無力であると、声高らかに伝えています。すなわち、己の人生を神の庇護に置くために向き直り、こうして神を理解するまでは、「自己」を悟りようもないことを。また、神のみことばに心をこめて聴き入ることが、わたしたち人間にはどうしても必要だということを。どこもかしこも物質至上主義が幅をきかせる世界には、神の超越性を復興（リバイバル）させなければなりません。この復興は、わたしたちの心の深みで体験されるべきものです。

◇知性においては、新しい思考を。
◇心においては、新しい探求を。
◇霊魂においては、神の聖なる霊を。

□神について自問するために

神の超越性は、神からの無償の賜物です。心の謙遜な単純な人に与えられます。このように祝福された人になるため、わたしたちには何ができるでしょうか？

神に関する問いは、あらゆる疑問の中で、もっとも重要かつ根源的です。なぜなら、人生のあらゆる問題は、神についての問題にその根があるからです。わた

したちはだれしも、意識的であれ無意識であれ、望むと望まないにかかわらず、神と関わりがあり、神に結ばれています。聖書の啓示によれば、これは、神が創造主であり、贖い主であり、救い主であるからです

ある専門家が言うには、現代人の質問として第一位にあげられるのは、「自分の人生の経済レベルを向上させるにはどうしたらよいか」というものだそうです。そこで、神について自問するための手初めとして、浮世離れした神学概念をこねくりまわすのではなく、生活水準や暮らしの質を向上し発展させるといった、言わばわたしたちの生活体験や望みなどからスタートさせることにしましょう。そうすれば、自分の人生の質・意義、あるいは人生全体の究極の意味について自問しやすいでしょう。

さて、それらをクリアして初めて、神について自問する準備ができたことになります。人生の意味について自分に質問を投げかける前に、先走って神について考えないでください。人生こそ、神の神秘の領域に根ざすものだからです。そして、人生のこの根源的な疑問の奥底には、神に関する疑問が未だ答えられず待っています。人生というこの超越的な疑問に取り組まないなら、わたしたちの心でくすぶっている他の重要な疑問に答えることもできないでしょう。信じるか、信じないか、それが問題だ！

□わたしは、ほんとうに神を信じているでしょうか？

（※）

婚約するには

婚約しているわたしたちは、だれ？

あなたがたカップルは…、希望です！

かつて、みなさんはそれぞれひとりでした。愛する人を探しながらも…。

そして今日、みなさんは、婚約しようとしています。みなさんの役割は偉大です。

明日、みなさんは、神の祝福のもと、夫・妻のちぎりを結びます。最高の夢に向けて。

未来には、新しい家族になるでしょう。夢が現実のものとなるのです。

この冒険全体を成功に導き幸せをつかむため、何か秘訣のようなものがあるのでしょうか？

学者や専門家たちによれば、正直で、深く、愛に満ちた出会いをお互いにするなら、それこそ、結婚と家族生活を成功させ幸せになれる最高の秘訣とのこと。

健全で・生き生きし・優れた婚約者になるための最高の秘訣を、おふたりが共に探求できるよう、ガイドとして役立つ提案を、心をこめ、これからの章でご紹介しようと思います。

ですから、いつものように、各ステップでは、

第一に、じっくり読んで内省し

第二に、その内容をもとにラブ・レターを書き、

第三に、一緒に、分かち合いをしてください。

用意はいいですね。それでは、一日に一ステップの意気込みで始めましょう。

Ⅰ　互いに愛し合うために

婚約しているおふたりそれぞれの心には、神の愛のエネルギーが隠されています。もし、それが生かされるなら、全地をおおう真の愛の革命が溢れ出す…。これこそ、わたしの確信です。

しかし、愛の、いわば「核融合爆発」を生じさせ、そのエネルギーを放出するためには、おふたりが自己を分かち合いながら、男女として深く分かち合う必要があります。

最終的にわたしたちにわかってくるのは、個人・カップル・家族・社会の内面、つまりわたしたちの心の中には、神秘的で超自然の力があることです。これは、神の力です。これを用いるなら、わたしたちは地上をまったく変えることができます。

そうすれば、暴力はなくなり、正義が始まり、こうして、平和は到来します。

ティヤール・ド・シャルダンの預言、「いつの日か、風・波・潮・引力を支配したそののち、我々は、神によって、愛のエネルギーを統率する日を迎えるだろう。こうして、歴史上ふたたび、人は、『火』を発見するに違いない」は、こうして実現します。

「平均的な人は、精神に与えられた可能性の10パーセントしか使っていない」とは、アインシュタインのことばですが、わたしは、「平均的な夫婦は、ふたりの人生において、秘められた愛の可能性の10パーセントも放出していない」のではないかと思っています。

おふたりが、このすばらしい冒険に乗り出すお手伝いをすることは、まさに、このワークブック全体の目的とするところです。

心の準備ができましたら、お互いに合図してください。すぐに冒険に出発しましょう！

1　愛の意味

だれでも、愛の何たるかについて個人的に定義することができるでしょう。どの定義も、その人なりの深い神秘的な感性に基づくものです。ですから、万人が満足できる完璧な「愛の定義」を試みるなど、ほとんど不可能です。なぜでしょうか？　それは、人との関係（きずな）が、それぞれに異なった形や次元において生ずるものだからです。愛には、多くの異なった表情と程度があります。愛のもつ表情と程度に関しもっとも共通した要素を以下にあげてみましょう。

1　セックスの本能に基づく愛。生命のニーズに基づく衝動的な欲求、いわば、本能的かつ感覚的といえるものです。「肉体的な愛」の次元です。

2　ロマンスに基づく愛。五感・感情・想像に基づく自発的な愛情です。「エロティックな愛」の次元です。

3　友情に基づく愛。人の知性・心・意志・霊魂のニーズに基づき自然に魅き合うものです。相互に受け入れる、相手を信頼する、相互に与え受けるといった要素を本質としてもっています。

4　慈善に基づく愛。無私・忠実・犠牲の精神を実践しつつ他人のニーズに絶えず応えようとする、個人的な堅い決意です。「受容する愛」の次元です。

5　アガペの愛。ありがたい恵みとして人がいただく、神の愛です。受容する愛が転じ、「愛そのもの」であられる神の愛、アガペになります。

□愛とは、こういうものです！

◇気持ちや感情に彩られた、相互に受け入れる関係です。

◇決意であり、誓約です。意志の働きによるもので、単なる感情ではありません。

◇意識的・積極的な傾向です。内面からこみあげてくる働きに基づき、最愛の人に益をもたらそうと努めます。

◇日々、克己（こっき）するものです。独占欲ではありません。

◇他人の幸せを誠実に求めようとする望みです。
◇だれの心にもある、内面の、深くすばらしいあるものです。
◇愛である神がわたしたちの心に創造された、人間の神秘的なエネルギーです。
◇愛は、肉体に心を宿している人間のためのものに違いありません。

尊敬と畏敬の心で人を見つめるとき、人をとても愛しその人の幸せを心から願うとき――たとえ自分がその幸せにあずかれないとしても――、そういうときこそ、わたしたちは愛の王国にいます。ひとりの人に神秘を感じ取るのは、その人に秘められた可能性が無限であると認識しているからです。つまり、その人の中に、神の現存をみとっているのです。神は、真・善・美の神秘そのものです。ときには傷だらけになってでもそれを手にしようと、わたしたちはだれしも探し求めています。

◇　◇　◇

□70～71ページにある、愛の姿に関するさまざまなリストを参考に、自分にとって大切と思えるものを、五つ選んでみましょう。

そのうち、自分自身の中でわたしが特により向上させたいのはどれでしょうか？　二つにしぼってみましょう。

2　結婚前のふたりの愛を識別するために

婚約期間でポイントとなる質問は、「わたしたちは、相手をほんとうに愛し、また愛されていると互いに感じているでしょうか？」というものです。もしこの質問に勇気と誠実さをもってストレートに答えるならば、おふたりが有益なしっかりした結果を得られるのはまちがいありません。そして将来、子供たちやそのまた子供たちも恩恵を受けます。わたしたちは、どうしたら、ほんもので成熟した愛と、いつわりの一時的なのぼせあがりとを区別できるでしょうか？

□成熟した愛

1　愛する人の全人格に心底魅かれている。

2　友人・芸術・趣味など、愛する人の多くに魅力を感じる。

3　何ケ月単位でゆっくり培う関係（きずな）。お互

■一時的なのぼせあがり

1　目・からだ・洋服といった恋人の外見に魅かれているだけ。

2　運動が得意とかユーモアがあるなど、せいぜい二三魅かれるところがある程度。

3　数時間とか数日程度で、いきなりロマンスが生ま

いの家族を援助する習慣が板についている。
4 浮き沈みはたいしてなく、相手をしっかり知っており、何をするか見当がつく。
5 その関係は、相手の努力を励まし、お互いを高めるのに貢献している。
6 その関係はじっくりと時間をかけて熟成される。ひとつ所にとどまらず、人柄が常に成長する。
7 愛する人のそれまでのつきあいをも大切にする。欠点をも認めた、偏見のない態度。
8 家族や友人が、ふたりの関係を応援している。
9 長期間離れていられる。より関係を深めることさえできる。
10 「わたしたち」「わたしたちの」と、複数形のことばが普通。他人を大切にする。
11 与え、分かち合い、寛大に奉仕する精神を実践。
12 無欲。やきもちもごく軽い。
13 その関係は、しっかりした根拠・自由・決意に基づいている。

れる。一目惚れ。
4 浮き沈みが激しく、相手がどんな人かはっきりしない。
5 つきあいは、人格を損なうような類いで、全然成長がない。
6 衝動的な欲望と同じで、つきあいはその場かぎり。
7 恋人だけを理想化し、ふたりだけの世界をつくる。相手の欠点には目がいかない。
8 家族も友人も、そのつきあいを好ましく思っていない。
9 長い間、離れていることに我慢できない。夢も覚めてしまう。
10 「わたし」「わたしの」「彼は」「彼女は」と、単数形のことばを連発する。自己中心。
11 他人からもらい、人をくいものにし、利用する態度ばかり。
12 ひどいジェラシーにしょっちゅう駆られる。
13 つきあいは、本能・感情・思い込みに左右される。

14　社会と子供たちに目を向けている。

14　社会に目を向けていない。

◇　◇　◇

□以上の十四の貴重なポイントに照らして内省し、それから次の質問にしっかり答えてみましょう。

わたしは、なぜあなたを愛しているのでしょうか？

3　愛することを学ぶために

ほとんどの人たちが、愛することは、何か自動的で簡単にできてしまうものであるかのように思いこんでいます。つまり、愛するためにあえて学習することなどないと信じているのです。これは、よくあるひどい間違いで、日常の苦痛に満ちた体験を振り返れば明らかでしょう。愛する能力の欠落は、「精神の未熟」を意味します。人間学の研究者たちが、「愛は、他のさまざまな技術と同様、ひとつの技術である」と明言する理由はここにあります。この技術は、愛のどの段階においても、自己規律や精神集中さらには忍耐の実践をとおして、個人的体験から学び培っていくべきものです。

共通するこのような間違いは、愛するとは何であるかについての、誤った概念がもとになっています。わたしたちだれもが必要としているのは、「愛することの学び」を理解しこれを体験することです。

◇愛する人を、特別な人格として見直し発見する。
◇愛する人を信じ、ありのままの相手を受け入れる。
◇愛する人のために、意思決定をする。
◇愛する人のしていることではなく、その人そのものに注目する。
◇愛する人と、寛大な心で分かち合う。
◇自分自身をすっかり相手に与える。
◇愛する人から「受ける」。そうすれば、「与える」可能性を相手にあげることになる。
◇愛する人の長所や努力を正当に認めてあげる。
◇愛する人に対し、正直にオープンに接する。
◇愛する人を信用し、信頼する。
◇相手をゆるし、また相手からゆるしてもらう。
◇単純な心で、相手に奉仕する。
◇相手が成長するように、助ける。
◇相手を愛しているしるしを頻繁にかわす。
◇相手のニーズに応える。
◇相手にとってのほんとうの幸せを探す。
◇同じ方向に向かって、共に歩んでいく。

聖パウロは、コリント人への第一の手紙第十三章で、愛についてのすばらしい教訓を書き残しています。こ

のことばに耳を傾け、内省してみましょう。

「愛は、忍耐強い」＝怒りを表わさない。
「愛は、情け深い」＝建設的である。
「愛は、ねたまない」＝独占しない。
「愛は、自慢せず
　高ぶらない」＝印象づけようとしない。
「愛は、礼を失しない」＝おだやかで礼儀正しい。
「愛は、自分の利益を求めない」＝自我を押し通さない。
「愛は、いらだたない」＝いらいらと短気でない。
「愛は、恨みを抱かない」＝悪事を水に流す。
「愛は、不義を喜ばない」＝不正を絶対喜ばない。
「愛は、真実を喜ぶ」＝真理の勝利を喜ぶ。
「愛は、すべてを忍ぶ」＝つねに誠実で忠実。
「愛は、すべてを信じる」＝完全な信頼をもつ。
「愛は、すべてを望む」＝人々の最善を願う
「愛は、すべてに耐える」＝どんな障害も堅忍する。
「愛は、決して滅びない」＝永遠である。

◇　◇　◇

□愛について、わたしは個人的にどんなことを学んでいるところでしょうか？

よりよく愛する人になるため、わたしはどのような段階をとるべきでしょうか？

その最初のステップとして、わたしは何をすべきでしょうか？

II 互いに尊敬するために

かつては、どの文化においても、ピューリタニズム（清教徒の厳格主義）の強い影響がそこかしこに見受けられたものです。人間を、単に霊的な存在としてのみ見なす傾向です。

この見解がもとで、人間のもつ性的特質（セクシュアリティー）に存在する、身体的・情緒的・心理学的側面は価値のないものと見なされました。このため、人間の関係（きずな）といえば、性差の役割が抹消された、純粋に霊的な「プラトニック」な事柄に限定されてしまいました。

この結果、みなさんよくご承知のように、柔軟性にきわめて欠ける厳格な道徳原理が生じました。

これに対する大きな反動が一九六〇年代に台頭してきました。いわゆる「セックス革命」です。セクシュアリティーは、身体的・情緒的・心理学的な次元に限られてしまい、霊的なそれは排除されました。そして、この「新しい道徳」が、社会に歓迎されました。

こうして、書籍・雑誌・手引き書・成人指定の映画などの製作が奔流のようにきりもなく巷（ちまた）に溢れだし、セクシュアリティーの身体的・情緒的・心理学的側面の重要性ばかりを強調し続けました。「メーキング・ラブ」と称して…。

「セックス革命」は独自の不均衡さを造り出し、さらに、セクシュアリティーの霊的な側面に対する適切な配慮に欠けたセックス観を提供し続けてきました。ここから、婚前性交渉や結婚外の肉体関係の流行までは、目と鼻の先でした。

わたしたちの暮らすこの時代では、セックスは、どこでもうわさされ、ほとんど見境のない放埒に任されています。セックスといえば、単なるお楽しみ、快楽、遊びと同一視され、責任などどこ吹く風です。

しかし、破滅的な伸びを見せる「エイズ」を代表格に、セックスを感染経路とする二十種類にも及ぶ危険な性病が登場してきた今、数多くの人々が、混乱と挫折、不満と空虚の中――意識的にせよ無意識的にせよ――、人間のセクシュアリティーに失われた、あの霊的な次元を熱心に探し求めるようになってきまし

た。その意味と神秘とを…。

新たな尊敬に裏打ちされた、男女間の新しい関わり方を、人は探し求めています。

明日の世代は、この時代の男女によって相互の尊敬を土台として築き上げられつつあります。これこそ、大きな希望です！

デリケートでありながら緊急の課題です。

すなわち、

わたしたちには、相互の尊敬があるでしょうか？

1　人間のもつ性的特質、セクシュアリティ

「愛」をセックスに限定する現代の風潮は、「愛」の何たるかの理解をはなから難しくしてしまう原因のひとつです。今日の多くの人にとっては、「愛する」と言えば「セックスをする」ことにほかなりません。

社会は厳格主義（ピューリタニズム）の新時代を迎えようとしていると十年前予言されたにもかかわらず、現代人にとってのセックスは、単なる生殖器の結合か肉体的行為にすぎないと考えるのが普通です。回りを見渡せば、性の氾濫する社会にわたしたちが暮らしているなど一目瞭然です。

二千人に及ぶアメリカ人男女の調査は（＊）、アメリカ人の五人に一人が、十三歳になる前に童貞（処女）を喪失すると報告しています。

（＊）「The Day America Told The Truth（アメリカが真実を語る日）」ジェイムズ・パターソン／ピーター・キム共著（プレンティス・ホール社一九九一年五月出版）

ニューヨークにあるアラン・ガットマッシャー研究所の調べでは、平均的なアメリカ人の初体験は、十六歳とのこと。十代の女子で性行為経験者は、一九七三年の36パーセントから跳ね上がり、今や半数を越えています。その十人に一人は、それまでの三か月以内に複数の人間との肉体関係があり、他のほとんども、二三人はセックス・パートナーがいるとのこと。大学生女子についても、一九八九年時点で90パーセントが性行為経験者で、一九七五年当時と変わらない数値を示しています。都市研究所の最近の報告書には、二十歳（はたち）前男子の性行為経験者も、一九七九年には73パーセントでしたが、現在では80パーセントにまで上昇したことが記載されています。

結婚における愛に、性行為がきわめて重要な側面を担っているのはまちがいありません。しかしながら、それは、男女が相互にまったく与え合う誓約のほんの一部にすぎないこともまた真実です。したがって、性行為は、結婚における「愛」のひとつの表現にすぎません。

人間のもつ性の特質「セクシュアリティ」という用語の概念を単なるセックスに限定しその意味をせばめてしまうのを避けるため、「本来セックスとは、全人格の充満と深さ――すなわち、肉体の一致にとどまらず、感謝・尊敬・愛情・思いやり・ひとつの心に対するあこがれなどを含む――を示す一表現である。」という認識を、わたしはよくもちだします。セックスは、人が「する」ことではなく、自分のすべてを与え合うことです。セクシュアリティは、人格を有するひとりの人間に関する事柄で、さらに詳しく言えば、男性としての自分、女性としての自分と関係しています。相互の尊敬は、人間そのものを総合的なターゲットとしています。人間のセクシュアリティにとって、この相互の尊敬はきわめて重要です。したがって、婚約が健全ですぐれたものとなるうえでも、重要な秘訣となるものです。

相互の尊敬が意味するのは、人がお互いの尊厳、つまり神の肖像（うつしえ）であることに意識的になることです。こうして結果として、尊重と信頼をいだいて相手を評価しつき合うことがお互いできるようになります。このためには、慎重にふるまわなければ気分

を損ねてしまう「王か王女」に対するがごとく相手に向かい、自分の楽しみの対象としてではなく、むしろ聖別されたひとりの人間、すなわち神の子として関わっていくことが求められます。

簡単にできることではありません。お金で手に入れたり、そこらの薬屋で買えるのとは違う、何かが必要です。おふたりともに、ふさわしい自尊心と自制心を備え、神に基盤を置いた深い愛がなければなりません。別の言い方をすれば、今の時代には過少評価され、足蹴にされ、忘れられてしまった「あの徳」が要るのです。その徳とは、「純潔」です。

◇　◇　◇

□わたしたちは、お互いを尊敬しているでしょうか？（※）

相互の尊敬をいだいて「いる」というしるし、あるいはいだいて「いない」というしるしをあげてみましょう。

2　純潔

「純潔」ということばも、その概念も、その実践も、今日のわたしたちが暮らす社会からは葬り去られてしまいました。「セーフ・セックス（安全なセックス）」などと詐称する理論にとって代わられています。しかし、この「セーフ・セックス」こそ、災害の温床となりつつあるとは、多くの研究者たちの一致した見解です。接触によって感染するあらゆる伝染病から自らを守り、婚約を健全にすごす唯一安全な手段は、結婚前はしっかり自制し純潔を守ること、と現代の専門家が結論する理由はここにあります。

なんにせよ、「純潔」とはどのようなものでしょうか？　純潔は、セックスを恐れこれから逃げたり、拒絶する、といった否定的な事柄ではありません。実は正反対で、ほんものの純潔ならば、百パーセント肯定的なエネルギーです。人間に秘められている可能性、すばらしい価値観、力強い武器です。言い換えれば、たったひとつの徳でさえ、優れた貴重なもので、その

徳を実践する人に特別の価値と報いを与えます。

純潔は、性欲を正しくコントロールする力で、それぞれの人の生き方に応じてほんものの愛を実践できるよう欲望を従わせます。性的エネルギーを適正に扱わず、無視したり、性的本能の力に明け渡したりすれば、私たちのもつ愛する力はひとたまりもありません。しかし、日常経験からわたしたちが十分承知しているように、性的衝動にはたいへんな力があり強引で、これを手なづけるのはかなり難しい…。

「信仰者」にとっては、ただ恵みによってのみ――恵みは神から来るものでわたしたちの心を刷新します――、内的なバランスと調和を保つことができます。しかし、真剣な決心をしなければ得られないセルフ・コントロールは、だれにとっても必要不可欠な要件です。この勇気ある態度、このほんものの自己統率こそ、わたしたちがここで「純潔」と呼ぶものです。これは、つねに神からいただく賜物で、絶えまないセルフ・コントロールを実践しつつ、へりくだって辛抱強く神に祈っていかねばなりません。

婚約者の方々と共に歩ませていただいた司牧の月日をとおして、わたしなりに発見し学習してきたことがあります。それは、実践的なポイント「コツ」です。黙ってはいられません。何としてもお伝えしたい。おふたりで実践してくださるよう心から願っています。

1 自分自身とお互いに対し、誠実かつ正直になることです。具体的には、セクシュアリティ・純潔・貞潔に関連する、自分たちなりの理想、最善の考え、意向、姿勢、目的、期待をお互いに分かち合うのです。

2 婚約者のエンカウンターや、何らかの講座、セミナー、黙想会にふたりそろって参加することです。他の婚約者のカップルとも一緒に、婚約者であるとはどういうことかについて、しっかりした知識と正しい方向性を学習します。

3 ふたりで一緒の誓約をすることです。セックスを自制し、ペッティングや激しいキスを交わすあるいは激しい愛撫など、直接ではなくとも次第に婚前性交渉に発展しかねない行為は厳に慎む、といった約束、公約、誓約、誓いを共に交わします。

4 ふたりそろって祈ることです。そうすれば、神の

霊がおふたりの光となり力となってくださいます。

5 婚約者カップル同志でサポート・グループをつくることです。定期的に会合します。

6 ふたりそろって指導してくれる人を見つけることです。夫婦、司祭、聖職者など。

◇ ◇ ◇

□わたしたちは、結婚前の誓約として、何を具体的に合意できるでしょうか？ 詳細にあげてみましょう。

3 ほんものの愛なら、待ちます！

このワーク・ブックを書き終えようとしていたころ、わたしの生涯でもっとも印象深いできごとがありましたので、みなさんに分かち合いたく思います。というのも、わたしは、このできごとを革命的なものと考えているからです。カトリック青少年司牧全国連合を含む、キリスト教諸派および組織の二十七の団体に所属する二万五千人ものティーン・エージャーが、一九九四年七月二十九日の夜明け、アメリカの首都ワシントンの大芝生にやってきました。誓いのことばを記した二十一万千百六十三のカードが、そこに立てられました。このカードには、「結婚するまでは、セックスをしないで待ちます！」という誓約とともに、国中のティーン・エージャー自らによる署名（サイン）が記されていました。

この誓約こそ、「キリスト者純潔運動」のこれまでの成長をもっとも如実に物語るもので、ほんとうにわくわくさせられました。キリスト者純潔運動は、これ

に先立つ一年四ケ月前、テネシー州ナッシュビルにある「チューリップ・グローブ・バプティスト教会」でのティーン・エージャー五十九人による誓約の署名を皮切りにしています。彼らの計画では、結婚式の晩、純潔を守ったしるしとして配偶者に指輪を渡すことになっています。

調査結果によれば、高校卒業前にティーン・エージャーの大半が初体験を済ませるというこの時代に、「純潔」こそ、多くのキリスト者の若者の目に「反逆」と映りました。ワシントンの大芝生を行進した若者たちは、夜のコンサートで今度は、クリスチャンのロック・グループの音楽に合わせ、雨の中踊りました。この子供らの行動は、まさに大衆文化に反抗するものです。セックス革命に対抗し、純潔を守るという「反革命」が起きたのです。

「セックス革命」と、愛の「反革命」のふたつの世代を代表する親娘の対称的な逸話を紹介します。

□娘、愛の「反革命」の申し子の話

「小さいときから、将来の夫のために純潔を守ることをいつも望んでいました」と、誓いのカードを他人のそれときちんと並ぶよう地面に打ち込みながら、十七歳の娘（教会の高校生会所属）は言いました。隣でゴム製のつちを振るうのは、彼女の十六歳になるボーイ・フレンド。純潔を守るのはふたりにとって大変じゃないよと、彼らは言います。デートのとき、「キスしはじめたら、ふつうどっちもお互いに止めさせるようにしています。その先どうなるか、わかっていますから」とは彼女のことばです。

■母、「セックス革命」の落とし子の話

この娘の三十七歳になる母親は、結婚前に自分が妊娠したことを回想しながら話してくれました。娘が生まれたときに、彼女は相手の男性と結婚しました。この男性は今もまだ彼女の夫です。ハネムーンから赤ちゃんのいる家庭にもどってくるのは辛いものだった、と当時を振り返ります。「もし、こういうプログラムを体験していれば、ずいぶん違っていただろうと思い

ます」と、彼女は誓いのカードを指さして言いました。

最後に、この「ほんものの愛なら、待ちます！」運動に参加した若者が署名した「純潔を守る誓約のことば」を、みなさんに分かち合おうと思います。

「ほんものの愛なら、待つもの！と信じ、
わたしは、
神・自分自身・家族・デートする相手・
将来の配偶者そして将来の子供に誓約します。
結婚の誓約によって結ばれるその日まで、
わたしは肉体の純潔を守ります」

どうしますか？　「愛の革命」はすでにスタートしました。勇気あるこの開拓者たちの誓約に、みなさんも、自らの知性・心・意思・霊魂を向けさせますか？しっかり考えてください。祈り、決断してください。将来の結婚と家族生活が一味ちがうものになること請け合います。みなさんも、開拓者の仲間入りを！

Ⅲ　お互いに関わっていくために

民主主義を文化的背景とする現代では、個人の権利尊重と男女の基本的平等がその土台として強調され、結婚についての新しい概念が生み出されてきました。このため、結婚を成功に導くのは、かつてないほど困難さを増しています

これは、結婚に頻発する破綻の原因をも説明するものです。

結婚の存在は主要だったその立場を失い、家族の伝統は過去のものとなりました。このため、かつてのような家族の団結は外面的にはもはやありえません。

言い換えれば、結婚がきちんと機能するよう見直されるべき時期が到来しているということです。さもなければ、現状に見切りをつけさっさと違う人とやり直してしまおうと、その強い誘惑に、配偶者らはつねにさらされることになってしまいます。

実際に、現代の人々が結婚において探し求めているのは、関係（きずな）の深さです。

しかし、古いアプローチのままでは新しい結婚像は容易に実現されえないという事実は、いまだ見逃されがちなのが現状です。

人が結婚から多くを引き出すことを求めるなら、結婚の準備にもさらに多くが求められることになります。新しい取り組みが必要です。

一方で、婚約期間における愛のプロセスとは、感情的な結びつきが強まるというだけでなく、結婚前の関係（きずな）が深まるという見方を、現代の心理学者らは提唱しています。

婚約者同志が一緒にいて深く知り合っていくことは、肯定的かつ希望に満ちた現実です。ふたりが会うたびに、知らない部分が減っていき、その結果として、お互い一緒にいることが、よりくつろげるものとなる…。

このような今こそ、おふたりが、結婚前のふたりの関係（きずな）を現実として直視するよいチャンスです。将来のおふたりの結婚の種をまくべきは、今です。

ふたりの関係チューンアップするには

（※「関係」はすべて「きずな」と読む）

婚約期間には、お互いの心を打ち明けるのが難しいことがよくあります。こうなると、煩いが増し、自己防衛的になったり混乱しやすくなって、健全な関係（きずな）を築き上げていく努力がおろそかになってしまいます。とりあげるには個人的に恐ろしくもある事柄が時にあったとしても、そう努力するのは価値あることです。実際、一方通行でないバランスのとれた健全な関係（きずな）こそ、婚約を成功させる秘訣です。

□健全な関係（きずな）を構成する本質的要素とは？

この分野の専門家は、おふたりの関係（きずな）という「自動車」を走らせるため、基本となる四つの「機構（システム）」を提唱しています。それは、「燃料」「点火」「潤滑油」「冷却」です。おふたりの結婚前における関係（きずな）を診断し評価するた

め、この四つの機構（システム）について「点検」していきましょう。

1　関係の「燃料」となる協力。この機構（システム）を良好に作動させる条件は以下のとおり。

▽それぞれの才能が、尊重され、平等に扱われ、また配慮されている。

▽緊張しすぎることなく、一緒に計画し働くことができる。

▽意思決定はふたりで行い、結果についての責任も両方でとる。

▽口論したり自己防衛したりせずに、自由に、意見・考え・感情・気持ちを分かち合うことができる。

▽問題を見つけ、浮き彫りにし、解決するプロセスに、ふたりが共に参加している。

▽ふたりの違いを認めているので、どちらかが悔しい思いをすることはない。

2　関係を「点火」させる歩み寄り。お互いの価値観やライフ・スタイルの好みについて合意できないことがあるのは避けられません。信仰、道徳、社会的責任に対する誓約、友人、セックス、選択、お金の使い方まで違いは多岐に及びます。ふたりの関係（きずな）がしっかりしていると、このような相違をも許容し、似た部分を発見して、共通のライフ・スタイルを造り上げていくことができます。お互いの生い立ちが違えば違うほど、歩み寄りに気を使う度合いは高くなるでしょう。

3　関係の「潤滑油」となる親密さ。お互いのオープンさと親密さは、ふたりの関係を特別なものにしてくれます。深く求めているにもかかわらず、親密さというこの次元を人は恐れるものです。しかし、親密さなしには、関わりがしっかりとした大切なものになることはありません。親密さには、感情的なものと身体的なものがありますが、必ずしも性的なものではありません。親しみを覚えたり、自分の心を開く、天心爛漫（らんまん）さ、陽気にはしゃぐ、弱みを見せることも、親密さに含まれます。

4　オーバーヒートした心を「冷却」してくれる感情的支え。だれだって、たまには、励ましや支えを必要とします。自分を大切にし、守り、育（はぐ

く）み、信じてくれる人がいなければなりません。特に、怖かったり傷ついたとき、病気だったり孤独のとき、気持ちがぐらついているときには、こういう人が要るものです。結婚前の関係（きずな）を求める動機の第一は、思いやりや支えを求める心です。感情的支えなくして、関係（きずな）は満たされません。

□わたしたちの関係（きずな）の状態

前述した本質的要素に照らし、また、完全な関係（きずな）などないのは当然ですから、自分たちの関係（きずな）の現状について内省し評価してみましょう。

1　すぐれている→たいへんよく分かち合う
2　よい　→十分に分かち合う
3　恐れている　→最低限しか分かち合わない
4　とぼしい　→十分に分かち合っていない
5　ひどい　→ごくたまにしか分かち合わない
6　死んでいる　→まったく分かち合わない

ふたりの衝突を創造的に利用するには

人間である以上、衝突や軋轢（あつれき）があることは避けられません。関係（きずな）が緊密になればなるほど、人間の個体差がもとで衝突が生ずる度合いは増すもの、と社会心理学者は言います。しかし、衝突や軋轢は、わたしたちを脅かす敵意や強制力ではありません。むしろ、人間、とりわけ男女間の生活を構成する一要素です。婚約者同志といっても、単に尊厳において平等なふたりの人間ではありません。ふたりには心理学的相違が存在し、かえってだからこそ、相互に順応することでバランスと調和がとれるのです。しかしその実現は、衝突なしには成し遂げられません。

結果的に、関係（きずな）における衝突は、それ自身は破壊的で不毛なものであっても、創造的に利用するならば、相互順応のプロセスを促進する力をもつものです。あたかも絨毯の下にチリをはいて隠すような、うわっつらにすぎない平和を装うより、衝突を創造的に利用してしまうほうがはるかに有効です。

衝突を創造的に扱うといっても、たやすくできることではありません。根本的にかなりしっかりした成熟さが要求されますし、たいへんな忍耐力とゆるがぬ努力が必要です。しかし、衝突を創造的に利用できたときの報いは大です。いっそう深いレベルでの通じ合いと協力という実りがその男女にもたらされます。お互いの相違が理解され受け入れられるならば、衝突のときの対処の仕方を学ぶことになり、ふたりの関係（きずな）に亀裂が生ずる緊急事態も軽減され、煩わされる頻度も減っていきます。

□怒りに対処するには

アリストテレスはその著作にこう記しています。

「だれでも怒ることはできる。それは容易だ。しかし、ふさわしい相手に向かい、ふさわしい程度で、ふさわしいときに、ふさわしい目的をもち、ふさわしいやり方で怒るのは、だれにでも出来ることではなく、容易ではない」　では、怒りには、どう対処すべきでしょうか？

▽怒りが破壊的な結果しかもたらさない表現方法を見きわめる。たとえば、殴る、ドアを乱暴に閉める、ものを投げるなど、相手を傷つけ辱める結果になることを識別します。

▽怒りをうやむやにせず、明瞭に表現する。相手を攻撃したり暴力を振るうことなしに、何に腹立たしいのか単刀直入にことばで伝える。

▽ほんとうの原因をはっきりさせる。「ほんとうは、何が自分を怒らせているのか」「ほんとうは、何に怒っているのか」について深くほりさげ、正直に自問自答する。

▽時間をおいてみる。そうすれば、距離をおき、落ち着いて状況を眺めることができる。

▽怒りを心にためこまないよう努める。状況を無視したり目をそむけているだけでは、怒りはつのる一方です。緊張が高まったときでも、心にためこまないようにする最善の方法は、直接話すのではなく、手紙などに託して伝え合うことです。

▽非現実的な期待は排除する。そうすることで、フラストレーションが軽減され、怒りを回避し、怒

りから引き起こされるさまざまなことを緩和することができます。

▽怒りの度合いに合わせていかに対処するかを学習する。最善の手段は、怒りのレベルがまだ低いうちにことばに表現し、コントロールできなくなるまでほおっておくことがないようにすることです。

◇　◇　◇

□わたしたちは、お互いの怒りを、相互に歩み寄る道具にまで昇華させるため、何ができるでしょうか？

IV　深く通じ合うために

今日では、いたるところで、結婚と家族に危機が生じており、このため、婚約している多くのカップルたちは、夫婦になるための新しい道を探し求めています。しかし、実際には見いだせないままでいるのが現状です。

「通じ合い」と一言で言っても、そのやり方とレベルは多種多様です。ボディ・ランゲージや手紙でのやりとり、対話や独白、沈黙など、さまざまです。通じ合いは、カップルを構成するふたりの人格を結ぶ「橋」として、必要不可欠な役割をもっています。

一方、男女が精一杯深い通じ合いをするとき、それは、ほんとうの愛を偽りなく表現したもののひとつに数えられます。その愛は、人間としての体験でもあり、また、神の神秘でもあります。

残念ながら、婚約者たちのほとんどは、通じ合いなど造作もないことのように思っている、という事実があります。つまり、「もちろん、わたしたちはよく話

し合っています。疑う余地などありません」と彼らは言うのです。

しかしながら、研究が示すところによれば、「ほんとうに感じていることを、婚約者たちのほとんどが話していない」というのが現実です。

みなさんは、いかがですか？

おふたりの通じ合いの質は、どのような状態にあるでしょうか？

お互いの個人的な体験をしっかり分かち合う能力を自分たちは確かにもっている、と言えるでしょうか？

多くの夫婦たちの証言を背景に、現代の学者たちが断言するのは、「第三者の介入などない一対一のよい通じ合いがあるときにのみ、カップルの双方がその相違や不一致、誤解を乗り越え、夫婦としての役割を果たせる健全なカップルになりうる」ということです。

これからの章では、結婚前の通じ合いを、おふたりの「人間的な体験」という視点からまず眺めます。

その後、「神の神秘」という視点から、カップルとしてのおふたりに焦点を合わせていきましょう。

心からの通じ合い

婚約期間中の通じ合いのプロセスは、お互いを伝え合うためふたりの真摯な努力が要求される、複雑な時期でもあります。お互いの「人となり」、何になろうとしているか、人や物事に対する感じ方、その価値観・ニーズ・期待はどのようなものかを通じ合います。

心からの通じ合いとは、身体・理性・心・意志・霊魂のあらゆる異なる角度から、両者がまったく正直に、心の奥底から愛をもってなす、人格と人格の通じ合いです。心からの通じ合いは、単なるおしゃべりとはまったく一線を画するものです。それは、自分自身のもっとも貴重な賜物を、パートナーに余すところなく絶えず与えようとする誓約を意味します。ふたりの人が心からの通じ合いをすればするほど、愛と一致の絆は深まっていきます。逆もまた真です。心からの通じ合いのスタイルとして主なものを三つ、以下にとりあげてみました。

▽ボディ・ランゲージ。目で合図する、顔の表情、

振る舞い、ほほえみ、顔をしかめる、音をたてる、キスする、なでる、手をにぎる、沈黙など。

▽書くこと。自己を語る、自己を内省する、手紙など。

▽話すこと。会話、対話、自己を分かち合うなど。

□結婚前の通じ合いを効果的にするための提案

1 友愛の心をもって互いに関わる
2 下を向いたりせず、まっすぐ相手を見て
3 前向きに考え、自然にほほえむ
4 心からのほんとうの関心を示す
5 いつも相手を励ます
6 自分が大切にされているのだと感じさせる
7 長所をほめる
8 どんな小さな進歩でも認めほめてあげる
9 小さなことでも見逃さない
10 礼儀正しくよい聴き手になる
11 過ちをゆるし、理解を示す
12 ユーモアのセンスを失わない
13 相手がずっとしゃべりつづけても許容する
14 相手の視点にたって物事を見る
15 指図せず、問いかけるようにする
16 会話にうんざりしない
17 通じ合いの間は、時計を気にしない
18 疑問をなげかけることで、チャレンジしてみる
19 いつも心を広くもち、学ぶ姿勢で
20 過ぎ去ったことにとやかくこだわらない
21 ひとつの話題に集中する
22 怒ったまま別れたりしない
23 議論するならば、手を取り合って。
24 いつも正直に
25 いつも柔和に
26 いつも忍耐をもって
27 いつも尊敬をもって
28 いつも受け入れる備えをかかさない
29 いつも慈愛をもって関わる

□あいことばは？

あいことばは、「TALK（トーク）」です。

▽時間(TIME)のT。

→よい通じ合いをするためだけに、充分な時間をとります。

▽集中力(ATTENTION)のA。

→積極的に自分を与え合い、また、相手に精神を集中します。

▽聴く(LISTEN)のL。

→相手のことばづらだけでなく、心に込められた気持ちとメッセージをくみとります。

▽親切(KINDNESS)のK。

→頭だけでなく、愛と心をもって相手に聴きましょう。

◇　◇　◇

□ふたりの通じ合いをよりよくするため、わたしたちが力を合わせてできることあるいはすべきことは、何でしょうか？

対話

対話は、パートナー同志の個人的な通じ合いのプロセスにおいて、もっとも基本となる段階です。次のような事柄が主な内容として取り上げられます。

▽自己、ニーズ、価値観、煩い、選択、理想、目標、優先順位など。

▽セクシュアリティ、子供、親業、心理学、お金、健康、夢など。

▽活動、召命、教育、結婚、家族、友人、仕事など。

▽正義、友情、愛、誓約、責任、関心など。

▽それぞれの幼少期の体験、信仰、神、宗教など。

白黒はっきりつけられる事柄は、人生には少ししかありません。たいていは、いわば灰色の領域で、妥協点を見い出すため話し合う必要があるものです。アイデアや感情、ある事に対する姿勢などを交換するのが、「対話」といわれるものです。

行動原理あるいは個人の権利に関わる事柄については、何らかの妥協をするにしても熟慮することが重要

です。つまり、身体的福祉の権利、財産権、ふさわしく自己のイメージを保つ権利などについての場合です。あるいは、こと宗教的信条ともなれば、妥協する余地はありません。しかし、各人の目標、価値観、ニーズ、興味に関する事柄について話し合う際には、妥協することも考えられます。

婚約者のカップルが明白に理解すべきことは、本質的でない事柄について意見の調整をはかる場合、それが、真の愛と一致を見るためによいテストになりうるということです。本質的でない事柄でも、それにどういう態度をとりどのように妥協するかを見れば、結婚前のふたりの関係（きずな）がどの程度成熟しまたバランスのとれたものであるかがわかります。

しかし、人生の中心的な事柄についての対話が、結婚前の通じ合いとして、唯一最重要の手段というわけではありません。相互の理解と信頼を発展させ、さらに、健全で愛に満ちた婚約という究極のゴールに導いてくれるのは、対話そのものではありません。

□体験的に証明ずみの「対話」のための処方箋を提案

「ＪＯＣ（青年キリスト者労働者）」の創始者であり、ベルギーの枢機卿でもある、モンセニョール・カーダインは、「生活の振り返り」と命名された、「対話」についての手法を創始しました。その効果は、世界的に認められています。次の三つの段階を経ます。

▽観察する。与えられた状況や出来事についての、考え・感情・立場などをお互いに交換し、その原因を見つけ出す。

▽判断する。その真の原因にとりくむため採りうる段階を話し合い吟味評価する。信仰者の場合、「このような出来事や状況を通して、神はわたしたちに何を語りかけておられるのか」をも考える。

▽行動する。明確で実践的な行動計画を決定し、実行する。

◇　◇　◇

□わたしたちは、結婚前のふたりの対話をさらによいものにすべきでしょうか、あるいは、できるでしょうか？（※）　どのようにして、そうしますか？

V 最高の親友同志になるために

お互いに関わり対話することを通して、おふたりは、友だち同志になっていきます。

ほんとうの愛があることを特別に表現したもの…、それが、友情です。金や真珠、ダイヤモンドや裕福さをはるかに越えて貴重な価値を備えています。友情は、売り買いなどできないもので、貴い賜物です。「友を見いだすものは、宝を見いだしたのだ」と聖書には書かれています。

おふたりの友情は、その婚約が健全で約されたものであることを示す重要な要素のひとつです。

真の友とは、どのようなものでしょうか？

ダイアン・クレーマーは、こう答えています。

「友は、
幸せにする。
傍らを離れない。
寄せて帰る波のように、
来てもすぐ行ってしまうことはない。
疑わず、まったく信頼する、
畏敬の念をいだきつつ。
あなたを特別に扱う、
王座に据えるかのように。

必要なときは、助言し、
同じ仕方で傷つけることは、二度ない。

あなたが頼るにまかせ、
その腕の中で泣かせてくれる。
抱き締めて慰め、
気を確かにもち、励ます。

必要なときそこにいてくれるのは、友。
だれもが必要とする友。
友は、愛の香りを放ち、
生命（いのち）はそこで満ちたりる」

友情のもつ美しさとは、どのようなものでしょうか？

「友情のすばらしさは、
さしのべられた手にあるのではない。
親切なほほえみも、
交わりの喜びも、それではない。
霊的な息吹（ひらめき）が訪れ、
だれかに信じてもらっていると知るとき、
そこに、友情の栄光がある」
ラルフ・ウォルド・エマーソン（作家）

ふたりの友情をはぐくむには

結婚生活を送る現代の夫婦らの多くに、ほんものの友情がかくも少ないのはなぜでしょうか？　お互いかけひきをする、仮面をつけてごまかす、恐れのため、あいまいな関わり、混乱、誤解、不信感、疑い、ケンカなどがその原因として考えられます。

単純な理由があります。友情には高い値打ちがある。つまり、婚約時代にそれなりに努力しなければ、当然、結婚目録からは落ちている、ということです。友情など「自然発生」するだろう…とタカをくくっていたわけです。

しかし、結婚生活でお互いに最高の親友であることを願うなら、現時点からすでに親友への道をスタートさせねばならない。これが現実です。明日では遅すぎます。

結婚前のおふたりの友情を、堅固で深みがありいつまでも続くものとして築きあげていくため、その助けとなる提案をこれから見ていきましょう。

1 わたしの愛する人が自分の最高の親友であることを望むなら、わたし自身が、愛する人の最高の親友になりましょう。これは、礼儀と思いやりと親切をお互い欠かさないことを意味します。困難を感じたときは、「愛のないところに愛を注ぎなさい。そうすれば、そこに愛を見いだすだろう」という聖アウグスチヌスの助言を実行にうつします。

2 ふたりの結婚前の関係（きずな）を優先しましょう。相手をおろそかにしてはいけません。ごく小さな親切の行いひとつで、相手を大事にしていることを伝えることができます。

3 お互いいつも正直に、オープンに、気どらずに。オープンな通じ合いは、友情の本質的要素です。肯定的なものだけでなく、たとえ否定的な感情であっても伝え合いましょう。仮面ははずして、嘘をついたり、かけひきはしません。

4 相手にゆとりを与えましょう。

▽自分の思いのままにコントロールしない。

▽ユニークな存在として励ます。

▽批判のことばにも耳を傾ける。

▽ひとりになれる時間を与えてあげる。

▽相手が受け入れられているとわかる言葉使いで。

▽相手の人間関係を大切にし、励ます。

5 相手がありのままの自分でいられるように。お互いの個性や不完全さも受け入れます。相手の意見や趣味がときとして自分のと違っても、それを脅威と受け取らないように。

6 相手をほめ、励ましましょう。自分の相手の好ましい部分や、自分の人生に相手がいてくれることにどれほど感謝しているかなど、友だちに話します。相手の才能を喜び、成功したら心からの拍手を贈ります。

7 相手に与えまた相手から受ける備えをしましょう。進んで相手を助け、また、助けてもらうことも躊躇しないように。しかし、過度に要求したり、相手の奴隷になってもいけません。

8 忠実を守りましょう。忠実さは、貞節と信頼です。これは、順境だけでなく逆境の時も、愛する人と「共にいる」ことを意味します。

◇　◇　◇

□前述の提案のうち、わたしは、どれを実践する必要があるでしょうか？　その理由は？

相互に信用と信頼をもつには

熟練した夫婦の証しによれば、結婚前の友情の真髄は、相互に信用と信頼をもつことにあると言います。この相互信用と信頼の秘訣となるのが、自己を分かち合うことです。相互に自己を分かち合うためには、実際、パートナー同志が深く相手に聴くことが段階として必要です。そして、基本的にこれは、ふたりが相互に与え受けるプロセスを意味します。その目的は、お互いの認識と理解を得ることです。こうしてこそ、愛に満ちた相互の受け入れが生まれ、最終目標として婚約を成功したものにすることができます。

公正と平等は、真の自己の分かち合いを特徴づけるものです。このふたつの特徴を婚約者双方が感得し体験したときこそ、ふたりが相互に信用と信頼をもっていることを意味します。

□自己の分かち合いはどう見なされるものか？

▽相手に深く聴くプロセスとして、理解すべきものです。
▽婚約者双方とも全身全霊で取り組むことが求められるものです。
▽ふたりが何にも邪魔されず集中できる時間と場所を必要とします。
▽一方通行ではなく、相互になされるべきものです。
▽親密な態度で行うものです。いわば、自分のいちばん深い自己を分かち合うことになるからです。すなわち、自分の理性・心・意志・霊魂に関する事柄、さらには、自分の信仰や宗教的体験をも分かち合います。
▽定期的に行われるべきです。高い優先順位に値します。

「自己の分かち合いを愛深いものとして始めるには、自分の心にある感情を交換するのが最善の方法のひとつです」と経験深い夫婦たちの多くは賢明な助言をしてくれます。しかし、この際、次のふたつの極端は避けなければなりません。

▼その一。感情を抑圧し隠すのは、伝統的に見受けられる傾向で、ふたりの分かち合いにダメージをもたらすものとして避けるべき事柄です。実際、感情を体験することは、まさに人間らしい反応で避けることはできません。

▼その二。感情を交換することだけに囚われ、あらゆる事柄に関してすべき自己の分かち合いが限定されてしまう、現代のすれっからした流行は避けるべき事柄です。感情や心の動きだけでなく、人間ひとりひとりの生きた体験として重要なものはほかにもあります。たとえば、信条・あこがれ・態度・喜び・嘆き・恐れ・希望・期待・失望・好き嫌い・価値観・ニーズ・優先する事柄・選択・時間・目標・夢、はては誘惑さえも分かち合う事柄に含まれます。ですから、以上のことから次のようにはっきり結論したいと思います。

1 感情に、善・悪はありません。単に感情が存在しているというにすぎません。善悪が生ずるとしたら、その感情を体験した結果としてどのような行動をとるかによるものです。

2 感情は自然なものですが、感情がわたしたちを支

配することはありません。逆もまた真です。

3　わたしたちは、感情そのものを変えることができません。変えることができるのは、態度、思い込み、憶測、推測といった事柄です。そうすれば、感情は自ずと変化します。

◇　◇　◇

□自分の生活について、わたしがもっとも分かち合いにくいと感じるものは何でしょうか？　生い立ちでの心の傷、失敗、欠点、あやまち、弱さなど、何でしょうか？

VI　和解を体験するために

人を愛したら傷つけたりはしない、などという考えは一体どこからきたものでしょうか？

愛し合っていると言うふたりが、「ごめんなさい」と決して言わないことを誓うなんて、いったいどうやったらできるのでしょう？　しかも、それが愛しているしるしだと言うのです。

ロマンチックに聞こえるのかもしれません。しかし、実際はロマンチックどころではありません。

わたしたち自身の体験から、事実はその逆だということは明らかです。

「完全な人などいない」というのは言い古されたことばですが、まさに本当のことです。お互いに関わり愛し合う技術という観点から人を見た場合は、特にそのとおりです。

その人を深く愛しているからこそ、深く傷つけうることもあります。

一方では、自分自身の限界やあやまち、弱さなどの

せいで傷つくことなしには、お互いを知り理解することも、通じ合いと親密さのうちに成長することもありえません。

傷つき傷つけられたときこそ、ほんものの愛、内的平和、そして幸せへの第一歩として、「和解」が必要になってきます。

和解は、真の愛に属する要素のひとつです。

どれほどふたりが互いに正直か、どれくらい自己に気づいているか、そして互いの誓約がどれほどほんものであるかは、真の和解がなされるか否かで試されます。

ではところで、「和解」とはいったい何でしょう？

相手にゆるしを願い、自分もゆるしてあげるには

ゆるすかゆるさないかは、愛し合う深い関係（きずな）に生きるだれもが直面する大きなチャレンジです。ところで、では、「ゆるし」とは何でしょうか？

▽ゆるしは、愛する技術の神髄です。

▽ゆるしは、ほんものの愛の試金石です。

▽ゆるしは、わたしたちが心の奥深くに平和を保つための秘訣です。

▽ゆるしは、人間のものです。動物同士には、ゆるしは存在しません。

▽ゆるしは、神からのものです。神から謙遜な人に賜る贈物です。

▽ゆるしは、ナザレトのイエスが弟子たちに与えた掟です。

□相手にゆるしを願う

真の愛があるならば、「ごめんなさい」「わたしが

間違っていました」「ゆるしてもらえますか」と、一度ならず何度でも、相手にゆるしを願うものです。この種のことばは、ほんものの愛の癒し手として力強く働きます。

「ごめんなさい」「わたしが間違っていました」「わたしのあやまちです」と言うのは困難なことかもしれませんが、このような誠実な態度、責任を自らとる姿勢は、成長を促進し育てるものです。相手の責任を取り沙汰したりそれとなくほのめかすこともなく「ごめんなさい」と言うには、度量の広さと柔和な姿勢が求められます。このおかげで、健全で愛深い関係（きずな）にとどまるという誓約を新たにすることができます。

しかしそれ以上に、「どうか、わたしをゆるしてください」というのは、何よりむずかしいことです。つまり、ゆるしを願うというのは、自分は支えが必要なもろい人間であることを認めることになるからです。そのため、相手に拒絶する余地を与えることになります。責められて当然のところ、自分には値しない事柄を相手に願うわけです。友人がゆるしてくれなかったとしてもとやかく言う権利はありません。こんな思いにとらわれたら、「ゆるしは、頭ではなく心でするもの」と思い出すとよいでしょう。また、「ごめんなさい」と言うより「愛しています」と言うほうが楽でしょうが、効果のほどは半減します。事件の本質を見れば、自分のほうが友人を深く傷つけたのですから、理の当然です。

和解は、どちらかが謝罪することに始まります。和解する約束があっても多くの場合うまくいかないのは、当事者双方ともに、相手をゆるす準備ができていない、あるいは、相手にゆるしてもらう準備ができていないことが原因です。

□自分からもゆるしてあげる

相手をゆるすというのは、愛する人の善意だけでなく悪意をも含め、相手のすべてをまるごと受け入れることを意味します。相手をゆるすのは、結婚前のふたりの関係（きずな）を生かす核心となるものです。傷ついた関係（きずな）が、愛深いゆるしで癒されるな

ら、もう以前の状態に戻ることはありません。むしろさらに関係（きずな）が成長し、結果的にふたりとも心底から変化します。

ゆるしを体験して解放されないかぎり、わたしたちは、その傷と幻滅から抜け出すことはできません。パトリック・P・ドネリーは、こう書き記しています。「ともに涙する体験は、愛の行為のうちにからだで陸み合うより偉大な効果を生み、ふたりはより深い親密さのうちに交わることができる」と。無条件のゆるしが、無条件の愛の本質的部分であるのは、まちがいありません。しかし、神のいつくしみに満ちた力なくしては、無条件にゆるすなどありえません。

◇　◇　◇

□わたしは、特にどういったことについてあなたからゆるしてもらう必要があるでしょうか？

おすすめの提案

ここでは、おふたりの好みに合わせ創造的に利用してくださってかまいませんという意味で、「おすすめの提案」と銘打ってあります。

I　ラブ・レターを準備します

家庭内あるいは家ではなくても構いませんが、静かな場所を選び、以下の質問やポイントに基づいて内省しましょう。愛する人に、正直な「ラブ・レター」を書くためのひらめきがあるでしょう。

1　あなたとの関係（きずな）において、わたしは、どのような仕方であやまちを犯したでしょうか？あるいは、犯しつつあるでしょうか？

2　このわけで、わたしは、あなたに＿＿＿＿＿＿＿＿について謝る必要があります。

3　あなたが謝ってくれなかったことで、何かうらみをいだき続けていることがあるでしょうか？

4 わたしのやってしまったどんなことのせいで、ふたりの心と心の深い通じ合いが困難にさらされているでしょうか？

5 あなたとわたしに相互の信頼があることを示す肯定的なしるし、あるいは、信頼のなさを示す否定的なしるしには、どんなものがあるでしょうか？

6 あなたとの関係（きずな）における、わたしの行いや態度を改善するため、
わたしは、＿＿＿＿＿＿することを
自ら誓約いたします。

7 この誓約を実践する上で、
具体的には＿＿＿＿＿＿に関し、
わたしにはあなたの助けが必要です。

8 神により近づくため、わたしは、どうやったら毎日の祈りの生活を深められるでしょうか？

9 結婚前におけるわたしたちの神との関係を改善するため、わたしたちは何をし、あるいは、何をしないことが求められているでしょうか？

Ⅱ ラブ・レターを交換します

公園や庭、教会など、平和な雰囲気のある場所を選び、一緒になりましょう。お互いのラブ・レターを分かち合います。二回読んでみます。

一回めは、頭を使って注意深く読みます。
二回めは、今度は心を使ってもう一度読みます。

Ⅲ お互いに感謝を表します

特に感謝したいことをお互いに伝えます。

Ⅳ 一緒に祈ります

神にその愛を感謝し、祝福を願います。

Ⅶ　互いによりよく知り合うために

結婚前の関係（きずな）がいつわりのない意義あるものであるためには、そのふたりの人間の現実、という堅固な岩の上に築き上げられなければなりません。すなわち、尊厳において平等でありながらも、セクシュアリティの違いと補い合う力を備えている、という現実です。

いつわりのない現実、つまり真実のみが、唯一、この現実のベールを取り去ることができます。

それぞれ特定の婚約者同志にとって、真実とは何でしょうか？　その真実は、確かに、その当事者各々の現実に基づくものです。

それでは、当事者各々の現実とは、実際にはどんなものでしょうか？

この段階の目的は、自分の婚約者に心から耳を傾けて聴き、相手の真実の姿を学ぶことにあります。

その人なりのパーソナリティ、その人の家族、その人の仲間について、真の姿を学びます。

この相互認識を確かなものとするためには、お互いの違い・弱さ・あやまち・限界・選択をも受け入れ合わねばならないというリスクがあります。

この相互受け入れがあってこそ、お互いのニーズ・価値観・夢が理解し合えるようになります。

こうして、いつわりのない正直な精神がふたりの内に育まれ、すばらしい通じ合いの関係（きずな）をさらに発展させていくことができるのです。

これこそ、最高の保証書です。おふたりの結婚は健全で成功したものとなり、すぐれた機能を備えた家族の将来が確かに約束されます。

お互いについて学ぶには

ふたりの婚約時代をいつわりのない真実なものとすることを目的として、お互いについて存分に知り合うことを学ぶ…、このためには、心から相互に聴き合う姿勢が必要です。こうして初めて、ふたりは心から分かち合い、それぞれの内的自己の三つの次元について学ぶことができるようになります。

□気質。その人なりの受けとめ方・考え方・感じ方・行動の仕方に影響を与えている、各人の身体的傾向。特定の気質の種類が存在します（45頁を参照）。

□キャラクター。その人なりの教育環境や個人的経験から形成されてきた、各人の個別的な性質や外見的特徴。（45頁を参照）

□パーソナリティー。各人がもつ、自分なりのイメージや自画像、あるいは、その人なりの他人との関わり方。（46頁を参照）

これら気質・キャラクター・パーソナリティの発展形成は、偶発的なものではありません。その人の家族における育ち方や地域の教育環境も、その形成にとって重要な要素です。

□親の影響。神は、具体的な意図をもって、男と女という二種類の人で子孫を増やすよう計画されました。男と女の親の存在は、生物学上子孫を増やすうえで必要ですが、同時に、子供がそのパーソナリティーを健全に成長させる段階においても必要です。

神が人間の成長段階を計画されたとき、その子孫は、多くの年限を経て依存のさまざまな段階を歩むよう定められました。そのプロセスには、身体的・情緒的・霊的な発展形成が含まれます。このプロセスがいかに重要なものであるかは、どれほどの時間がこれに費やされているかを考えれば理解できるでしょう。身体的な成長プロセスは、一般的に、十六年から十八年かかります。これは、人間が親から育ててもらうために相当の時間を費やすことを意味します。したがって、親がふたりともに、それぞれの気質やキャラクター・パーソナリティーはもちろん、神についての思いをも子供に分かち合うのは、きわめて重要になってきます。

□兄弟姉妹。もうひとつ強い影響力があるのは、それ

ぞれの兄弟姉妹の存在です。親あるいは家庭外の仲間からの影響ほどには強力なものではなくとも、分かち合うべき重要な事柄です。

□仲間づきあいの役割。仲間…、すなわち、友だち・クラスメート、あるいは学校の先生といった存在も重要な役割を担っており、各人の気質・キャラクター・パーソナリテイーに影響を及ぼします。家庭で教えられてきたことが、彼らの影響でさらに裏付けられることもあれば、否定されてしまうこともあります。

◇内省し分かち合うためのヒント

1　自分がもっとも強い影響を受けたと思える、両親の個人的特徴を書き出してみましょう。

2　自分のパーソナリティーを築き上げる上で、その生き様から大きな影響を受けたといえる人物の名前を書き出してみましょう。

3　神の恵みと愛するパートナーの強力を得て、将来そうなることを希望しあるいは夢見ている状況を五つ描写してみましょう。

相互の受け入れ

相手の善意のみならず悪意をも含め、ありのままにパートナーを受け入れることは、お互いをより深く知るうえで支払わねばならない代価であり、最終的に、結婚前だけでなく結婚してからも必要不可欠となる条件です。

相互の受け入れとは、相手が当然そうあるべき姿でなければ受け入れないというのではなく、今あるがままにお互いを受け入れ合うことを意味します。だからといってこれは、お互いの欠点を見ないですますという意味ではありません。相手の美徳だけでなく欠点をもお互い直視するときにのみ、わたしたちはお互いのユニークさと真に向かい合うのです。

相互の受け入れが本物であるためには、お互いについて次のような事柄を受け入れなければなりません。

▽違い。考え方・感じ方・反応あるいは行動の仕方。

▽弱さ。身体的・心理的・情緒的・霊的な弱さ。

▽失敗。ごく小さな失敗も大きなものでも。

▽欠点。倫理・道徳・信仰上の欠点。
▽限界。身体・知性・教育上あるいは霊的次元での限界。
▽傾向。飲食・喫煙・ギャンブル・麻薬使用などの傾向。
▽選択。モノに関する・心理上の・道徳に関する・霊的次元あるいは信仰上の選択。

□相互理解

ふたりが全面的にお互い受け入れ合うことに成功すれば、次のステップ、すなわち、相互認識といつわりなき愛の段階へ進むことができると、多くの夫婦の体験は明らかにしています。これは、みなさんが新しい生き方をするために、秘訣となるものです。

「わたしのフィアンセが理解してくれないんです」「わたしの立場に立ってみれば当然わかるものを、そうしてくれない」…、この手の不平不満を何度耳にしてきたことでしょう。あげくに、「お互い理解し合えない。要するに、性格の不一致です。別れてしまったほうがいい…」となる始末です。

このどのケースの場合も、心の奥深くにあるニーズとよい価値観を相互に知り受け入れることが足りないのは明らかです。だからこそ、いまだ充足されないその人なりのニーズを満たし、真のよい価値観を発見するためにも、それらを分かち合うことが緊急の課題となってきます。この課題が実行されれば、ふたりともに相手に理解されていると実感することでしょう。

▽お互いの心の奥深くあるニーズを分かち合う。

充足されるべきニーズには、生きる意味・愛・ふさわしい自尊心・信仰・神・受け入れ・家族の支え・鍛練・純潔・意志力・祈り・教育・宗教・平和・目標・希望・夢、などがあります。

▽お互いのもっているよい価値観を分かち合う。

家族・尊敬・親切・信仰・忍耐・従順・意志力・優先順位・堅忍・祈り・友人・純粋さ・正義・責任感・自然を愛する心・正直・真理・人権・宗教・教育・芸術・勇気・霊的な生活・希望・楽観的な姿勢・規律を大切にする・ふさわしい自尊心・喜びに満ちている・オープンな心・神・平和など。

◇　◇　◇

□お互いをありのままに理解し受け入れるうえで、わたしがもっともむずかしいと感じるのは、どのようなことでしょうか？　その理由は？

Ⅷ　ともに成長するために

お互い誠実に受け入れ合い、おふたりともに自分は理解されていると実感するとき、そして、まさにそのときにのみ、共通の冒険のスタート地点に立っていると言えるのです。すなわち、ふたりの「カップルらしさ」をともに築き上げていく冒険の始まりです。

言いかえれば、個人としてもカップルとしても、ともに成長し成熟するため、お互い助けたり支えたりすることができるようになった、というわけです。

ひとりの人間として、また同時に、一組のカップルとして進歩することは、成長のプロセスです。このことを理解し受け入れるのはきわめて重要です。

成長は、創造の過程の中でも最高の部類に属します。花でも鳥でも、個人でもカップルでも、成長するすべてのものは、美しい。そこに、それらを造られた創造主（つくりぬし）自身の美が感じられるからです。

わたしたちは、神のご計画によって、成長するよう呼びかけられています。今日は、人間としてあるいは

婚約した者同志としての成長に…。明日は、人間として・夫婦として・さらに家族としての成長へ呼ばれています。容易なことではありません。しかし、一致すれば、必ず成し遂げることができます。

わたしたちはお互いの成長を助けることができるでしょう。たとえば、学業に関する劣等感にさいなまれる相手に、学校にもどって卒業することを勧めるなどして…。

大切なのはここです。お互いに支えや助けを必要なとき、よい意向をもち善意溢れることばをかけるだけでは不十分です。すなわち、今こそ、実践と行動にうつすとき。

愛し合い、ともに成長していくために…。

お互いの成熟さを高めるには

種子は、最初土の中に隠れたまま発芽し成長を開始します。そしてある日、緑の新芽が土の面（おもて）に顔を見せますが、目に見えないながらも続いている活動に支えられながら成長し続けます。成長は、まず目に見えない段階から始まり、目に見て分かるレベルに到達するまではその状態のまま進行します。

しかし、こと個人的成熟にまでいたらせる成長ということになると、よい意向をもっているとか、立派な抱負があるあるいは熱い想いを抱いているというだけでは、結果に結びつきません。その実現のためには、骨身を削る努力が必要です。このような個人の成長と進歩を手にするには、支えとエネルギーをもたらす関係（きずな）こそが安定した苗床としての機能を果たすものです。

お互いの情緒的ニーズに毎日かかさず応えていくことを学ぶ必要があります。さらに、何が助けになり、何がそうでないかも学ばねばなりません。個人的成熟

を手にするための、ああでもない…、こうでもない…という格闘を通して、お互いに目指す成熟さに導かれていくことでしょう。

次のリストは、成熟さと未成熟さを表わすそれぞれの「しるし」「徴候」のいくつかをあげたものです。相互に助け合いふさわしい識別をする際、その道具として役立てることができるでしょう。

◇　◇　◇

□成熟していると

1　他人に対してオープンな心で接する
2　個人の限界を受け入れる
3　対話と分かち合いを促進する
4　適切な妥協点を見いだす能力がある
5　他人にいっそうオープンになっていける
6　友情や共同体を育てていける
7　心からゆるす力をもっている
8　他人の幸せを喜ぶ
9　現実的でありながら楽観的にものごとに対処する

■未成熟だと

1　自己中心的である
2　非現実的な期待を抱きやすい
3　通じ合いをやめてしまう
4　ききわけがなく、わがままである
5　分別がない
6　人を苛めたり、傷つけたがる
7　仕返しや復讐を画策する
8　うらやんだり妬み深い
9　きつく悲観的な態度をとる（次頁へ）

10 ストレスを自分なりに調整できる
11 人生には不公平が多々あることを理解している
12 広い心の愛情がある
13 人生に不正がままあることを悟っている
14 ゆるがせない原則につねに従って行動する
15 充実感のある人生を送っている
16 他人から拒絶されても理解を示せる
17 他人の権利を尊重する
18 自分自身を愛し、おおいに楽しんでいる
19 迫害する人とも健全につきあえる
20 いっそう愛深い人柄を成長させていく

10 かんしゃくを表に出す
11 皮肉や嫌味を言う
12 利己的な態度をいっそう深めていく
13 自己防衛的で敵意むき出しの態度をとる
14 ゆずるべきでない原則を妥協し曲げてしまう
15 孤立し孤独である
16 人から好かれているか否かいつも気になる
17 他人の権利を侵害する
18 自分自身が好きではない
19 自己憐憫を感じている
20 いっそう敵意のある人柄になっていく

成熟さを獲得しつつ成長するときにのみ、わたしたちは、愛深い存在になり、それゆえ、お互いの関係（きずな）に深みを加えることができるのです。こうしてこそ、わたしたちは、神がその創造のうちにご計画されたままにユニークな人格へと成長しつつあることを、証しするでしょう。

◇ ◇ ◇

□わたしたちそれぞれの個人的生活において、もっとも明白に未成熟を表すしるしには、どんなものがあるでしょうか？

□より成熟していくために、わたしたちは、お互いどのように助け合うことができるでしょうか？

婚約したカップルとして成長するには

聖書に照らしてみると、みなさんは、カップルとしてともに成長しつつ成熟を獲得し、さらに、神の肖像（うつしえ）であり象り（かたどり）になっていくよう呼ばれています。みなさんが、前途有望なすばらしい「わたしたち」になっていけるよう、ヒントとして次にいくつかの標語をあげてみました。

▽ふたりの愛の成長を絶やさずに。自分のためにパートナーを愛するという次元から、今度は、そのパートナー自身のために相手を愛する次元へと次第に成長させていきます。

▽深く知り合いましょう。いつも通じ合い、愛し合いながら、お互いに関わります。

▽分裂のもとは避けましょう。分裂をもたらす特定の人、なんらかの中毒、出来事や物を避けます。

▽一致させるものを追求しよう。神、親戚、友人、分かち合いのグループなど。

▽共通にもてるものを増やしましょう。信仰、文化、

ニーズ、価値観など。

▽何かをするときは一緒に。一緒に遊び、歌い、働き、読書し、助け合いながら。

▽ふたりの違いを乗り越えて。違いのもととなる争点をはっきりさせ、提案をします。また、その修正案を提出します。合意に達したらお祝いをしましょう。

▽意義深い共通の基準を生み出しましょう。理想、行動原理など。

▽目標や目的は一緒に決めましょう。モノに関する事だけでなく、霊的な次元についても。

▽一緒に真剣な誓約を作りましょう。結婚前の性交渉は絶対慎むべし。

▽ともに祈りましょう。神との関係も、個人レベルにとどまらず、カップルとしての関わりにしていきます。たとえば、一緒に祈りの会に属し、毎週の賛美を共にする、といったように。

□カップルとして成長するための実践的な課題

実際にお互いがもっている価値観をとりあげ、ふたりともに重要である「共通の価値観」を帰納的に見いだすため、最優先の「共通の価値観」ともっとも後回しのそれとを各々三つ、次のリストから選択することができます。たとえば、「ふたりの関心は違うものですが、個人的な成長と教育はふたりともに重要な価値観です」という具合です。

▽仕事のキャリア
　↓仕事・職・召命から得られる充実
▽教育
　↓知識・技術の継続的成長
▽心の健康
　↓精神面の問題を解決し、内的平和を得る
▽家族と伝統
　↓家族の伝統と背景を守る
▽経済的安定
　↓将来の経済的基盤を築く
▽寛大さ
　↓他人の真のニーズに寛大に応える
▽正義
　↓だれに対しても公明正大に対処
▽忠誠心
　↓築いた絆や誓約を守り通す
▽道徳
　↓倫理的規範にしたがって生きる
▽オープンさ
　↓他人に対してオープンで正直
▽オリジナリティー

▽身なり　↓自分なりのユニークな自己を確立
▽身体の健康　↓個人的に外見をきちんと清潔に
▽権威や権力　↓身体を大切にする
▽信仰　↓権威や影響力をもつ
　↓真摯に宗教に対し、
　自分の信仰を生きる
▽社会的承認　↓他人に受け入れられ好かれる
▽スポーツと趣味　↓特別に関心あることや活動
▽成功と達成　↓ある事柄に関し秀でている

◇　◇　◇

□わたしたちの共通の価値観は、何でしょうか？

IX　幸福をともに待ち望むために

人生は、単なる概念ではなく、現実です。
わたしたちの人生は静止した現実ではありません。それは、変化し・成長し・向上する巨大な可能性をうちに秘めています。
人生は、「幸福」と呼ばれる約束された地に向かう神秘の旅です。
□わたしたちにとって「幸福」とは何を意味するのでしょうか？
▽一時的な感覚あるいは幸福感？
▽喜びの強い感情？
▽深く平和を体験すること？
▽人生や仕事から得られる満足感？
▽幸福や安心からくるいろいろな感情？
▽望みがかなえられること？
▽夢が実現しつつあること？
▽関係（きずな）に友情と愛が溢れているとき？
□「幸福」は、実現不可能な夢物語でしょうか？

▽幸福は、だれにでも実現しうることです
▽しかし、魔法のように生ずるわけではありません。
▽一瞬にして手にいれることはできません。
▽幸福と、それを手にいれようとする努力と健闘は
切っても切れない関係にあります。
▽幸福の探求は、いわば、ひとつの技術です。
▽幸福のレシピといったようなものはありません。
▽しかし、幸福の前提条件はいくつか存在します。
たとえば、

→自己に正直である　→自己を与える
→自己を尊重する　→自己を鍛練する
→自己を理解する　→克己心や自制心
→自己を受け入れる　→自己をオープンにする
→ふさわしい自尊心　→自己を超越する
→自分の良心に忠実にしたがいます。
→神を誠実に探し求めます。

婚約しているカップルならだれしも、幸せな結婚をしたいと思うでしょう。現実に、「いつまでも末永く幸せに暮らしましたとさ」というおとぎ話の王子さま・王女さまになろうとだれもが奮闘しますが、それを実現できるカップルはごくわずかしかいません。

しまいには、今日の若者の多くが、結婚における幸福などもはや信じなくなり、結果的に、結婚を避けるようになりました。

みなさんは、どうでしょうか？

幸せな結婚をめざして

研究者たちによれば、現代の結婚の誓約は「永久に（いつまでも）」などとはとうてい言えない代物になっているそうです。結婚した人たちのおよそ40パーセントにとっては、「はい、誓います」と言った結婚の誓約など雲散夢消してしまい、「誓いません」「できません」「お断り」というふうになってしまっているとのこと。

しかし、このように崩壊してしまった結婚に反し、忍耐強く結婚生活を続けている人たちもいます。このように永く結婚にとどまった夫婦たちの多くは、ただ単に結婚を続けてきたのではなく、その年月を通して輝かしい結婚生活を手にいれています。その秘訣は、何でしょうか？

学者をはじめ、結婚で成功をおさめた夫婦たちが一様に深くうなずくのは、結婚で幸福を手にしたいなら、自分自身の望み、自分と配偶者に対する期待、そして相互の関係（きずな）にしっかり気づくことがポイントだということです。

このような気づきがあってこそ、わたしたちは、どの望みが現実的なものかあるいは現実離れしているか識別できるようになります。

こうすれば、現実に見合ったものだけを受け入れることができ、子供じみたおなじみの望みや欲求には終止符を打つことができます。

自分たちの望みが現実に見合ったものだけに限られれば、見当違いの場所で探していたあの幸福を、まさに自分たちの生活のただ中に見いだすことができるでしょう。

ですから、結婚で幸福を得るのは可能です。しかし、結婚の前にも後にもそれなりの備えをしなければなりません。結婚といえども、幸福を作るための材料を何も用意していない人には、幸福のもたらしようがありません。

幸福の材料とは、どんなものでしょうか？　結婚を即席で幸福にする魔法の呪文があるわけではありませんが、どんどん幸せを倍加させている幸福な夫婦たちから、その共通した特徴をつかむことはできます。

幸福な結婚を営む夫婦たちは、どう考え、どう行動しているでしょうか？

▽自分をいつわらず正直な人柄をもっている

▽個人と結婚に秘められた可能性を確信している

▽結婚をしっかり機能させるべく、毎日真剣な誓約を欠かさない

▽夫婦がお互いを最高の親友として信頼している

▽いつでもお互いに自分自身を余すところなく分かち合うため、備えを欠かさない

▽自分たちの危機・衝突・問題に顔を背けず、勇気をもってともに取り組んでいる

▽恨み・怒り・嫉妬心に賢明に対処する仕方を知っている

▽ありのままの自分たちでいられるように、お互い、自分たちをありのままに心から受け入れている

▽できるかぎり、心の底からお互いをゆるし合っている

▽定期的に、一緒に楽しむための時間をしっかりとっている

▽個人としても夫婦としても、神との信頼に満ちた関わりを大切にしている

▽絶えずオープンな心ともてなしの精神を発揮し、他人に手をさしのべることを忘れない

◇　◇　◇

□結婚を幸福にするための、以上の材料を見て、わたしたちに今もっとも必要なものはどれでしょうか？

幸福な夫婦になるには

結婚に幸福はありうるのでしょうか？　信仰をもっていない人は「ノー」と言います。しかし、信仰をもっている人なら「イエス！」と言うものです。キリスト者としてナザレトのイエスのことばに耳を傾ける夫婦たちの実際の証しを次に見ていきましょう。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」（ルカ六章20節参照）。多くても少くても今持っている以上に欲しがろうとせず、今あるまま満足し楽しむことができればよいと思います。自分たちより貧しい人や多分お返しのできそうもない人とも親しく交わり、いつでも人に分かち合えるふたりでありたい。そうすれば、わたしたちにとっては、神だけが豊かさとなるでしょう。

「悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる」（マタイ五章4節参照）。苦しみを受け入れるだけの強さをもちたいと、わたしたちは思っています。家族の内外に起こるさまざまな困難を乗り越えていきたい。そうすれば、神こそ自分たちの強さの源だと発見できるでしょう。

「柔和な人々は、幸いである。その人たちは地を受け継ぐ」（マタイ五章5節参照）。わたしたちの生活からどんな暴力も追放することによってもっと柔和になり、穏やかさと謙遜さとを備えた夫婦になることを望んでいます。こうすれば、神ご自身が、わたしたちふたりの愛に謙遜を刻み込んでくださると実感できると思います。

「義に飢え渇く人々は、幸いである。その人たちは満たされる」（マタイ五章6節参照）。わたしたちは、正義に飢え渇く夫婦になりたいと願っています。それほどしっかり誓約を必要としなくてもよい簡単なことだけで満足するつもりはありません。たとえ、「無邪気だ」「夢想主義者だ」と人に言われてもです。連帯や一致は、正義に属するものです。

「憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける」（マタイ五章7節参照）。わたしたちは、あわれみ深い夫婦になりたいです。大きな心で、いつでも人に手をさしのべ、理解と共感をもてれば…

と思います。そうすれば、神を体験するでしょう。神が、私たち自身の現実を心からの共感と愛をもって受け入れてくださっていること、そして、平和を失ってしまうほどにわたしたちが神にたびたび背いてきたことを知るでしょう。

「心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見る」（マタイ五章8節参照）。わたしたちは、率直で清い心をもち、隠しごとをしたりせず、心にあることを素直にさらけだせるよう願っています。そうすれば、神ご自身のまなざしをわたしたちは実感し、超越した次元にひきあげられ、何かを神に隠す必要などいささかもないと平和のうちに悟るでしょう。

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ五章9節参照）。平和のために、わたしたちは働きたい。まずいちばん身近から始め、あらゆる場で、平和を求めるたゆまぬ努力をできればと願っています。わだかまりや争いごとのない、だれもがお互いに尊敬と愛をもって暮らせる…、そんな条件を造り上げていくつもりです。平和は、神がわたしたちのために造ってくださった賜物のうち、もっとも偉大なものです。

「義のために迫害される人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」（マタイ五章10節参照）神のみ旨に忠実であるがゆえに迫害されるとき、神がわたしたちを召し出してくださったその生き方ゆえに批判や侮辱を受けても気にしないでいたいと思います。神が、わたしたちにとってもっとも大事で偉大な宝、最高の希望になってくださるのですから。

◇　◇　◇

□わたしたちは、どうしたらより幸福な夫婦になることができるでしょうか？

X スパイラル（*）の開かれた心で

手をさしのべていくために

（*）スパイラル→巻頭のことば（*2）を参照。

みなさんが、一致してひとつになるよう呼ばれているにしても、ふたりが離れ小島のようになることを意味するわけではありません。

「星の王子さま」の作者サン・テグジュペリは、次のようにチャレンジしています。「愛とは、ふたりが見つめ合うことじゃない。同じ方向を一緒に見つめることだ」

愛は、神秘的なエネルギーで、分かち合われて始めて、より大きな成長を遂げるものです。

結婚前の愛とは、ちょうど聖なる炎が、らせん（スパイラル）を描きながら生き生きと上昇するのにも似ています。もしこれが分かち合われなければ、次第に勢いを失い、しまいには消えていく…。しかし、分かち合われるなら、大きく成長し広がります。

現代の婚約者の一般的な傾向ですが、自分たちだけのプライバシーと親密さを最大限に守ろうとして、ふたりきりの世界にとじこもり孤立する姿がよく見受けられます。しかし、生命の法則には逆らえません。

「体から切り離された細胞は、生きていけない」…。

みなさんは、離れ小島ではありません。それぞれに所属する家族があり、市民あるいは信仰者としての、今までに生活を共にしてきた共同体があります。

今、おふたりは共に、新しい家族と、よりよい世界を造るよう呼ばれチャレンジされています。

近年のキリスト教神学においては、男女の関係（きずな）を三位一体の真髄の反映として把握するという、興味深い概念がいくつか発展させられました。

この見地によれば、三位一体の概念はさらに、たとえ神であっても孤立と自己完結のうちには存在しえないという深遠な教義にまで発展しています。なぜなら、神の本性が愛である以上、他者に分かち合わざるをえないからです。

神あるいは三位一体の三つのペルソナに象られ、創造において人もちょうど同じように造られました。孤

立した個人として造られたのではありません。男・女という一対として創造され、のちにその子を産み育むことで、三位一体の映しになっていく…。

最終的には、オープンさこそ、婚約したカップルの心に隠されている巨大な愛のエネルギーを放出するうえで、その主要な鍵を握るものです。

現代の婚約者たちが健全でバランスのとれたオープンさを手にすれば、それこそ、キリスト再臨の千年を飾る大きな希望になるのは確かです。

よりオープンなカップルになるには

1　自分たちのいる社会的次元および環境に気づく。

自分たちの今いる結婚前の関係（きずな）という個人的視野を脱し、今日の社会において将来的使命となる結婚および家族へと現実的次元に視点を移していきます。実際、わたしたちの暮らす社会を構成する主要な要素は、結婚と家族の中に存在するものです。すなわち、権威・教育・心と心の深い通じ合い、さらに社会に対する気づきが、それです。

▽権威に対する気づき。

責任を担うことによって。

▽教育に対する気づき。

価値観と生きる姿勢を学ぶことによって。

▽通じ合いに対する気づき。

あらゆる事柄に関し他人と分かち合うことで。

▽社会に対する気づき。

だれに対しても同情と支援を惜しまないことで。

2　他の人の問題やニーズに応える活動に参加する。

▽まずふたりがお互いのニーズに気づくのが、出発点です。人間として、人格を備えた存在として、生徒として、労働者として、家族の一員として、神の子として、さらに一市民として。定期的にふたりの結婚前の関係（きずな）を以上の視点から振り返ります。

▽お互いの家族や親戚を大切にします。家族や親戚のニーズ、特にお年寄りや病人、困っている人に気を配ります。

▽それから初めて、友人や近所の人に手をさしのべます。とりわけ、お年寄り、病人、貧しい人、拒絶と疎外に苦しむ人、無視されている人、抑圧されている人に手をさしのべます。彼らが自助努力できるよう援助し、声なき人の代弁者となることです。

3　平和を造り上げる。

真の平和は、真の正義があるところに宿るものと認識しつつ、自分たちのまわりに正義と平和を造り上げるための具体的な行動を決定します。また、プライドや競争という壁の代わりに、対話と連帯の橋を、いつもあらゆるところに築き上げるよう努力します。次のことを意識しながら、行います。

すなわち、

▽わたしたちは、渇いている人の喉をうるおす「水源」です。

▽わたしたちは、ぬくもりを求め必要とする人を暖める「炎」です。

▽わたしたちは、航路を探し求める人にとって「灯台」です。

▽わたしたちは、道に迷った人を導く「道路標識」です。

▽わたしたちは、「神は死んだ」と思い込んでいる人にとって、神の愛の現存を世界中に告げ知らせる「神のしるし」であるべきです。

4　婚約中のカップルを支えるグループに所属する。

ふたりがお互いの育成を継続し、責任ある交わりと

効果的な奉仕に携われるよう促し励ましてくれる、市民コミュニティーあるいは地域の信仰共同体に所属します。

◇　◇　◇

□婚約したカップルとして、わたしたちは、どうやって自分たちのオープンさを深めていくことができるでしょうか？

愛の証し人になるには

現代の社会がさしだす挑戦を真っ向から受けとめ、婚約したカップルとしてふたりだけの世界に閉じこもるという悪循環に陥ることなく、さらに、愛の証し人になってほしいと呼ぶ神に応えていくには、ことばだけではなく、実践あるのみです。その実践は、つねに、自分なりの才能と霊的賜物（カリスマ）を使います。

では、どう実践すればよいのでしょうか？

内省し分かち合い、さらに重要な具体的な実践に向け、参考となるヒントをいくつか次に提案してみましょう。

□身体的ニーズに即した実践。

▽飢えている人。

どこにいるか発見したら、すぐ食べ物を届けます。

▽渇いている人。

必要な飲み物をもっていきます。

▽裸で着るもののない人。
尊厳を保てるよう着物を用意します。
▽牢獄にいる人。
彼らを訪問し、その家族を援助します。
▽ホームレスの人。
避難所を探したり、自分の家庭を提供します。
▽病気の人。
彼らを訪ねます。特に、身体障害や不治の病をもつ人を大切にします。
▽亡くなった人。
きちんと埋葬し、冥福を祈り、その家族を支えます。

□精神的あるいは霊的ニーズに即した実践。

▽自分自身の生活を誠実に実践することで、罪人に回心を勧めます。
▽自分の賜物と時間を分かち合って、無学な人の教育に貢献します。
▽知恵と祈りによって、混乱し確信のもてない人の相談にのります。
▽心から耳を傾けることで、嘆き苦しむ人を慰めます。
▽忍耐強く柔和な心をもって不正を辛抱します。
▽侮辱や不正をゆるし、関係をもとどおり修復します。
▽友人であれ敵であれ、存命中の人と死者のために祈ります。

◇　◇　◇

□知り合いで苦しんでいる人を思い浮かべてください。彼らを援助するためにわたしたちができること、すべきことは何でしょうか？　その具体的な時と方法は？

カップルから超越していく婚約

三者で生きるために

聖書によれば、結婚は三者でつくるものです。
男と女、そして創造主であられる神…。

◇　◇　◇

よく考えてみましょう。結婚前の生活の秘訣はこれで終わったわけではありません。

婚約者のみなさんが、「一対（カップル）」という殻に閉じ籠り、空しく満たされない袋小路に入り込んでしまうことなく、むしろ、オープンで一致した結婚と家族生活に共に歩んでいくことを望むなら、最重要の秘訣となるものがここで登場します。

最重要の秘訣というのは…。つまり、これが必要不可欠で、愛の本質に関することだからです。

最重要の秘訣というのは…。つまり、これが聖なるもので、信仰・希望・聖なる清さといった、正直で謙遜でしっかりした人に与えられる天の賜物に関することだからです。

最重要の秘訣というのは…。つまり、これは秘められたもので、現代の婚約者らの大部分に知られていないからです。

これは、人生と愛において、今日の世間的な文化では忘れ去られている次元です。

世界中に見られるひとつの事実があります。わたしたちが暮らす消費社会では、婚約に秘められた超越的な次元などは、大部分の婚約者らにとって無関心な事柄です。モノや技術に関する事に圧倒され、その上の次元を求めようなどという望みも時間もありません。

何があるいは誰が、超越した次元という神秘の鍵をにぎっているのでしょうか？

神！　歴史上の数えきれない信仰者たちの叫びは、その輝かしい人生を通してそう訴えています。

みなさんの結婚前の関係（きずな）を神の大いなる現存につねに開きながら共に邁進（まいしん）するならば、おふたりのただ中に神の秘められた現存が見いだされます。

主が約束してくださったとおりです。

「二人または三人が
わたしの名によって集まるところには、
わたしもその中にいるのである
（マタイ十八章・20節参照）」と。

Ⅰ 信じるために

信じるべきか、信じないべきか…、これが問題です。

信仰とは、どのようなものでしょうか？

キリスト教神学および哲学の重鎮、聖トマス・アクイナスは、信仰を次のように定義しました。「意志が、神の恵みを通し神によって促され、その意志に影響された知性が神的真理に同意するとき、その知性の働きを『信仰』と言う」。

信仰とは、聖なるみことばによれば、完全な確約あるいは保証であり、確信です。この全く信頼した態度において、信仰者は救いという神の恵みを受け取ります。

古典的な模範としてあげられるのは、その信仰を正しいと見なされたアブラハムです。アブラハムは、まさに信仰と信頼のお手本です。年老いたアブラハムとその妻サラに子供がいなかった頃、神は幻の中で彼に出現され、ふたりに息子を与えること、そして、その子から大いなる民が生まれることを約束なさいました。

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創世記十五章1～6節参照）

しかし、「魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです」（ヤコブ二章26節参照）。

みなさんは、心から信じているでしょうか？

信仰があると自称し装おっても、行いによって否定するなら、その人は、実際には無神論者です。

忘れずにいただきたいのは、信仰は、ひとつのあり方であると同時に、行動を伴う生き方でもあるということです。信仰は、全人格をあげての生き様であり、神に対する個人的な応えです。

ほんものの信仰者になるには、どうすればよいのでしょうか？

信仰は、神がくださる恵みのうちでもっとも貴重なものです。ですから、神の前に子供のような謙遜と単純さをもち、聖書に書かれた神のみことばに心から聴きいるなら、求める信仰が与えられるでしょう。

神、人が探し求める神秘的対象

「神は存在するのか」「神とはどのようなものか」「神はどこにいるのか」「誰が、神と直接顔を合わせたことがあるのか」「神はどうすれば見いだせるのか」など、この類いの疑問はいくらでも出てくるでしょう。これらの疑問に取り組むため、「足跡」という物語に含まれた教訓をまず見ることにします。

□足跡

ある晩、男は夢を見た。主と並んで浜辺を歩いている夢だった。人生の場面が走馬燈のように空に現れた。場面のそれぞれに、二組の足跡が砂浜に残っていた。ひとつは自分の足跡。もうひとつは主の足跡。

最後の場面が目の前を過ぎていった。砂浜に残された足跡を振り返ると、通ってきた道のそこかしこに、一組の足跡しかないことに男は気づいた。

しかもそれは、人生でいちばん辛く悲しいときばか

りだった。男は憤慨して主に尋ねた。

「主よ、わたしがあなたに従うことを決めたとき、あなたはいつでも一緒に歩いてくださるとおっしゃいました。でも振り返ると、人生でいちばん辛かったとき、足跡が一組しかないじゃないですか。

いったいどうして、いちばんあなたを必要としているとき、わたしを見捨てたのですか？」

主は答えられた。「いとしい、いとしいわが子よ。わたしはこよなくあなたを愛しているから、決して見捨てはしなかった。

あなたの試練と苦悩のさなか、たしかに、足跡は一組しか見えない…。わたしが、あなたを背負っていたのだから…」。

◇　◇　◇

神と出会った男女らの、数兆数億にも及ぶ生きた証しによれば、主こそ、人間が探し求める対象として、歴史上もっとも偉大な存在です。

フランスの数学者・物理学者・宗教哲学者でもあるブレイズ・パスカルはこう明言します。

「人間には、三種類ある。

神に奉仕し神を見いだした人。

神を探すことに夢中だが見いだしていない人。

神を探すことも見いだすこともなく暮らす人。

最初の人は、分別があって幸せな人。

最後の人は、愚かではあるが幸せな人。

間のは、分別もなく幸せでもない輩（やから）」

◇　◇　◇

□わたしたちは、個人としてあるいはカップルとして、どの種類に属しているでしょうか？

II　一緒に神を探し求めるために

人間は神を見失いました。

一世紀前、ドイツの哲学者ニーチェは、その著作「ツァラツーストラ」の中で「神は死んだ」とはっきり言いました。

今世紀になると、一九六六年四月一六日、サン・フランシスコで開催されたアメリカ予防精神病学学会において、アメリカの著名な心理学者エリック・フロムは次のように語りました。「一世紀の間、神学者や哲学者は『神は死んだ』と繰り返してきた。しかし、どうやらわれわれが今直面しているのは、製作者・消費者・偶像崇拝者といったいわば名称（モノ）に人は変形させられ、むしろ『人間が死んだ』ということである」。

言い換えれば…、神は生きています。死ぬことができないからこそ、神なのです。神ご自身が、生命（いのち）の源だからです。わたしたちの心にある無神論のため、人間のほうが神を見失った…、これが現実です。つまり、神を信じていると口先で言いながらも、実際には神を否定していたにほかなりません。神が存在しないかのように、わたしたちは暮らしてきました。何かを所有したり何かをすることに忙しく囚われ、ありのままの自分でいることをわたしたちは忘れました。最後に、わたしたちは、己の創造主である神を見失ったのです。

もしこれが自分たちにあてはまるとしたら、どうすればよいのか、何ができるのか？

ふたりの人が別々にジャングルで迷子になったことを想像してください。抜け出す道を探している途中、ふたりは出会います。そして、そこから抜け出さなければならないという同じ問題とニーズを、ふたりともに抱えていると分かります。そこで、一緒にそれを探そうと決意するのです。そして遂に、その抜け出す道を発見します。

現代の社会というジャングルということになれば、だれにも共通するニーズとは、真理・愛・正義・喜び・平和を探し求めることです。さらに共通するは、絶対不滅の現実である神を求めるニーズを誰しももって

いるという現実です。
みなさんも、婚約者のカップルとして、ハンド・イン・ハンドで（手に手をとって）、一緒に神を探し求めてみたらいかがでしょう。
やり方は、もうおなじみですね。
これからの章をじっくりと読み、内省し、お互いに分かち合ってみましょう。

トビアとサラ

婚約者の男女が一緒に神を探し求めることには、単にふたりで婚約を優れたものにする秘訣を探すというだけでなく、祝福された将来の結婚と家庭をも探求するという意味があります。
トビアとサラは、まさにこの通りでした。
みなさんは、トビアとサラのこの教訓に富んだお話をご存じですか？
第二聖典の付いている聖書なら、旧約の中にこのお話が載っている「トビト記」があります。太古のお話にもかわらず、現代の婚約者カップルにとっても示唆とチャレンジに富んだ模範として励みになるものです。
ざっとポイントを拾ってみますと、

サラの祈り
→トビト記三章11～15節参照

息子トビアに対する父トビトの助言
→トビト記四章1～21節参照

トビアとサラの婚礼の夕べ

↓トビト記七章9～17節参照

婚礼の晩

↓トビト記八章1～9節参照

婚礼の後に

↓トビト記八章9～21節参照

結婚前の霊性…。

これこそ、トビアとサラがもっていて、今日の多くの婚約者のカップルに欠けた「秘密の鍵」とも言えるものです。

事実、霊性のないカップルとはつまり、自己だけではなく、パートナーである相手とも世界とも相容れず、さらに何よりも、神との調和がないもので、長続きしない…。

通じ合いがなく神との関係（きずな）に欠けるカップルは、魂のない体のようなものです。死んでいます。

歴史上の「最初のカップル」がそうなってしまったと、聖書には記されています。

不幸なことに、今日のカップルの大半にとっても、これが現状です。

「ふたりっきり」の世界を造って、みな幸せになろうと欲しています。

幸せなカップルになるには、男と女のふたりだけでは十分ではないということが、彼らにはわかっていないのです。ほんとうは、三者が必要です。男と女、そして…、神（！）が必要です。では、神を発見するには？

一緒に神に向かっていくには

一緒に神を探求するには、どうすればよいのでしょうか？　どうすれば、結婚前の霊性という「秘められた鍵」を発見し、最終的に、神を含めた「三者」になっていけるのでしょうか？　次の提案を見てください。

1　神との個人的な通じ合いと関係（きずな）をもつ。
2　頭だけでなく、心からお互いに相手に聴く。
3　必要なときはすぐ、和解を実践する。
4　一緒に祈る。
5　ありのままにお互い相手を受け入れる。
6　お互いの自己実現と個人的成長を励まし合う。
7　自己鍛練とセルフ・コントロールのできるよう、お互い助け合う。
8　自分たちの家族との通じ合い・関係（きずな）の状態を見直す。
9　お互いの親戚・友人や困っている人にオープンになる。
10　結婚と家族に関する神のご計画を以下の方法で発見する。
　a　結婚準備講座や婚約者のエンカウンターを体験する。
　b　夫婦や婚約者のカップルと体験を分かち合う。
　c　婚約に関するいろいろな事柄についての本を読んだり、あれこれ考えを述べてみる。
　d　神のみことばに聴き入り、一緒に分かち合う。
　e　「わたしは、道・真理・命である」と言いえた唯一の人、ナザレトのイエスを一緒に探求する。
　f　カップルとして、共通の霊的指導者をもつ。
　g　他人特に困っている人のために一緒に何かする。
　h　婚約者のカップル同志で、グループや共同体を作る。
11　結婚する前に、一緒に霊的な黙想をする。
12　婚礼に関するあらゆる事柄を、バランスを保ちながら一緒に準備する。

□カップルで、神と自分たちの実際の関わりを文章にしてみましょう。

Ⅲ 婚約したカップルとして祈るために

もっとも美しい霊的体験のひとつは、パートナーと一緒に祈ることです。祈りのうちに相手と心の奥深くでの出会いを体験するとき、わたしたちは、神ご自身のみ前に立つことになります。この手の祈りをすると、ふたりの間に親密さが創造されます。これは、心から心へと語り合う祈りです。

この点について、聖グレゴリアはこう明言しています。「友情は、霊魂の結合であり、心の一致である」と。

結婚してからでさえ、現代のカップルの多くがお互い決して親友になりえないのは、なぜでしょうか？ ふたりは一体になっていても、お互いその霊魂は遠く離れていることを決して認識しないのはなぜでしょうか？ さらに、なぜ、彼らは、満たされず、空しく、挫折を感じるのでしょうか？

それは、彼らが、「ふたりきりの世界」という悪循環にはまりこんでしまっているからです。

いかにすれば、この悪循環から抜け出せるのか？ そのような彼らには、まさに奇跡のようなものが必要です。

では、誰が、このような驚異を起こし得るのか？ 神のみです。愛に満ち力溢れるわたしたちの神のみ。

それでは、どうすれば、そのような神の慈しみに満ちた仲介を得ることができるのでしょうか？ ふたりが会って、一緒に祈ればよいだけです。

生ける神の御子であるナザレトのイエスは、こう約束してくださいました。

「また、はっきり言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」そして、その理由（わけ）をこう説明なさいました。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」と。（以上、マタイ十八章19～20節参照）

一緒に祈るときには、次のようなことが伴うものです。すなわち、

◇ふたりの思い・体験・感情に深く入る。

◇ふたりのユニークさに関し恵まれた部分もそうでない部分をも含めて、お互いに愛し合う。
◇相手をゆるしたり相手からゆるしてもらったりするチャンスをお互いに与え合う。
◇癒し、親密さ、喜びや平和を体験する。
◇お互いの心の奥深くに生きている神の愛に出会う。

したがって、孤独や挫折、混乱や寂しさあるいは不幸を体験したら、実際にやってみてください。一緒に祈るのです。

祈り方をどうすればよいかについては、これからの章を続いて読み、内省し、分かち合ってください。

祈るには

信じることは、祈ることです。信仰は、ちょうど河が海に流れこむように、祈りへと導いてくれます。そしてまた、食べ物が体を養うように、祈りは信仰を育てます。神がわたしたちの知性を開き、心を促し、ご自分へと魅きつけてくださらないなら、わたしたちは祈ることができません。聖パウロはこのことを次のように語っています。「『霊』も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、『霊』自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」（ローマ八章26～27節参照）

□祈りとは何か？

祈りは、神の考えや心を変える、魔法の呪文ではありません。逆に、わたしたちの考え、心や意志を変えてくださる、神からの恵みです。祈るときに大切なのは、自分自身の利益に拘泥せず、むしろ、心の謙遜と

信頼と生き生きした信仰をもって、神の現存の前に単純にとどまることです。

祈りは、神秘的な望みです。神と出会う望み、愛のうちに神と一致する望み、神のうちに平和と喜びと幸せを見いだす望みです。祈りとは、有限の存在が無限の存在と親密に出会うことです。貧しい人間と、慈しみ溢れる神との会話です。

祈りは、自分自身の知性と心が神の神秘に引き上げられることです。わたしたちの霊魂に絶え間なく響きわたり、わたしたちを一致と平和へと招き、ご自身の愛に抱きしめてくださろうとする神の声に対する、わたしたちひとりひとりの応答です。

祈りは、深く永久的な霊的次元（インパクト）に到達したことのある人にとって、神秘で　またその神秘をとどめるものです。祈りとは、人の悲像を越えた高みにまで到達させうる能力（ちから）です。おそるべき力と威光を与えるものです。知恵の最後の扉を開く、秘密の鍵となるものです。

祈り以上に、祈りをより理解させてくれる方法はありません。祈れば祈るほど、わたしたちは祈りの専門家になっていきます。祈りがなければ、霊的な生命（いのち）も生活もありません。祈りは、天と地、時間と永遠という遠き対岸を結ぶ橋です。

□祈りを学習するにはどうすればよいでしょうか？

◇ひざまずいて、手を合わせ、神に向かって祈ります。「天にます、われらの父よ…」

◇謙遜な心で、忍耐強く祈ります。

◇神とのおだやかな出会いの場として祈りを体験します。

◇心から祈ります。これは、祈りの望みをもつことを意味します。祈りの心をもって何かをするとき、わたしたちは愛と信頼をもってそれをしているのです。

◇静かにへりくだって創造主である神と出会える場所を決め、祈るための時間を毎日きちんととります。

婚約したカップルとして祈るには

神との個人的な関係（きずな）は本質をなすもので、他に置き換えがききません。しかし、結婚において一体となるよう呼ばれたカップルにとっては、それだけで充分とはいえません。その理由（わけ）は、聖書に簡潔明快に記されています。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。したがって、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」（マタイ十九章4～6節参照）

夫婦との司牧体験に基づいてわたしが実感しているのは、ほとんどの夫婦が個人で祈りはするけれど、カップルとして祈るのはまれだということです。婚約者のカップル同志にも同じことが言えます。どうしてこういう事態が生ずるのでしょうか？　その根本的な原因として考えられるのは、大半の人にとって信仰・神・宗教に関するメンタリティーは個人的色彩が強いことです。パートナーが自分と異なる信仰をもち、異なる文化に属していることも、ときに困難さを生む原因となるでしょう。では、婚約したカップルとして、おふたりはどうやって神と関わり通じ合うことができるのでしょうか？

□実践的な三つの段階

段階を追って進めなければなりません。前の段階を十二分に体験せずに、次の段階に進むことはできません。まず、ひとりひとりが個人的に神との関係（きずな）と通じ合いをもっていることは、どの段階においても無条件に出発点となるものです。個人的にその関係（きずな）がなければ、ふたりの分かち合いも表面的で意味のない空しいものになってしまいます。

第一段階。聖書のみことばを分かち合う。一緒に聖書の数節を読み、しばらく沈黙のうちに内省してから、今読んだみことばについて、思ったこと・感じたことなど自分なりに受け止めたことをお互い分かち合いま

す。神のみ前で、尊敬と積極的な態度をもちつつ、心から相手に聴きましょう。

第二段階。自分なりの個人的な祈りの生活を分かち合う。神との個人的な関係（きずな）や、人生・愛・平和・正義・神の呼びかけ・夢・危機・真理・賜物・善・悪・誘惑・理想・美・霊的ニーズなどについて実際の体験をお互い交換します。

第三段階。お互いに励ましや勧めを実践します。神のみ前で、お互いの個人的な誓約について対話し、神のみ旨にしたがって暮らし成長できるよう励まし合います。

□カップルでの祈りを実践するためのアウトライン

1　一緒にすわって、沈黙のうちにしばらく時間をとり、神の現存が自分たちと共におられることを意識しましょう。

2　聖書のみことば数節に一緒に耳を傾けましょう。どちらかがその箇所をゆっくり声を出して読みます。

3　読み終わってからちょっと間をおき、今読んだみことばが心に染みいるよう数分間黙想しましょう。

4　神のみことばが今自分に伝えていると思うことを、簡単に短く分かち合います。

5　さらに、沈黙の時間をとります。

6　思いつくことがあれば声をだして神に語りかけ祈ります。あるいは、個人的に心の中で祈ってもいいでしょう。

IV 神のみことばに心から聴き分かち合うために

神は、お金を出せば買える「モノ」ではありません。神は、わたしたちの心の扉をたたき語りかけておられるペルソナ（＊）です。

（＊）ペルソナ＝知恵と意思を備え、他に依存する必要のない独立した存在。

神学者たちは、神は、神秘的で驚嘆に値する多くのやり方でわたしたちに語りかけておられる、と言っています。すなわち、

◇創造を通して、ご自分のみ業を。
◇わたしたちの良心を通して、ご自分の声を。
◇わたしたちの生活のさまざまな状況を通して、ご自分のみ旨を。
◇苦しみを通して。ご自分の神秘的な愛を。
◇わたしたちの隣人のニーズを通して、ご自分の召し出しを。
◇聖書を通して、啓示され生きたみことばを。

聖書は、さまざまな他の仕方を通して神がわたしたちに語りかけておられる内容を識別し理解する、その「鍵」と言えるものです。

聖書とは、何でしょうか？　「聖書」のギリシア語での意味は「複数の本」です。神について古代から書かれてきた啓示を集めたもので、神ご自身がその著者です。

聖書は、どの時代においてもベスト・セラーで、もっとも多く配給された本です。アメリカ聖書協会では、一八一六年の創立以来、三十億冊の聖書が配給されたと推定しています。聖書は、印刷が発明されてこのかた、およそ一千八百五十の言語に翻訳されました。

聖書は、神の生けるみことばです。誰でも、聖書の一ページ一ページに、あたかも鏡に映し出されたかのように、自分自身の姿を見ることができるでしょう。聖書は、自分自身の肖像画（ポートレート）として最高のものになりうるのです。事実、救いの歴史においてもっとも輝いているすばらしい男女らは、聖書における神に耳傾けることで、自分たちの生活に神を見いだし体験してきました。

おふたりも、聖書に聴いてみてはいかかでしょう？

神のみことばに聴くには

ひとつの事実があります。数百万人が聖書をもっている、しかし、読んでいるわけではない、という事実です。「聖書はわからない」というのがその理由です。たしかに、聖書を読むのは容易ではありません。聖書の読み方を学べば準備完了！と、簡単に言い切ることができないからです。聖書は、読み物としての単なる書物ではなく、心から聴くための神の生けるみことばです。全聖書の末尾を飾る「ヨハネの黙示録」には次のように書かれています。

◇「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。『わたしははじめであり、おわりである。』」（ヨハネ黙示一章8節参照）。

◇「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」（ヨハネ黙示三章20節参照）。

神のみことばに心から聴けるようになるためには、どうやって聖書を読めばよいのでしょうか？

□聖書のお勧めの読み方

1　神を探し求めるのは、ちょうどお客様を家に招くときと似ています。家に招き入れてから、席を勧め、その人の話にまず耳を傾けるでしょう。聖書を読み、神のみことばを探求するときの姿勢・態度も、これと同じです。

2　目や指で字を追って読むことはできますが、頭を使うと同時に、心と霊をあげてみことばに聴きいる必要があります。これが神のみことばを読む最高の方法です。

3　聖書を読む時間は、前もってしっかり確保しておきましょう。読むことに専念するためです。

4　聖書を開く前には、信頼をもって神に祈りを捧げましょう。神が、わたしたちの霊を、すなわち知性も心も意志をも清め開いてくださいます。

5　謙遜で正直な心で聖書を読み、自分自身に問いかけましょう。「神はわたしに何を語ろうとしておられるのか?」と。神のみことばは、わたしたちのことばと違い、空しく過ぎていくものではありません。

6　聖書を選ぶときは、日本語で出版されているものとして次のものが勧められます。

◇カトリックの訳

◆バルバロ訳（ラテン語からの翻訳）

◆フランシスコ会訳（ヘブライ語・ギリシア語原典からの翻訳）

◇カトリック・プロテスタント共同訳

◆新共同訳（日本聖書協会発行。ヘブライ語・ギリシア語原典からの翻訳。本書の引用で主に使用）

いくら努力しても読んでいる内容が理解できない場合、どうすればよいでしょうか？　それでも気を落とすことはありません。むしろ喜んでください。そういうときは、神がみなさんにチャレンジしておられるときだからです。ですから、何度も何度もみことばに聴きいってください。渇いている人は、泉から飲むとき幸福です。決して涸れることのない泉ですから、悲しむ必要などありません。

神のみことばの泉があなたの渇きを癒すに任せ、あなたの渇きがみことばを空しく追い回すことのないようにしてください。神の生けるみことばは、神秘の宝です。その宝のいくらかでも発見できればそれで十分だ…などという考えは捨てましょう。

◇　◇　◇

□正直にいって、今のわたしたちは、神のみことばと誓約を交わす準備ができているといえるでしょうか？（※）

神のみことばを通して分かち合うには

結婚して幸せな夫婦になろうと準備している男女にとって、その婚約時代に神のみことばに個人的に耳を傾けその体験を分かち合うことは、きわめて重要です。では、そのやり方は？　次に、いくつかの方法を提案してみましょう。

□一緒に分かち合う

1　静かな場所を探します。ゆったりと腰かけられる場所を探し、お互いに平和のあいさつを交わします。短い祈りをしてから、聖書の箇所をひとつ選びます。たとえば、種蒔きのたとえ話＝ルカ八章4～15節参照。

2　聖書を開きます。みことばを朗読してから、沈黙のうちにその箇所について内省します（5分間）。自分にとって大切だと思える箇所があれば線をひいておくとよいでしょう。

3　自分の祈りのノートをつくり、それに内省したことを書きます。自分の感じたこと・考えたこと・発見したことを書いたり、「この聖書の箇所でわたしの心に響いたのは何か？」「この聖書を通して、主が自分に言おうとしておられるのは何か？」などの問いに対しその答えを書くだけでもよいでしょう（10分間）。

4　分かち合いの時間。個人的にいただいた主からの恵みとして、何でもお互いに分かち合うことができます。また、お互いの話は、これも主からの賜物として心から聴き合うようにします。（10～20分間）

5　神に感謝を捧げます。声を出して。自発的に。

□手紙で分かち合う（やむを得ない事情のため、一緒に分かち合えない場合）

1　まず電話で、どの聖書の箇所を読むか一緒に決めます。たとえば、次の日曜日の聖書朗読の箇所などから選ぶことができます。

2　その電話で、その聖書を読む日を決めます。週日でも週末でも、時間をとって、決めた聖書の箇所をひとりで読み、注意深く内省し、心からそのみことばに

耳を傾け、内省したことを飾らずに自分の祈りのノートに書きましょう。

3　ラブ・レターを書きます。このラブ・レターは、自分が個人的に読み、聴き、内省した内容について分かち合うことが中心です。

4　毎日、お互いのために祈ります。このように聖書の読み、聴き、内省することはとても重要ですから、欠かさず続けましょう。

□霊的な黙想を実践する

1　個人単位で参加する黙想会。個人単位で参加する黙想会を選びます。泊まれる黙想会が望ましい。

2　カップルで参加する黙想会。「婚約者のエンカウンター」のように、他の婚約者のカップルたちと参加できる体験や黙想会を選びます。

3　一緒に参加する黙想会。他の人と一緒に参加するものです。主に霊的指導を目的とした黙想会。

◇　◇　◇

□聖書の中で、わたしが好きな人物・箇所・文章は誰あるいは何でしょうか？　その理由は？

V　結婚に関する神のご計画を発見するために

今まで、みなさんは次のような質問を自らに投げかけたことがありますか？

◇結婚とは、どのようなものでしょうか？

◇結婚を形成する本質は、何でしょうか？

◇結婚の中心的な目的は、何でしょうか？

◇結婚は、意義深く価値あるものでしょうか？

◇結婚とは、心理学・社会学・経済学の見地から、一般的な状況や環境の上に築かれただけの、人間的な制度にすぎないものでしょうか？　それとも、神的で聖なるものでしょうか？

◇結婚において夫と妻とは、まったく自立した、自分たちだけで充足した存在でしょうか？　それとも、夫と妻は、その創造主である神に深く根差し依存した存在でしょうか？

◇結婚に対する神のご計画というものは、存在するのでしょうか？　存在するならば、結婚・家族に対する神のヴィジョンとは、どのようなものでしょうか？

◇神のヴィジョンとご計画にしたがって生きることは、夫と妻にとって重要でしょうか？

◇神は、結婚した人々が幸福になることを望んでおられるでしょうか？　それとも不幸になることを望んでいるのでしょうか？

◇神なくして、結婚における幸福はありうるでしょうか？

◇健全で幸せな結婚生活を送るため、その示唆となるアウトラインのようなものが、聖書にはあるでしょうか？

上記のそれぞれあるいはこれに類する疑問に対し適切な答えを見いだすため、頭と心と霊を総動員しながら、事項に掲載してある、創世記から取り上げた三つの記述を、読み進んでいきましょう。

さあ、すぐにとりかかりましょう！

驚嘆に値する聖書の啓示

結婚と家族についての神の啓示は、聖書の冒頭から出てきます。聖書学者の見解では、創造に関する箇所は、平行する二つの物語があると見るか、あるいは、補足し合う二つの記述があると見ることができるとのことです。

□創造の第一記述（創世記一章1～31節参照）

◇「初めに、神は天地を創造された」　したがって、神は創造主です。

◇「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』」　結婚は、神の創造のみ業の頂点に位置します。

◇「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女とに創造された。」　結婚は、神のかたどりです。

□創造の第二記述（創世記二章4～25節参照）

◇「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。』　主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られ」た。結婚は、生命と愛の共同体です。

◇「人は言った。『ついに、これこそ、わたしの骨の骨、肉の肉。これをこそ女（イシャー）と呼ぼう。男（イシュ）から取られたものだから。』　こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」　結婚は、親密さや一致の神秘です。

さて！

結婚が世の初めからそれほど完璧なものであるなら、現在のこれほどの不幸をいったいどう説明できるのでしょうか？　歴史をたどれば今日にいたるまで、あまりにも多くの結婚や家族に、不貞や不倫・別居・離婚と崩壊ばかりだからです。

世の初めに、何が起こったのでしょうか？

この超越的な疑問に対する答えは、みなさんが、創造に関する第三の記述である「創世記三章1～24節」を読まれれば、おわかりになるでしょう。

ここには、人類最初の夫婦が受けた誘惑について記述されています。その誘惑は、夫婦が神からの解放（？）をめざし、自分たちだけで足るといった偽りの自立への誘いでした。彼らがどのように神に背いたか、そして、神に反逆した結果はどのようなものであったかが記されています。

◇　◇　◇

□前述の三つの聖書の記述によれば、健全で力強く幸福な結婚をおくるための「秘訣」は、何でしょうか？

神の呼びかけを識別するには

わたしたちはみな、神の呼びかけによってこの世に生を受けました。この内的な呼びかけに応えることは、つまり、わたしたちに内在する神的エネルギーを点火させ、自分たちなりの人生の意味を見いだすことにほかなりません。

現代の数多くの人々が己の人生の意味を見いだせずにいる理由は、ここにあります。結婚や家族での生活を通してご自身の愛に満ちたご計画にしたがって、神が自分たちを幸福へと呼んでおられると、彼らは発見できませんでした。

言い換えると、男女が自分らの結婚を成功させたければ、神がご自身の愛深いご計画にしたがって自分たちを結婚・家族生活へと呼んでおられることを、しっかり認識しなければならないのです。

みなさんの場合は、どうでしょう？　神がご自分のご計画に沿っておふたりを結婚・家族生活に呼んでおられると、確信していますか？　どうすれば、そのよ

うな確信に満ちた結論に到達できるでしょうか？　次のいくつかのポイントはその示唆となるでしょう。

1　神学者らの教えによれば、神が語られるのは、普通の場合、直接的なやり方ではなく間接的であるということです。つまり、「しるし」を通して語られます。

2　したがって、「しるし」は、神のみ旨を知るために、ふさわしく解釈する必要があります。

3　これらの「しるし」は、わたしたちの本性的なありのままの姿か、あるいは人生の出来事を通して示されます。

4　これらの「しるし」を解釈する際、それは、自分たちのありのままの性質に逆行したり、神が示された啓示と対立するものではありません。

5　神のみ旨を識別するうえで、神の十戒と福音の教えは、参考としてすばらしいものです。

6　ほんものの徳を実践すること、たとえば、正直・従順・純潔・賢明・正義・堅忍・謙遜などの実践は、わたしたちを神のみ旨に近づけてくれます。

7　神のみ旨を発見するための重要な源は、特にカトリック信者にとって、ローマ・カトリック教会のMAGISTERIUM（最高権威）です。

8　神のみ旨を識別するため一般的なもうひとつの源は、自分の両親や親戚の助言です。

9　結婚の召命に関する「しるし」を解釈するひとつの手段として、よい指導者の助言を仰ぐことです。たとえば、司祭や、この分野での経験に富んだ専門家です。

10　結婚や家族に関する神の呼びかけを識別するもうひとつのよい方法は、ふたりそろって、「婚約者のエンカウンター」のような、婚約者同志のための霊的な体験ができる集いに参加することです。

◇　◇　◇

□何がもとで、自分たちが結婚することを神が望んでおられるとわたしは考えているのでしょうか？

VI 神の愛を体験するために

聖書全体でもっとも偉大な「福音（よいしらせ）」は、次のみことばの中に示されています。

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです」（1ヨハネ四章7～12節参照）

「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です」（1ヨハネ四章20～21節参照）

神の愛についての内省

これから、神の愛についての「内省の時間」にはいります。

前のページの聖書の箇所をまずひとりでじっくりと読みます。その後、以下にあげた質問のそれぞれについてゆっくり内省し、自分なりの回答を祈りのノートに書きます。それからおふたりで分かち合えば、すばらしく有意義な時間になるでしょう。

1　今日までのわたしたちの個人的な生い立ちの中で、神の愛を実感したものとしては、具体的にどのような体験があったでしょうか？

2　「神は愛である」という聖書の啓示は、わたしたちにとって「ひじょうに優れた知らせ」でしょうか？（※）

3　「神は愛である」という聖書の確約を聴いて、わたしたちは、何を感じ何を考えるでしょうか？

4　わたしたちが愛し合っている具体的な「しるし」としては、どのようなものがあるでしょうか？

5　「わたしたち」の愛は、「神からの」愛でしょうか？（※）

6　次のみことばを聴いたとき、わたしたちの個人的な反応は、どのようなものでしょうか？

「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、こうして神の愛がわたしたちの内で全うされているのです」

7　結婚前のふたりの愛を成長させていくため、わたしたちには何をどのようにできあるいはすべきでしょうか？

8　次のみことばを聴いたとき、わたしたちの個人的な反応は、どのようなものでしょうか？

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました」

9　わたしたちは、自分たちの中におられる神の現存に寄り頼んでいるでしょうか？　それとも、単に人間的な基盤の上に、自分たちの生活を築いているだけでしょうか？

10　次のみことばを、どうやったら、わたしたちの生

活に活かすことができるでしょうか？

「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです」

神の愛の証し人になるには

今日では、神を信じない多くの人たちが、同様に愛をも信じていません。

自分たちの生活の中で愛をまったく体験していない人が多くいるというのが、現実だということです。

個人的な生活において愛を体験していない人は、神を愛することにいっそう困難を感じるものです。そのような人たちには、無条件に彼らを愛し神の愛の証し人となってくれる、信頼のおける人物が近くに必要です。

無条件の愛。限りのない愛。受け入れという永久の恵み。これこそ、神の愛の姿です。

そして、これが、わたしたちに神が求めておられる愛し合うときの方法です。もし、わたしたちが真に神を愛するというなら…。

無条件の愛は、神を信じない人に必要な、まさに唯一の証明です。わたしたちが証し人となれる、その無条件の愛の「しるし」を、次にあげてみましょう。

□家庭で

◇家族のメンバーひとりひとりを、ありのままに受け入れる。
◇家族のひとりひとりに対しても、家族全体に対しても、いつも変わらずオープンに関わる。
◇いつでも、家族のひとりひとりに愛・ゆるし・理解・受け入れ・寛容などを与え、そして、ひとりひとりからそれらを受け取る。

□おふたりがお互いに

◇お互いに、心からの尊敬・正直・誠実をもつ。
◇お互いをあるがままに受け入れ、助け合う。
◇必要があればいつでも、ゆるしてあげ、あるいは、ゆるしてもらう

□どこにおいても

◇必要なときには、だれに対しても共感を示し、援助を惜しまない。
◇いつでも、自分の最善を尽くして奉仕する。
◇声なき人の代弁者となる。

◇　◇　◇

□家庭で、ふたりがお互いに、そして、どこにおいても、わたしたちが神の愛の証し人になるためには、どうやって何ができるでしょうか？

Ⅶ 神とわたしたちで三者になるために

「わたし（わたしたち）と共に神はおられるのだろうか？　味方なのだろうか？」と、多くの人が戸惑いを覚えます

この有益な疑問に適切な答えを与えるためには、真剣かつ正直に自問自答しなければなりません。

「では、わたし（わたしたち）の側は、神と共にいるのだろうか？」と。

超越したこの疑問にもっと光をあてることを望むなら、聖書がその期待に答えてくれます。

「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。
わたしたちは決して恐れない
地が姿を変え、山々が揺らいで海の中に移るとも
海の水が騒ぎ、沸き返り
その高ぶるさまに山々が震えるとも。
万軍の主はわたしたちと共にいます。
ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。
大河とその流れは、神の都に喜びを与える
いと高き神のいます聖所に。
神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。
夜明けとともに、神は助けをお与えになる。
すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。
神が御声を出されると、地は溶け去る。
万軍の主はわたしたちと共にいます。
ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。
主の成し遂げられることを仰ぎ見よう。
主はこの地を圧倒される。
地の果てまで、戦いを断ち、
弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。
『力を捨てよ、知れ
わたしは神。
国々にあがめられ、この地であがめられる。』
万軍の主はわたしたちと共にいます。
ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。

（詩編四十六参照）

◇　◇　◇

□現状では、わたしたちは神と共にいるでしょうか？
それとも、神に背き離れているでしょうか？（※）

ナザレトのイエス　生ける神の御子

神は、神秘の中の神秘です。わたしたちの中におられる神に出会うには、どうすればよいでしょうか？そのための偉大な啓示は聖書を通して明らかになりました。みことばに耳を傾け、心から読んでいきましょう。

「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ一章14節参照）

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ三章16節参照）

聖書が繰り返し語る「神の独り子」「肉となった言（ことば）」とは誰のことでしょうか？　今一度、聖なるみことばに心を開き、心から読み、内省し、聴きましょう。

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開

きになると、次のように書いてある箇所が目に留まった。

『主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、
主の恵みの年を告げるためである。』

イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこで、イエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた。（ルカ四章16～21節参照）

また、マタイの福音書にはこうあります。

イエスは「弟子たちに、『人々は、人の子のことを何者だと言っているか』とお尋ねになった。弟子たちは言った。『「洗礼者ヨハネだ」と言う人も、「エリヤだ」と言う人もいます。ほかに、「エレミアだ」とか「預言者の一人だ」と言う人もいます。』 イエスが言われた。『それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか』 シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。 イエスはお答えになった。『シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ』」（マタイ十六章13～17節参照）

生ける神の子であるナザレトのイエスは、ご自分についてこう言っておられます。

◇「わたしは、世の光である」（ヨハネ九章5節参照）
◇「わたしは門である」（ヨハネ十章9節参照）
◇「わたしは良い羊飼いである」（ヨハネ十章11節参照）
◇「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（ヨハネ十四章6節参照）
◇「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできない」

（ヨハネ十五章5節参照）

◇　◇　◇

□わたしたちの生活において、ナザレトのイエスは、どのような位置を占めておられますか？　あるいは、これからどのような役割を担われうるでしょうか？

三者になるには

「ふたりきりの世界」という悪循環を断ち切り、主と共に三者で歩んでいくためには、どうすればよいでしょうか？

◇主に心から聴き、わたしたちの関係（きずな）を主に開く。ヨハネの黙示録に、次のような主の預言のことばが記されています。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように」（ヨハネ黙示三章20～21節参照）

◇主に忠実でいる。主は、ご自分の弟子たちに約束なさいました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ二十八章20節参照）

◇ナザレトのイエスの名のもとに集い、祈る。主ご自身の約束があります。「どんな願い事であれ、あなた

がたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ十八章19～20節参照）

◇エマオに向かう弟子たちのように、主を招く。

「二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、『歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか』と言われた。…二人は言った。『ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日めになります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ「イエスは生きておられる」と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした』　そこで、イエスは言われた。『ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか』　そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、『一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから』と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなく

なった。二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った」（ルカ二十四章1～35節参照）

◇　◇　◇

□わたしたちが「ふたりきりの世界」という悪循環を脱し、主と共に三者になるには、何ができるでしょうか？

VIII 「主において」結婚するために

初代教会のキリスト者のころから、結婚は聖なるものと考えられていました。

一四三八年フロレンス公会議において、教会権威は、結婚を「秘跡」として公式に宣言しました。

教会は、この結婚の秘跡としての本質を、何世紀もの間吟味を重ね再確認してきました。特に、一九六五年の第二バチカン公会議は、その際たるものでした。

キリスト者同志の結婚は秘跡であるとは、現代いっそう多くの神学者らが認めるところです。

「秘跡」とは、何でしょうか？

神学者らの定義によれば、「秘跡」とは、キリストがこの世にご自分の救いの現存を示し、神とのより緊密な一致にわたしたちを至らせてくれる、意義深く有効な、キリストご自身によって聖別された「しるし」です。

では、「結婚の秘跡」とは、何でしょうか？

「結婚の秘跡」とは、キリスト者の男女によって交

わされる、荘厳で無条件かつ破棄することのできない約束、つまり「誓約」です。そこにおいて男女は、イエス・キリストを通して、人生と愛の永久のパートナーとして自分を余すところなく与えることをお互いに誓います。その意味するところは、お互いが忠実と貞節を尽くし、人生と愛を一緒に分かち合い、「主において」一致した人生を歩むことです。

「秘跡」としての結婚は、民法上の結婚とは区別されます。

民法上の結婚は、条件づきで期間の限られた「契約」であり、したがって、法律上破棄することが可能です。その規定は、モノの所有権の決定から、権利や義務、親権の問題にまで及び、民法を基礎とするものです。

主キリストによって刻印された夫と妻の愛は、無条件であるところが、まったく異なります。

わたしたちが主を拒絶し、裏切り、いわば愛されるに値しない存在であっても、神は、決してわたしたちを愛することをおやめになりません。夫婦もまた、このような無条件の愛でお互いに愛し合う決意をしなければなりません。障害が生ずるのは避けられない…。しかし、パートナー同志が「主において」お互い愛し合っているなら、克服することのできない障害など存在しないものです。

希望である婚姻の秘跡

希望！　とりわけ今日の混沌とした社会において、わたしたち人類がもっとも必要とする貴重な価値観は、この「希望」です。神のご計画とイエスの掟である相互愛にしたがい「主において」生きる結婚こそ、今日そして明日の世界にとって、「希望」という預言的なしるしです。みなさんはそう思いませんか？　もし、そう思わないなら、教皇ヨハネ・パウロ2世の啓示的な次のことばを注意深く読み、おふたりで分かち合ってみてください。その後、ヨハネ・パウロ2世がここで言う精神にしたがって生きているに違いないと思える人を、自分たちの知り合いのカップルの中から探してみてください。きっと何組か見つかるはずです。

□イエス・キリストと婚姻の秘跡

神とご自分の民との一致は、愛ゆえにご自身を人類の救い主として与え、ご自分の体として人類をご自身に一致させてくださったキリストにおいて、その普遍的実現を見ることができます。神は、結婚の起源の真理、「世の初め」の真理を啓示され、人間をその心のかたくなさから解放し、この真理を総合的に認識できるようにしてくださいます。神のみことばが人間本性に受肉し人類にもたらしてくださった愛の賜物において、そして、イエス・キリストがご自分の花嫁である教会のため十字架に自らかかってくださったその生けにえのうちに、この啓示の実現は完全に達成されました。

この生けにえのうちに総合的に啓示されているのは、創造以来男と女という人間性に神が刻印しておられたご計画であり、それゆえ洗礼を受けた者同志の結婚は、キリストの御血によって清められ、まったく新しくされた永遠の誓約のまことの象徴（シンボル）になるということです。主が送ってくださった聖霊は、新しい心を与え、こうして、キリストがわたしたちを愛してくださったように、男と女も互いに愛し合うことができるようにしてくださいます。結婚における愛は、内的にキリストとの一致に到達し、結婚における慈しみは、十字架上でご自分を捧げられたキリストご自身の

その慈しみに配偶者らがあずかり生き抜いていく際、その正しく実践的な道です。よく知られる一節ですが、キリストとその美のうちにある結婚という生き方の偉大さをうまく表現してくれた教父のことばを引用しましょう。

「教会によってひとつに結ばれ、奉献によって強められ、祝福の印章に守られ、天使によって告げ知らされ、御父によって承認される…、そういった結婚の幸福を、いったいどう表現できるものだろうか？　ひとつの希望、ひとつの望み、ひとつの従順、ひとつの奉仕を共有する、ふたりの信仰者の絆は、なんとすばらしいことか！　ふたりともに、兄弟であり、しもべ仲間である。霊においても肉においても、そこには一切の分裂がない。まさに、ふたりはひとつの体であり、その体ひとつであるところ、その霊もひとつである」

結婚の秘跡性のもつ徳によって、配偶者らは、もっとも深遠かつ永久不変の仕方で結びつけられています。配偶者がお互い相手に帰属する姿は、教会のキリストに対する関係（きずな）の秘跡的なしるしであり、これによってその一致を真に証しするものです。したがって配偶者とは、教会・配偶者相互・その子供たちに対し、婚姻の秘跡が分かち合わせてくれるその救いの証し人として、十字架上の出来事を永久に記念させる存在です。（ヨハネ・パウロ2世著「家族について」より）

◇　◇　◇

□わたしたちの将来の結婚は、希望のしるしとなるでしょうか？（※）

神からの結婚の召命

結婚とは、キリスト教神学の光に照らしてみた場合、第一義に「神の恵み」であり、単なるひとつの選択にとどまるものではありません。言い換えれば、結婚は、男女が自然に魅かれ合った結果の出来事ではなく――魅力なら誰しももっているものです――、神からの呼びかけあってこその召命、ということです。このことは、パウロのエフェソ人への書簡に次のように書かれています。「神は、わたしたちをキリストにおいて、天にあるあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」

キリスト者同志の結婚における「誓約」は、イエスが教会にかたく結ばれているその誓約と、まさに同じように形作られ交わされていく関係（きずな）です。前述のエフェソ人への手紙五章25～27節にそれを読みとれます。「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした」　ですから、婚約は、「神の恵み」として「神のめぐみのうちに」すごされるべき、きわめて重要な時間です。特に、神のみ旨を識別するため、自分なりの召命を探求する時間として重要です。みなさんがご自分の召命を識別するうえで、次の質問が役に立つでしょう。

◇あなたとわたしは、結婚に呼ばれているでしょうか？

◇結婚に呼ばれている、あるいは呼ばれていないと思われる、わたしたちそれぞれに見られるしるしには、どのようなものがあるでしょうか？

◆主は、わたしたちを、秘跡としての結婚に呼んでおられるでしょうか？

◆前の質問に「はい」あるいは「いいえ」といえる、主な理由は何でしょうか？

◇わたしたちは、お互いをめとるように呼ばれている

でしょうか？

◇わたしたちがお互いをめとるよう呼ばれていると思われる、ふたりにとってのよりはっきりしたしるしは何でしょうか？

◆わたしたちは、お互いをありのままに受け入れているでしょうか？

◆わたしたちは、無条件に愛するようにという神の呼びかけを感じているでしょうか？

◇わたしたちは、完全に一致するようにという神の呼びかけを感じているでしょうか？

◇わたしたちが現在直面している困難は、具体的にどのようなものでしょうか？

◆わたしたちはふたりとも、結婚を、神からの「生命を尊重するように」という呼びかけとしてとらえているでしょうか？

◆わたしたちは、将来責任ある親になる決心をすでにしましたか？

◇キリスト者の結婚とは、聖なる夫婦・家族になっていくための呼びかけであると、わたしたちは信じているでしょうか？

◇わたしたちは、神のみ旨にしたがって将来の自分たちの結婚生活をしていく意向をもっているでしょうか？

◆今のふたりの婚約は、実際に、わたしたちにとって「神の恵み」のときといえるでしょうか？

◆わたしたちは、自分たちの唯一の主あるいは救い主として、イエス・キリストを選んでいるでしょうか？

◇神の恵みを受けとりそれを生きるうえで、わたしたちには何らかの困難があるでしょうか？

◇どのような困難がありますか？

◆わたしたちは、個人としてもカップルとしても、祈っているでしょうか？

◆なぜ、祈っていますか？　あるいは、なぜ、祈らないのでしょうか？

◇わたしたちは、ゆるしの秘跡とご聖体を頻繁に受けているでしょうか？

◇わたしたちの霊的な指導者は、誰ですか？　あるいは誰が望ましいでしょうか？

Ⅸ キリスト者としての婚姻の祝宴に向けて

結婚式は一日かぎりのものですが、結婚はまさに生涯のものです。しかしながら、みなさんの婚姻の祝宴が、おふたりの結婚生活全体にとってそのスタート地点であることも確かです。

ですから、超越的といえるこの日をふさわしく準備することは、おふたりの人生全体にとってより重要な課題のひとつです。

今日では、「教会挙式」という用語は、「神前」で行われる結婚式に対比して、単に教会という場所を使って行われる結婚式という意味合いで使われることが多くなっています。教会での結婚というと、多くの人は、社会的立場の単なる反映としか考えず、すべてのキリスト者の結婚にとってその核心である宗教的信条をはっきり言い表したもの、などとは思いもよりません。

最近のこのような誤った認識は、「キリストにおける」結婚の意味を理解することがいかに重要かを逆に強調するものです。初代教会でおそらくそうであったように家族や親戚に見守られての結婚であっても、今日のように教会を代表する司祭の前で信仰共同体の中執り行なわれる結婚であっても、その重要さは変わりません。

初代教会では、結婚は、「キリストのうちに」あらゆるものを再建することであり、救いの秘義と関連づけれて理解されていました。彼らのこの信条は、聖書のみことばに深く根差すものでした。

事実、聖パウロは、エフェソの信徒への書簡の中で、キリスト者同志の結婚を、神の定めた単なる制度としてではなく、キリストと教会における愛の親密な関係（きずな）を表す意味深い象徴（シンボル）として見ています。

「『それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる』　この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです」（エフェソ五章31～32節参照）。

言い換えれば、キリストと教会の結婚こそ、キリスト者同志の結婚の模範（モデル）となるものです。し

たがって、男と女がキリストと教会のみ前でお互いの人生を与え合うことを誓約するならいつでも、キリストの約束してくださった聖霊が、彼らの心と知性に、いのちの息吹を吹き込んでくださいます。エゼキエルの預言が自分たちのうちに実現していることを、彼らは特別の仕方で納得するでしょう。

「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、わたしの霊をお前たちの中に置」く（エゼキエル書三十六章26～27節参照）。

婚姻の日は、洗礼や司祭叙階に劣らず重要なもので、安易に扱うことはできない！と、断言できます。

励みになる証し

司祭に叙階されるためには、数年間に及ぶ真剣な準備を要します。結婚の場合はどうでしょうか？　そんなに急いでできるものでしょうか？　キリスト者のカップルの証しに、耳を傾けてみましょう。

「わたしたちは、デートするようになるちょっと前からの知り合いでした。ふたりともに、毎日の祈りを通して、わたしたちの人生に対する主のみ旨を発見し、主におけるふたりの関係（きずな）を成長させていくことを探し求めていました。数か月デートを重ねるうちに、わたしたちはお互いますます魅かれるようになり、ふたりの愛情も深まりました。わたしたちが結婚を決意したのは、ふたりが愛し合っていたからだけではなく、結婚こそふたりに対する神のご計画であるとはっきり悟ったからです。

友だちや親戚の結婚式を見ていて、結婚式や披露宴に対するわたしたちの好き嫌いが段々はっきりしてきました。結婚式を計画し始めたときには、主の指導を

受け、主の目で見ることがますますはっきりと必要でした。家族や友だちを初め、結婚情報誌やブライダル産業の類いは、結婚式を、感動的で自分たち中心のものにするよう勧めていました。わたしたちは、「完璧な結婚式」あってこその「理想の家庭」という公式に押し込めようとするあれこれの重圧にさらされていたわけです。

祈りのおかげで、どのように人の目に映りどれほど気にいられるかということばかりに気を取られてしまう誘惑に、わたしたちは抵抗することができました。主が助けてくださったので、この試練を、より深い祈りのとき、またキリスト者としての結婚を学び準備し、さらに、ふたりの人生に対する神のご計画に自分たちを一致させる努力をする時期として見なすことができました。神の恵みによって、わたしたちは結婚式の計画ばかりに囚われることなく、その時点でふたりが人生で本当に優先し責任をとるべき事柄に、意識とエネルギーを集中することができました。

わたしたちは、ふたりの決定についてたくさん祈りました。わたしたちが祈ったとき主が示してくださったのは、その時点でひじょうに重要なのにぼんやりとしかわからず、そのためさして意味があると思えないことも、数か月たてばその詳細がはっきりしてくるということでした。第一にもっとも重要だったのは、結婚の中心はわたしたちではなくイエスである、と知ったことでした。

家族や参列者の方々にわたしたちの気持ちと配慮が示せるような形で、自分たちの予算に見合った簡素なアレンジを心掛けようと、ふたりは決心しました。友だちが、可愛らしいウェディング・ガウンを貸してくれました。前の晩のお祝いも、おうちで、くつろぎながら簡単な食事をしただけです。

結婚前の親しい人たちがパーティーを開いてくれましたが、これを企画した友だちが「祈りの時間」を設けてくれたので、神様のこと、キリストの御体に結ばれるふたりの結婚の関係（きずな）について深く見つめることができました。結婚式の歌も、神の被造物ではなく、神ご自身を賛美できるものを選びました。わたしたちがはっきり気づいていたのは、今の社会でキリスト者としての結婚を生き抜くのは、大きなチャレ

ンジだということです。わたしたちの結婚の準備に協力してくださった司祭は、婚姻の秘跡をもたらすのは司祭ではなく、奉仕者として仕えようとしているわたしたちなのだということを、思い出させてくださいました。

ほんとうに素晴らしい結婚式でした。主がわたしたちに恵みを注がれたので、主の現存とその御力に何も疑問はありませんでした。いただいた溢れる祝福を感謝し、わたしたちは結婚生活をスタートしました。これからも主が、わたしたちの結婚生活の間中ずっと、祝福し続けてくださると信頼しています」

◇　◇　◇

□何かコメントは？

わたしたちの結婚式を計画するには

結婚は、社会的かつ宗教的なイベントです。必然的に、婚約者たちが常にさらされる危険は、社会的な側面ばかり（招待客・披露宴・オルガンを弾く人・祭壇を飾る花・引き出物などのアレンジ）に比重が置かれ、結婚の霊的な次元における準備がおろそかになってしまうことです。聖パウロの時代から、キリスト者の結婚には、「主において」祝われるという特別の意味合いが込められています。この意義ある次元は、現代の結婚の典礼の中に豊富にでてきます。この典礼において婚姻の秘跡を真に与え合うのは、花嫁と花婿です。実際にその典礼に焦点をあててみましょう。

◇キリスト者共同体。キリスト者の結婚は、信仰の祝いです。ここでキリスト者たちは共同体として集まり、神に栄光と賛美を捧げ、神のみことばを宣べ伝え、信仰と希望のうちにみことばに応えます。

◇司祭。司祭は、結婚式においては、教会公認の証人としての役割をもって司式します。

◇花嫁と花婿。婚姻の秘跡を真に与え合う役割は、実際に、花嫁と花婿です。互いに誓いを交わすことを通して、結婚の誓約を宣言します。ふたりの結婚に対する合意こそ、秘跡であるしるしです。なぜなら、十字架上の死を通してイエスがご自分の教会と成された結婚の誓約において、双方ともに洗礼を受けたふたりが、自由意思をもって誓いを与え合い、こうして共に分かち合う者同志となるからです。

◇結婚の典礼。結婚式がミサの中で行われるにせよそうでないにせよ、典礼に則って挙式は祝うものです。ミサの中で行われる結婚の祝いのアウトラインを以下に見てみましょう。

▽入場と入祭の祈り。花嫁、花婿と、結婚式の参列者は、司祭と共に、祭壇の回りに集まります。次に、ミサが通常の式次第にしたがって始まります。

▽みことばの祭儀。前もって選んでおいた聖書の箇所が朗読されます。福音朗読後、司祭が説教をします。

▽婚姻の儀。花嫁と花婿は、司祭の司式進行によって、無条件の愛にまったく自由に合意し誓約を交わします。

▽指輪の祝福と交換。永久の愛を表す忠実のしるし（シンボル）です。

▽共同祈願。ふたりが前もって書き用意しておくことができます。

▽聖体祭儀。感謝と賛美の伝統的な祈りを捧げ、ぶどう酒とホスチア（たてなしパン）を奉献します。

▽結婚の祝福の祈り。花嫁と花婿が好きな祝福の祈りを選ぶことができます。

▽主の祈りと平和のあいさつ。共同体として喜びを分かち合う体験。

▽聖体拝領。双方ともカトリックの洗礼を受けており、前もってゆるしの秘跡を受けているならば…。

▽最後の祝福と退場の歌。

ミサなしの挙式を執り行なうこともあります。

◇　◇　◇

□結婚式の祝いで、わたしは、何がいちばん好きでしょうか？

X　キリスト者の家庭を築き上げるために

結婚式の後、おふたりは、全世界に対してキリストの愛のしるしとなります。これこそまさに、キリスト者のどの結婚にとっても本質的な目的です。

したがって、おふたりが目指す最高傑作は、キリスト者の家庭を築き上げていくことです。

しかし、主の慈しみ溢れる力がなければ、何もすることはできません。

詩篇百二十七の預言的なみことばを思い起こしてみましょう。「主御自身が建ててくだされるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい」

自分の回りをちょっと見ただけで、この聖書の預言がどれほど真に迫った現実となっているか、納得できるでしょう…。

したがって、キリスト者の家庭を築き上げる最善の道を発見すること、さらに、最初の一歩をどこから始めるかが、きわめて重要です。アメリカのことわざでも、「家は、レンガで造るが、家庭は、愛で造るもの」というのがあります。

結論としては、愛に満ち、一致し、開かれた心の夫婦になることが、キリスト者の家庭の土台を据えていくうえで最善の方法です。

結婚における愛の実りとして、子供を産み育てることは、キリスト者の家庭に向かう第一歩です。

子供のいない夫婦も、別の形で、自分たちの愛の実りを表現することができます。たとえば、

◇養子縁組をするとか、里親になる。

◇配偶者がお互い、親、他の愛する人たちに奉仕する。

◇地域社会を支援し援助する。

◇教会の奉仕に参加する。

ところで、キリスト者の家庭とは何でしょうか？

キリスト者の家族の姿

キリスト者の家族はどのようなものかを発見するため、ふたたび聖書に目を向けてみましょう。

◇「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ。地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物すべてを支配せよ。』」（創世記一章27～28節参照）

◇「ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、『何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか』　イエスはお答えになった。『あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。』そして、こうも言われた。『それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。』」（マタイ十九章3～6節参照）

創造主である神が「結婚」を造られたのは、結婚そのもののためではなく、「家族」のためでした。結婚に対する神のみ旨は、「一致（一体となる）」と「オープンさ（産めよ、増えよ）」です。ふたりの配偶者が一体となるのは、神のかたどりであり、さらに、新しい生命（いのち）を産みだすことで、神の創造の御力にまったくあずかることになります。

◇「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。…これ以上に大きな愛はない。』」（ヨハネ十五章12～13節参照）

家族の全員が家庭でイエスの掟を実践しようと真剣に努力しているなら、そのような家族こそ、キリスト者の家族です。では、家庭でイエスの掟を実践するとは、具体的にはどのような内容を意味するのでしょうか？　コロサイの信徒への手紙の中で、聖パウロは、わたしたちの助けとなるみことばを残しています。

◇「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを

□わたしたちにとって、神のメッセージはどのようなものでしょうか？

赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはならない。

子供たち、どんなことについても両親に従いなさい。それは主に喜ばれることです。父親たち、子供をいらだたせてはならない。いじけるといけないからです」

（コロサイ三章12～21節参照）

◇　◇　◇

キリスト者の家族を築くために呼ばれたなら

「主において」結婚することにおふたりが合意したのなら、真剣に準備をし、次のような共同体になっていくよう呼ばれているのです。

□人間の共同体。愛によって築かれ、生命（いのち）を与えられた家族は、人間の共同体です。夫と妻、親と子、親戚らが集う共同体です。まず最初の課題は、忠実と貞節をもって主における一致の現実を生き、家族のひとりひとりのありのままの姿、もっているもの、そのなすことのすべてを正直に分かち合うよう絶えざる努力をすることです。

◇わたしたちそれぞれの家庭には、主における一致が実際にあるでしょうか？

◇自分自身のこと、自分のもっているもの、自分のしたことについて、わたしたちは、親・兄弟・姉妹らに正直に分かち合っているでしょうか？　もし分かち合っていないなら、その理由は？

□生命の共同体。家族としての根本的な課題は、生命に奉仕し、創造主の最初の祝福を歴史上に実現させることです。子供の出産と教育によって、人から人へと神の姿を継承させていきます。神は、生命をないがしろにする今の社会において、創造主としての神の御力に特別にあずかるよう、みなさんを呼んでおられます。

◇子供を持つことについて、わたしたちはどう思っているでしょうか？　中絶や避妊に反対する明確な決意を、わたしたちはもっているでしょうか？

◇わたしたちは、自然な家族計画について学習し、理解し、これに合意していますか？　将来のふたりの結婚生活で責任ある親になるため、わたしたちは何をする必要があるでしょうか？

□愛の共同体。神からの恵みであると同時に、決意であり誓約である愛は、家族の内的原理であり、その力であり、最終到達目標です。神がみなさんを呼んでおられるのは、ご自身の愛をわたしたちが分かち合うため、単に子供を産むにとどまらず、自由と責任を備えた愛をもつ人に子供を教育していくことをも望んでおられるからです。

◇わたしたちが親から受けた教育には、どのような利

点があり、あるいは、どのような欠陥があったでしょうか？

◇将来の自分たちの子供に受け継いでほしいもっとも重要なことは、何でしょうか？　どのようにそれを伝えていくつもりですか？

□キリスト者の共同体。「主において」結婚することを意識的に選択したなら、子供たちにはキリスト教的教育をほどこし、家族自らが「家庭の教会」になっていき、自分たちの暮らす地域社会や共同体にキリストを証ししなければなりません。

◇わたしたちのキリスト者としての信仰は、生き生きした活発なものでしょうか？　肯定、否定のそれぞれのしるしをあげてみましょう。

◇将来の子供にキリスト教的教育をほどこす上で、わたしたちは、どのような障害を克服しなければならないでしょうか？　どうすれば克服できると思いますか？

◇　◇　◇

□わたしたちは、キリスト者の家庭を築いていくという、しっかりした意思をもっているでしょうか？（※）もしちがうなら、何ができ、何をすべきでしょうか？

おわりに

みなさんが婚約者同志なら、
お互いに向き合い、
手を取り、
見つめ合い、
心をひとつにして考えてほしい。

「わたしたちのうちに、
新しい民の世界がまるごと
眠っている。
その民が幸か不幸かは、
ひとえにわたしたちの愛にかかっている…。

創造主であるわたしたちの神により頼み
お互いを深く信頼しよう！

主の名によって、一緒に前進しよう！」と。

みなさんがすでに結婚した夫婦なら、
婚約している人のために時間を割いて、
分かち合ってほしい。
彼らは、
結婚と家族生活について、
おふたりの証しを必要としているのだから。

もしみなさんが、
信徒・聖職者・司祭として
独身生活に身を捧げている方々なら、
婚約している人たちが
そのすばらしい召命と偉大な使命に気づくため、
自分には何ができ何をすべきかを
自らに問いかけてほしい。

そうすれば、
よりよい世界のためにみなが働き、
わたしたちの名は
天に書き記されるだろう！

著者について

この本の著者は、スペインのカトリックの司祭ガブリエル・カルボ Gabriel Calvo 師です。彼が世界的に知られているマリッジ・エンカウンターの創始者です。

マリッジ・エンカウンターは、結婚生活を深めるために1961年にスペインのバルセロナで始まり、現在94か国まで広がっている夫婦のためのプログラムです。これまでに参加した夫婦は数百万組を越え、何らかの影響を受けた人は、数えきれないくらいです。家族の生活を強めるためにカルボ師がお作りになったその他のプログラムもいろいろありますので、おそらく世界的にみても20世紀において彼がだれよりも家族に対して一番深い影響を与えたのではないでしょうか。

この本は、彼のこのような長年にわたる相当な経験に基づいているものです。

カルボ師は、現在米国のワシントンDCに住んでいます。今まで6回ほど日本を訪れ、毎回ご自分のプログラムの幾つかを日本に紹介しました。そのプログラムのほとんどが日本の様々な地方で行われ、日本国内でもカルボ師の影響はかなり広がっています。

この本の他にカルボ師が書いた本のうち2冊が日本語に翻訳されています。さらに、家族の通じ合いを深めるために1冊のワークブックがあり、カルボ師が始めたプログラムの幾つかを体験した全国の多くの方々の証しを集めた本もあります。

これらの本の購入をご希望の方、またはFIRESのプログラムへの参加について関心をお持ちの方は左記にご連絡下さい。

〒106
東京都港区六本木4-2-37
フランシスカン・チャペル・センター
ダナン・マーリー神父　宛

FIRESのプログラム

FIRESとは、

Families　（家族）
Intercommunication　（通じ合い）
Relationship　（関係）
Experiences　（体験）
Services　（奉仕）の頭文字をとったもので、次のことを意味しています。通じ合っている家族でしたら、そのメンバーとの間に深い関係があるでしょう。そしてそのためによい体験をするし、そのような家族こそ本当の意味の奉仕をすることができます。

FIRESのプログラムは、左記のとおりです。

マリッジ・エンカウンター　夫婦の深い出会いのため
マリッジ・リ・エンカウンター　子供との和解のため
マリッジ・レトルノ　神との出会いのため
SADE（Sons and Daughters Encounter）　中高生、青年のため
SADEのレトルノ　神との出会いのため
婚約者のエンカウンター　結婚講座
SELFエンカウンター　自分自身に出会うため
家族のエンカウンター　家族のメンバーがお互いに出会うため
その他

日本語版あとがき

日本語版監修　ダナン・マーリー神父

この本の目的は、知識を提供することではなく結婚生活を目指している読者ならではの自分の体験を得ることにあります。婚約者がこの本を実際に利用して、何が成長で、何が進歩か、何が成功で、何が失敗か、何が幸せで、何が不幸せなのか、その違いをはっきり見分け、実りある結婚生活を送ることができるようにするためです。

この本を善意と謙遜の心から利用するすべての婚約者のみなさんが、ふさわしい準備によって、いつまでも一致した心を持つすぐれた夫婦になることを心から希望しています。